大阪府埋蔵文化財調査報告１９９７－２

みかん山古墳群

１９９８年３月

大阪府教育委員会

１．９号墳遺物　出土状況（北より）

２．９号墳遺物　集合写真

1．10・11 号墳全景（南より）

2．11 号墳出土　脚付鉢

はしがき

大阪府の東、奈良県と接して存在する生駒山西麓と言われる地域には、古墳時代後期を中心とする1000基を越える古墳が知られ、大阪府内でも屈指の古墳群集地帯であります。

その地域に存在する東大阪市も例外ではなく、みかん山古墳群をはじめとして現在の所消滅した古墳を含め、200基以上の古墳が知られています。

その中には、明治初年にウイリアム・ゴーランドが調査し、大阪府内では最も古い型式の横穴式石室を残していた芝山古墳をはじめ、昭和10年に梅原末治氏が調査した五条古墳、昭和24年に小林行雄氏らによって調査がおこなわれ、11体の人骨の出土を見た大薮古墳など、すでに学界に知られた古墳も多く存在する地域でもあります。

今回のみかん山古墳群の発掘調査は、府営枚岡公園駐車場建設工事に先立って平成９年度に実施したものであります。みかん山古墳群は、現在の所12基の古墳が知られており、その内の４基の古墳の発掘調査を実施しました。これら４基の古墳は、２基が５世紀後半に築造された埋葬施設が木棺直葬と推定される古墳、残りの２基が６世紀前半から後半にかけてのもので、埋葬施設が横穴式石室である古墳でした。古墳時代中期に属する小規模な古墳は、東大阪市周辺では、従来平野部で数多く発見されていましたが、今回の調査で山麓にも存在することが明らかになりました。また、６世紀前半の古墳は、東大阪市内では芝山古墳に次ぐ時期の横穴式石室墳で、横穴式石室の変遷を考えるうえで貴重な資料であります。これら５世紀後半の中期古墳と６世紀代の後期古墳との関係は、出土遺物から切れ目なく続いていることが確認され、一家族の墓域であった可能性が高いものと推定しています。これらのように今回の調査によって、数々の成果をあげることができました。

最後になりましたが、発掘調査に当たっては、ご協力いただきました東大阪市教育委員会、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝の意を表すとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成10年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　鹿野一美

例　言

1．本書は、大阪府教育委員会が、大阪府土木部より依頼を受け府営枚岡公園駐車場建設に先立って実施した東大阪市東豊浦町所在みかん山古墳群の発掘調査報告書である。

2．現地調査は、文化財保護課調査第二係技師奥　和之を担当者とし、平成９年８月から平成10年３月にかけて実施した。それに伴う整理作業は、現地調査と並行して資料係が行い、平成10年３月に全ての作業を終了した。

3．調査にあたっては、大阪府土木部公園課、大阪府中部公園事務所工務課、大阪府中部公園事務所枚岡公園管理事務所、東大阪市教育委員会、財団法人東大阪市文化財協会、東豊浦町自治会、および小野久隆（財団法人大阪府文化財調査研究センター）、菅原章太（財団法人東大阪市文化財協会）、中西克宏（財団法人東大阪市文化財協会）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、をはじめ多くの諸機関、諸氏より懇切な助言、ご協力をいただいた。

4．本書の執筆、編集は奥が担当し、英文サマリーについては、本文を要約し有井宏子が執筆した。なお、遺物計測値表については北村美紀が行った。遺構の写真撮影については、担当者が行い、遺物の写真撮影については、伊藤慎次、阿南辰秀、カラー図版の遺物については出合明にお願いした。

凡　例

1．座標、方位については国土座標、標高については東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を基準とした。

2．遺構及び遺物の色調については、小山正忠・竹原秀雄　「新版標準土色帳」　日本色彩研究所　1992　を使用した。

3．古墳の番号については、東大阪市教育委員会発行の「東大阪市の古墳」からの番号を引き継ぎ使用した。

4．遺物は、挿図、図版の番号と一致させた。

目　次

カラー図版
はしがき
例言
目次
第１章　はじめに …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　８号墳の調査 …… 7
　第２節　９号墳の調査 …… 11
　第３節　10号墳の調査 …… 17
　第４節　11号墳の調査 …… 30
第４章　みかん山古墳群の諸問題 …… 44
　第１節　古墳の分布・築造順について …… 44
　第２節　11号墳と芝山古墳との比較について …… 45
　第３節　５世紀代の小規模墳について …… 48
　第４節　中期古墳の立地について …… 52
　第５節　古墳の被葬者像について …… 53
　第６節　まとめ …… 56
参考文献・註 …… 57
出土遺物計測値表 …… 61
英文サマリー …… 66
報告書抄録 …… 70

挿図目次

第１図　東大阪市と調査地点 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　東大阪市内古墳分布図 …… 4
第４図　遺構平面図 …… 6
第５図　８・９号墳平面図 …… 7
第６図　８号墳断面図 …… 8
第７図　８号墳出土遺物 …… 9
第８図　９号墳遺物出土状況図 …… 11
第９図　９号墳断面図 …… 12
第10図　９号墳出土遺物１ …… 14
第11図　９号墳出土遺物２ …… 15
第12図　９号墳出土遺物３ …… 15
第13図　10号墳平面図 …… 17
第14図　10号墳列石実測図 …… 18
第15図　10号墳墳丘土層断面図 …… 19～20
第16図　10号墳北東部列石築造順図 …… 22
第17図　10号墳石室実測図 …… 23～24
第18図　10号墳閉塞石実測図 …… 25
第19図　10号墳羨道部遺物出土状況図 …… 26
第20図　10号墳出土遺物１ …… 27
第21図　10号墳出土遺物２ …… 27
第22図　10号墳箱式石棺実測図 …… 28
第23図　11号墳平面図 …… 30
第24図　11号墳列石実測図 …… 31
第25図　11号墳墳丘土層断面図 …… 33～34
第26図　11号墳平面・平面プラン比較図 …… 35
第27図　11号墳石室築造順図 …… 36
第28図　11号墳石室実測図 …… 37～38
第29図　11号墳遺物出土状況図 …… 40
第30図　11号墳出土遺物１ …… 41
第31図　11号墳出土遺物２ …… 42
第32図　11号墳・芝山古墳平面プラン比較図 …… 45
第33図　芝山古墳出土須恵器 …… 46
第34図　11号墳出土須恵器 …… 46
第35図　総持寺遺跡弥生時代周溝墓・古墳平面図 …… 47
第36図　西福井遺跡古墳平面図 …… 49
第37図　西福井遺跡古墳出土遺物 …… 50
第38図　寛弘寺53～71号墳平面図 …… 51
第39図　植附古墳群平面図 …… 54

表　目　次

表1　みかん山古墳群一覧表 …… 44
表2　総持寺古墳群一覧表 …… 48
表3　総持寺遺跡周溝墓一覧表 …… 48
表4　西福井遺跡古墳一覧表 …… 49
表5　土器計測値表1 …… 62
表6　土器計測値表2 …… 63
表7　土器計測値表3 …… 64
表8　鉄釘計測値表 …… 65
表9　鉄鏃計測値表 …… 65
表10　鉄刀子計測値表 …… 65
表11　鉄鉾計測値表 …… 65
表12　耳環計測値表 …… 65
表13　不明鉄製品計測値表 …… 65

カラー図版目次

図版1　1. 9号墳遺物出土状況（北より）
　　2. 9号墳出土遺物集合写真
図版2　1. 10・11号墳全景（南より）
　　2. 11号墳出土脚付鉢

図版目次

図版1　調査区全景（空中写真）
図版2　調査地遠景
1. 遠景（西上空より）　2. A区全景（西上空より）
3. 調査地全景（西上空より）
図版3　全景
1. A区東側全景（北西より）　2. A区全景（南より）
3. B区全景（南より）
図版4　8・9号墳
1. 8・9号墳全景（南より）　2. 8号墳全景（北西より）
3. 8号墳南周溝断面（西より）　4. 8号墳東周溝断面（南より）
図版5　9号墳
1. 全景（北西より）
2. 周溝遺物出土状況（北より）　3. 周溝断面（南より）
4. 周溝遺物出土状況細部（西より）　5. 周溝遺物出土状況細部（西より）
6. 周溝遺物出土状況細部（東より）
図版6　10号墳
1. 全景（南より）　2. 全景（北西より）
3. 全景（西より）
図版7　10号墳
1. 列石全景（北より）　2. 列石全景（西より）
3. 列石細部（北西より）
図版8　10号墳
1. 石室全景（南より）　2. 石室内部全景（北より）
3. 石室全景（西より）
図版9　10号墳
1. 閉塞石（南より）　2. 閉塞石（北より）
3. 閉塞石断面（西より）
図版10　10号墳
1. 石室内遺物出土状況（西より）　2. 石室内遺物出土状況（北より）
3. 石室内遺物出土状況（東より）　4. 東周溝遺物出土状況（西より）
5. 東周溝遺物出土状況（北より）　6. 東周溝断面（南より）
7. 奥壁裏込断面（西より）　8. 左側壁裏込断面（北より）
9. 北周溝断面（西より）　10. 列石断面（西より）
11. 西墳丘裾部断面（南より）　12. 西墳丘裾部断面細部（南より）
図版11　10号墳
1. 箱式石棺全景（西より）　2. 箱式石棺全景（北より）
3. 箱式石棺土層断面（南より）
図版12　11号墳
1. 全景（南より）　2. 全景（西より）
3. 北周溝断面（西より）　4. 北周溝断面細部（西より）
図版13　11号墳
1. 全景（北より）　2. 石室全景（西より）
3. 奥壁裏込断面（西より）
図版14　11号墳
1. 石室全景（南より）　2. 奥壁（南より）
3. 西側墳丘盛土断面（南より）　4. 東側墳丘盛土断面（南より）
図版15　11号墳
1. 列石全景（北より）　2. 列石全景（南西より）
3. 列石細部（北より）
図版16　11号墳
1. 玄室遺物出土状況（南より）　2. 玄室遺物出土状況細部（南より）
3. 玄室遺物出土状況細部（南より）　4. 玄室遺物出土状況細部（南より）
5. 玄室遺物出土状況細部（西より）　6. 玄室遺物出土状況細部（西より）
7. 羨道部遺物出土状況（西より）　8. 羨道部遺物出土状況（南より）
9. 南西墳丘裾部遺物出土状況（南より）
図版17　出土遺物
8・9号墳
図版18　出土遺物
9号墳
図版19　出土遺物
10・11号墳
図版20　出土遺物
11号墳
図版21　出土遺物
金属器

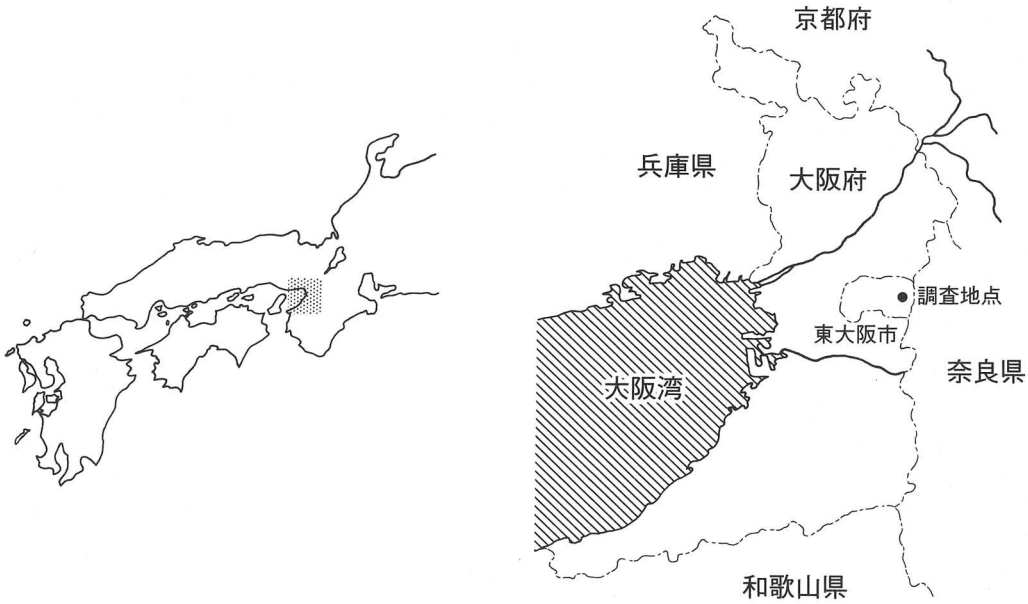
第１章　はじめに

みかん山古墳群は、東大阪市東豊浦町から山手町にかけて群集している古墳群（第１・２図、図版１・２）で、番匠川によって形成された額田谷と暗越奈良街道沿いの豊浦谷に挟まれた標高80mから120mの尾根上にあり、東西約370m、南北約160mの範囲に現在12基の古墳が確認されている。遺跡の名称は、本来字名を用いることが多いが、みかん山古墳群の場合は異なり、戦前にこの斜面にみかん畑が広がっていたことに由来する。この古墳群周辺は、近年まで大規模な開発が行われなかったため、３基の古墳のみ知られていた。しかし、平成６年に東大阪市教育委員会によって、共同住宅の建設に先立って実施された発掘調査の結果、新たに３基の古墳が発見された。

今回の発掘調査の契機となった府営枚岡公園は、大阪府の東部、東大阪市東豊浦町地内の生駒山西麓一帯に所在する。特に梅の開花時期には花見客で賑い、付近に駐車場が少ないため公園に通じる道路は、車が通れないほど不法駐車が存在している。そのため付近の住民からは、公園に対して苦情が毎年のように出ており、それを解消するため駐車場を建設することとなった。

発掘調査区域は、以前共同住宅建設の計画があり、この周辺が周知の遺跡であるみかん山古墳群に含まれることから、昭和63年に東大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、その結果数基の古墳が確認された。しかしその計画は中止になり、放置されたままであった。

その後、大阪府によってその土地を買い取り枚岡公園の駐車場を建設する計画が浮上した。東大阪市教育委員会が実施した試掘調査の結果に基づき、本府教育委員会と本府土木部公園課とが



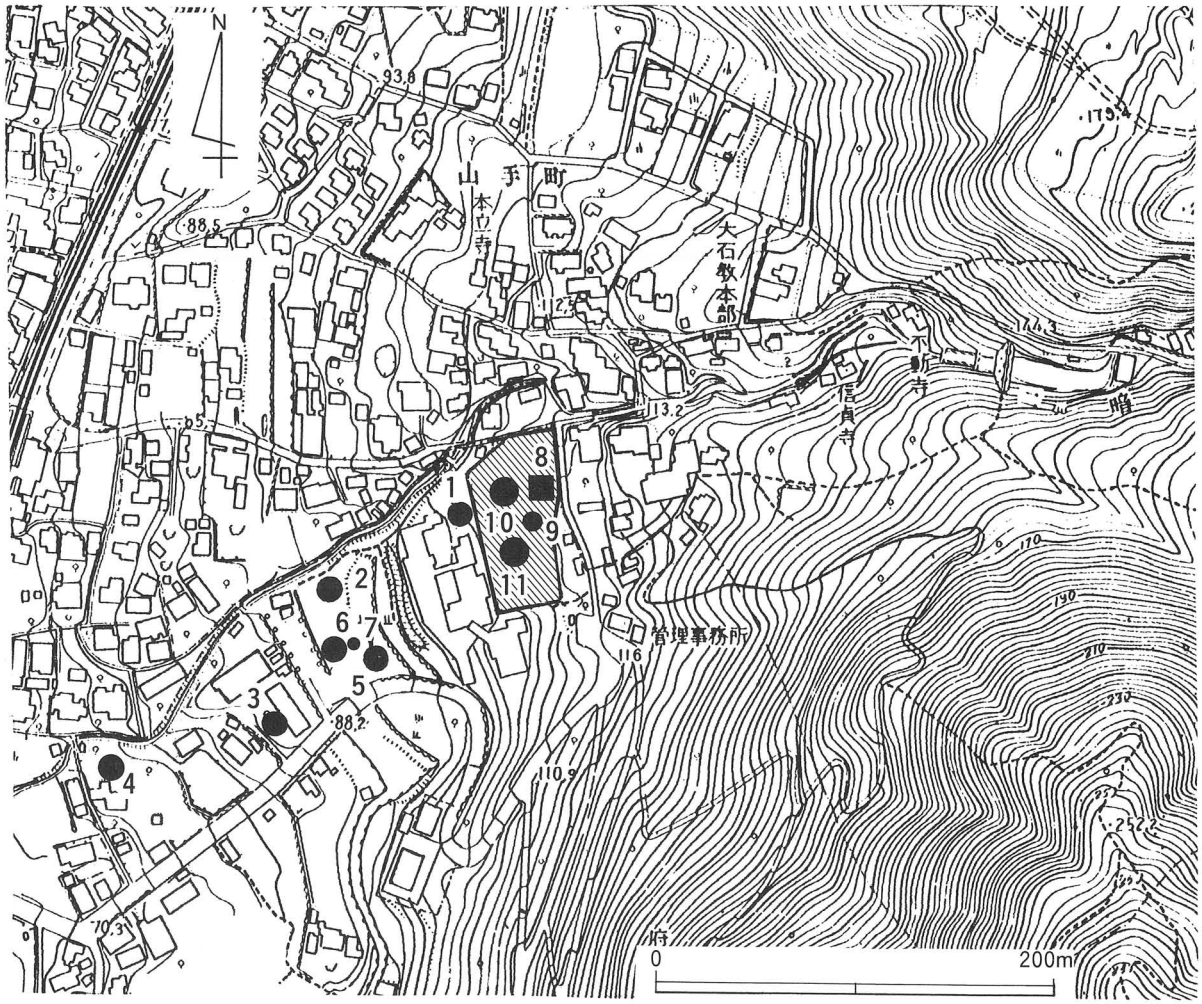
第１図　東大阪市と調査地点

協議を実施し、平成９年度に大阪府教育委員会が発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、古墳が存在すると推定される地区全域を対象にし、面積は約3500㎡を測る。

現地調査は平成９年８月18日から平成10年２月29日まで実施し、それにかかる整理作業は現地調査と平行して行い、平成10年３月31日にすべての作業は終了した。

発掘調査の結果、５世紀後半の古墳２基、６世紀代の古墳２基（第４図）、また古墳の副葬品などが多数発見された。これらの調査成果を府民、一般に公開するために、平成10年２月28日に現地説明会を開催し、多数の地元住民および府民の参加を得た。

発掘調査の方法は、調査範囲が、敷地全域に及ぶため残土置き場が確保出来ないこと、また、周辺の道路が狭いため掘削土の搬出が不可能であることにより、まず最初に北側の約２分の１を調査し（Ａ区）、調査終了後南側の調査（Ｂ区）を行うこととなった。しかし、反転を行う場所の境界周辺に古墳が発見されたために、古墳の全体像を明らかにするためには古墳全体を一度に調査する必要があったことと、現地説明会を開催する時点には、調査が終了した古墳を出来るだけ埋め戻さず、多くの古墳が見学出来るように、南側の掘削土を北側調査区の縁辺部に配置した。調査は、まず最初に盛土および表土を機械によって0.3m程度除去した後、それ以下については人力によって約0.3mの掘削を行い実施した。



第２図　調査区位置図

第2章　位置と環境

1．位置

みかん山古墳群は、東大阪市東豊浦町、山手町にかけて群集している古墳群で、現在12基の古墳が知られている。みかん山古墳群は、北側に番匠川によって形成された額田谷と南側には番匠川に注ぐ小河川に挟まれた、尾根沿いの標高約80mから120m、東西約370m、南北約160mの範囲に存在する。調査地は、標高約104mから112m、幅約60m測る狭い尾根筋上に存在し、みかん山古墳群の中ではもっとも高所に位置している。

2．地理的環境

東大阪市は地形的に見ると、東より西に、山岳部（標高150m以上）、山麓部（標高150～10m）、平野部（標高５～10m）の３つに大別できる。

山岳部の稜線は、ほぼ南北に大阪府と奈良県を画している。生駒山地（最高峰生駒山－標高642.3m）は、褶曲的隆起運動によって生じた花崗岩・閃緑岩系の岩石によって構成されており、奈良県側の傾斜が緩やかなのに対して、大阪府側は急斜面をなしている。

山麓部は、生駒山西麓に広がる扇状地の性格をもつ低位段丘が発達している。生駒山地より西に向かって、西下する中小の河川が、0.7kmから１kmの間をおいてこの段丘を開折している。その急な西斜面には、複合扇状地が発達している。今回報告するみかん山古墳群をはじめとする数多くの古墳群がこの地形上に分布している。特に標高20m前後を測る地域は、縄文時代以降各時代の遺跡が、最も多く認められる。

平野部は、旧大和川によって運ばれた土砂によって肥よくなデルタ地帯を形成している。その当時の河川の自然堤防上には弥生時代前期からの遺跡が数多く認められる。

3．歴史的環境（第３図）

周辺の歴史的環境については、該応の報告書などに数多く紹介されているので全体については省略し、みかん山古墳群の時期である古墳時代、特に中期から後期にかけての古墳を中心に記述する。なお、古墳の時期・分布については、『東大阪市の古墳[1]』、『原始・古代の枚岡[2]』の多くを参考にし、引用した。報告書等が発行されている古墳については、これらの資料を再検討し、明らかに時期が異なる場合については、私見に基づき決定した。

東大阪市周辺の古墳群については、1872年にイギリス人ウィリアム・ゴーランドによって発掘調査が実施された埋葬施設に古式の横穴式石室をもつ前方後円墳である芝山古墳[3]。1935年には梅原末治によって調査された五条古墳[4]。京都大学考古学教室によって1949年に調査され、11回もの追葬が確認された大薮古墳[5]。同じく1949年には、末永雅雄によって墓尾古墳群[6]の調査。1967年には藤井直正、都出比呂志、河内歴史研究グループらによって東大阪市周辺の古墳の系統的調査[7]など学史的に著名な古墳が多い。

この周辺での古墳の初現は、南の東大阪市との境付近に存在する八尾市域内に60mから70m級

第3図　東大阪市内古墳分布図

の前方後円墳である西の山古墳、花崗山古墳、向山古墳[8]などを挙げることができる。

東大阪市域では最も古い古墳とされるのは、4世紀末に比定されているえの木塚古墳[9]を挙げることができ、現在の所、それ以前の古墳は発見されていない。

次に、古墳時代中期になると5世紀前半とされる塚山古墳[10]を挙げることができる。これらのほかに中期とされる古墳は、植附古墳群[11]、大賀世古墳群[12]、舳古墳[13]、山賀古墳[14]、巨摩1号墳[15]、戎山古墳[16]、段上古墳群[17]などがあり、数は限られている。時期的には、5世紀中ごろから後半にかけてのものが多い。中期古墳の立地は、標高202m付近の山腹に存在する戎山古墳を除き、標高35m以下の山麓部低地から平野部にかけて存在するものが多い。植附古墳群を除き、埴輪が出土する例が多く認められる。

5世紀後半には、現在は破壊されて詳細は不明であるが、戎山古墳の例に認められるように、埋葬施設に横穴式石室が採用されている。大阪府内では採用の時期が早い方といえる。横穴式石室の採用は、出土遺物からみるとウイリアム・ゴーランドによって調査された6世紀初頭とされる芝山古墳[18]が次にくるようである。

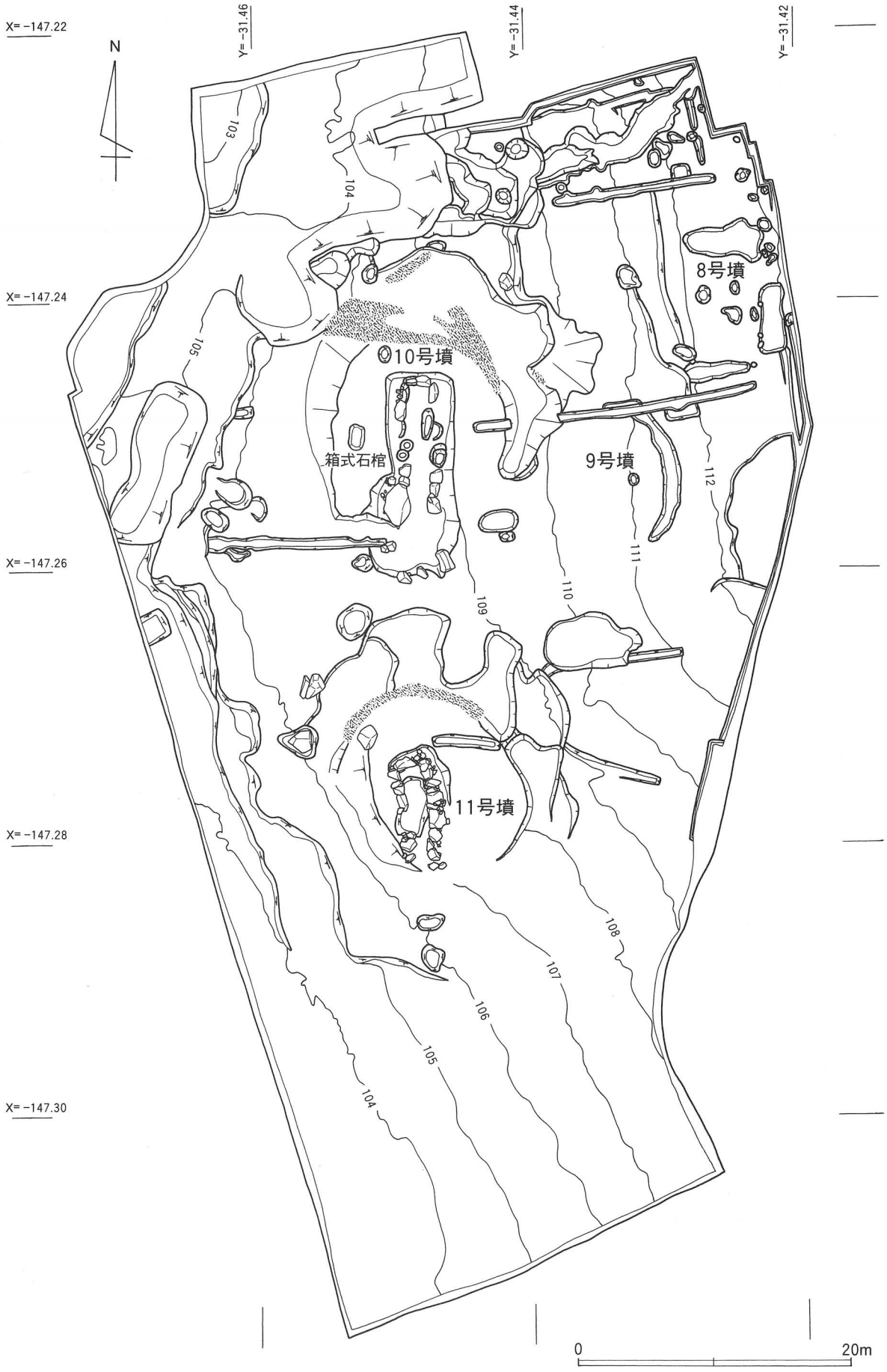
6世紀前半になると山畑古墳群[19]をはじめとする群集墳の造成が始まり、6世紀後半に盛行期を迎え、東大阪市内で確認されている古墳の時期のほとんどを占める。分布の状況は、東大阪市の東南部の上四条町から客坊町にかけて現在68基が確認されている山畑古墳群を中心に、五条山[20]、客坊山[21]、花草山[22]、五里山[23]、六万寺[24]などの古墳群[25]が、生駒山西麓の東西約1.2km、南北1.2kmの範囲に集中して存在し、その数は120基を越える。

特に群集している山畑古墳群周辺の古墳群については、墳形が、前方後円墳、円墳などの標準タイプの形態をもつ古墳に混じって、瓢箪山古墳（山畑52号墳[26]）のような双円墳、山畑2号墳のような上円下方墳[27]、山畑18号墳[28]のような方墳が存在する。

これらの古墳群から出土した遺物の中に馬具類が多く混じっていることから、当時重要な役目を果たした騎馬を飼育していた馬飼部を率いる、百済系の渡来氏族（河内首）によって造営された古墳群[29]と考えられている。これらの群集墳から北と南側は少なくなる傾向を示し、10基前後の群集墳が山麓の尾根筋に点在している。今回報告するみかん山古墳群は、集中する地域のほぼ中心より、約1.6km北に存在する。

これらの古墳群の造営は全体的にみると6世紀末には終了し、追葬が7世紀前半には終わるようである。

これに対して東大阪市の東北部石切町周辺は、7世紀の前半から形成を見る墓尾古墳群[30]やイノムラキ古墳[31]などが存在し、続いて火葬骨壷や土製墓誌板を伴う火葬墓が多く認められる。周辺の群集墳の消滅、追葬が終了する段階に新しい展開をみせている。


X=-147.22
X=-147.24
X=-147.26
X=-147.28
X=-147.30
Y=-31.46
Y=-31.44
Y=-31.42
N
8号墳
10号墳
9号墳
11号墳
箱式石棺
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
0
20m

第4図　遺構平面図

第３章　調査の成果

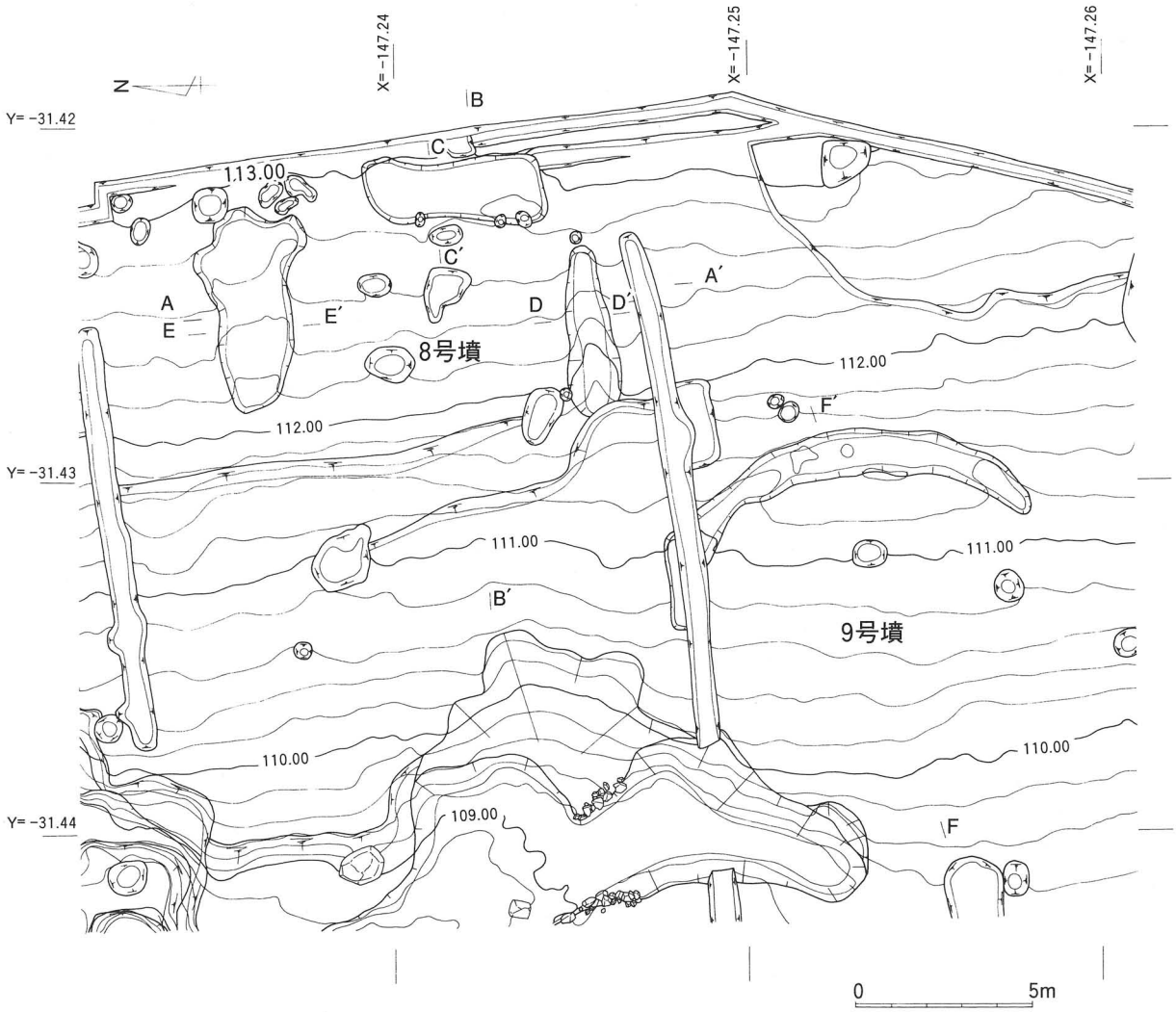
第１節　８号墳の調査

１．概要

８号墳（第５・６図、図版４）は、調査区の北東端のＸ＝－147.24、Ｙ＝－31.425付近を中心とし、今回調査を行った古墳の中では最も高所に位置し、標高約112.5mを測る。墳丘は東から西に下る丘陵尾根筋のほぼ中央の傾斜地形に築造され、山側の最も高い地点で標高約113.0m、西の最も低い地点で111.5m、高低差は約1.5mを測る。しかし墳丘の大半は、調査区の中では最もフラットな面を形成している地点に存在する。古墳の盛土は、後世に削平を受け消滅し、周溝のみを検出した。

２．周溝

周溝は、標高の高い側の東、北、南側に残存していた。西側は検出時に墳丘の東西辺が南北辺より短いことから、墳丘が欠失したと推定され、溝が存在していたかどうかは不明である。溝は、

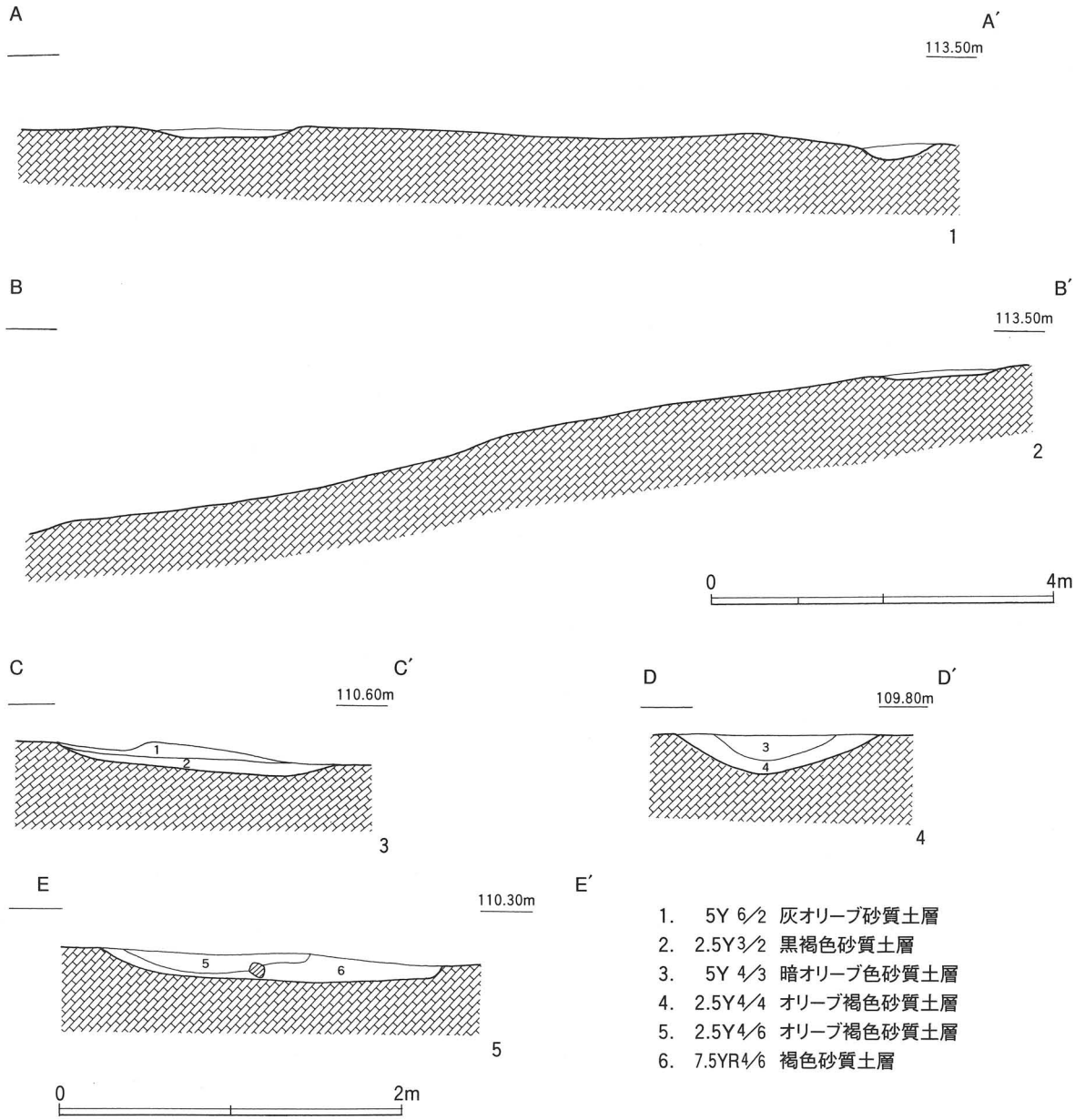


第５図　８・９号墳平面図

北東辺および南東辺部には溝が存在してなく、ブリッジ状をなしていた。また北溝の南辺部も地山面がほぼフラットにもかかわらず溝が消滅しているためブリッジが存在していた可能性がある。東溝と北溝の底面はほぼフラットであるが、南溝は斜面に沿って徐々に低くなり、斜面が急になる地点で消滅する。これらの平面の形状から東西辺約6.3m以上、南北辺約7.8mを測る方墳と考えられる。

周溝の計測値は、東溝（第６－３図、図版４－４）が長さ約5.2m、幅約1.7m、深さ約0.15m、南溝（第６－４図、図版４－３）が長さ約4.8m、幅約1.5m、深さ約0.25m、北溝（第６－５図）が長さ約5.9m、幅約2.1m、深さ約0.15mを測る。

ブリッジは、東北辺部が長さ約2.0m、東南辺部が長さ約1.3m、北西辺部は長さ約1.5m以上を測る。



第６図　８号墳断面図

3．埋葬施設

墳丘内の地山を精査したが埋葬施設の痕跡も検出出来なかった。そのことから地山直上に盛土によって墳丘が築造され、その内部に埋葬施設が存在したものと推定される。そのため後世に盛土が流出ないしは削平されたため、埋葬施設は欠失したものと考えられる。埋葬施設は不明であるが、古墳の周辺から石室に使われていたような石材が出土しなかったことから、木棺直葬であった可能性が高いと考えられる。

4．遺物の出土状況

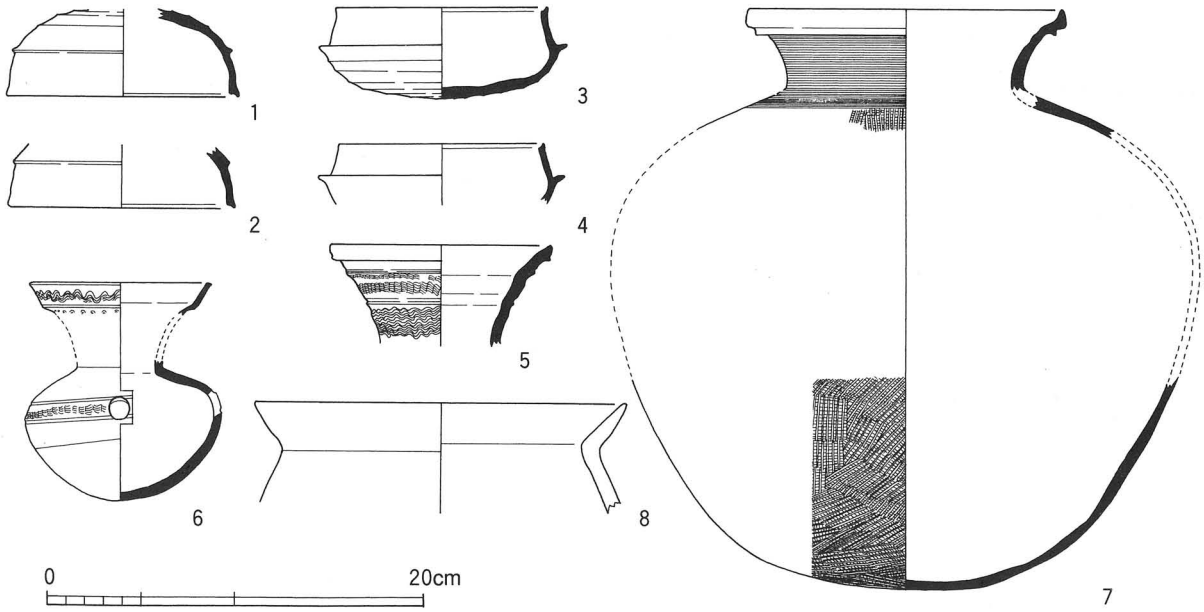
東溝と南溝の埋土から須恵器、土師器などが点在して出土した。北溝からは、全く遺物は出土しなかった。これらの遺物は、出土状況などから現位置を保っていたものではなかったと推測される。しかしそれらが、埋葬施設内にあったものか、墳丘上に設置されたものが、墳丘盛土の崩落により周溝内に転落したものかは不明であるが、出土状況から推定すると墳丘上または埋葬施設内に存在していたものが転落して周溝内に落ち込んだものと考えている。

5．出土遺物

遺物（第７図）は、すべて周溝の埋土から出土したもので、東溝からは３・４・７・８、南溝からは１・２・５・６である。

坏蓋は２個体図化できた。１（第７－１図、図版17－１）は天井部が丸みを帯び、約２分の１にヘラケズリを行っている。稜以下の口縁部と天井部との割合は約２分の１である。稜は断面三角形に近くするどい。口縁部はやや内傾し、端部は断面三角形に近く、凹線を巡らす。２（第７－２図）は天井部が欠損している。稜は断面三角形に近くするどい。稜から口縁端部にかけてやや外側に直線的にのび、端部は断面三角形に近い。

坏身は２個体図化できた。３（第７－３図、図版17－３）は受部から口縁部にかけてやや外反



第７図　８号墳出土遺物

気味に直線的にのびる。立ち上がりは高く、器高の約２分の１を占める。受部は比較的長くほぼ直線的に延びる。底部の３分の２以上にヘラケズリを施している。４（第７－４図）は体部を欠損している。受部から口縁部にかけてやや内傾し、立ち上がりは高い。口縁端部は断面三角形に近く、内面に凹線を巡らす。受部は外上方にのび、比較的長い。

壷（第７－５図）は、口縁部のみで体部は欠損している。体部端から口頸部は外上方に延び、口縁端部は断面三角形を呈する。口縁端部から下には、２本の短い突帯で区画し２箇所に文様帯を作り、中に波状文を施している。

瑕（第７－６図）は、口頸部は欠失している。口縁部は短く、外方に開き端部は水平である。外面に波状文を施す。口縁部と口頸部の境には波状文が一部認められる。このことから欠損している口頸部には波状文が施されているものと推定される。体部最大径はやや上方にあり、ソロバン形に近い。体部最大径よりやや上方に円孔が開けられ、外面に２条の沈線を配置しその内に波状文を施す。体部下は、ヘラケズリの後ナデによって仕上げている。

甕（第７－７図）は、口縁部から体部上面と体底部のみ残存していた。ゆるやかに外反する口頸部をもち、口縁端部は上方に屈曲し、内面は内側に丸みを帯びる。端部下には回転ナデによる凸線を巡らしている。口頸部から体部境にかけては外面にカキ目を巡らし、口縁部と内面は回転ナデによって仕上げている。体部中央付近から上方にかけて欠損しているが、形状から最大径はやや上方にくるものと推定される。底部はやや平たく、外面に格子目タタキ、内面は同心円タタキの後ナデによりすり消している。

土師器甕（第７－８図）は、体部の破片も少量出土したが、口縁部から体部上面のみ図化できた。口縁部はくびれ部から外上方に直線的にのび、端部は断面三角形に近い。内外面の調整は、摩滅のため不明である。

６．小結

７号墳は、周溝のみ検出した。墳丘の西側が欠損しているが、周溝の形状から一辺約６ｍ前後を測る小規模な方墳と推定される。周溝の東南辺と東北辺ブリッジが存在し、また北西辺にもその可能性が推定されるという特徴をもつ。周溝から出土した須恵器から時期は、田辺編年のＴＫ208からＴＫ23型式にかけてのもの、中村編年のＩ型式３段階に比定され、５世紀後半と推定される。

第２節　９号墳の調査

１．概要

９号墳（第５・９図、図版４－１・５－１）は、調査区の中央よりやや北東、Ｘ＝－147.254、Ｙ＝－31.434付近を中心とし、７号墳南側のやや下方に位置し、標高110.8m前後を測る。

古墳は、丘陵尾根筋より南側の傾斜地形に、盛土によって築造されたため削平を受け、山側の約東半分に周溝のみ残存していた。

２．周溝

９号墳の山側に存在する周溝（第９－２図、図版５－３）は、最大幅約1.2m、深さ約0.15mを測り、平面形では三日月状に円弧を描く。周溝南北の端部は、溝底と斜面が平行となり収束する。

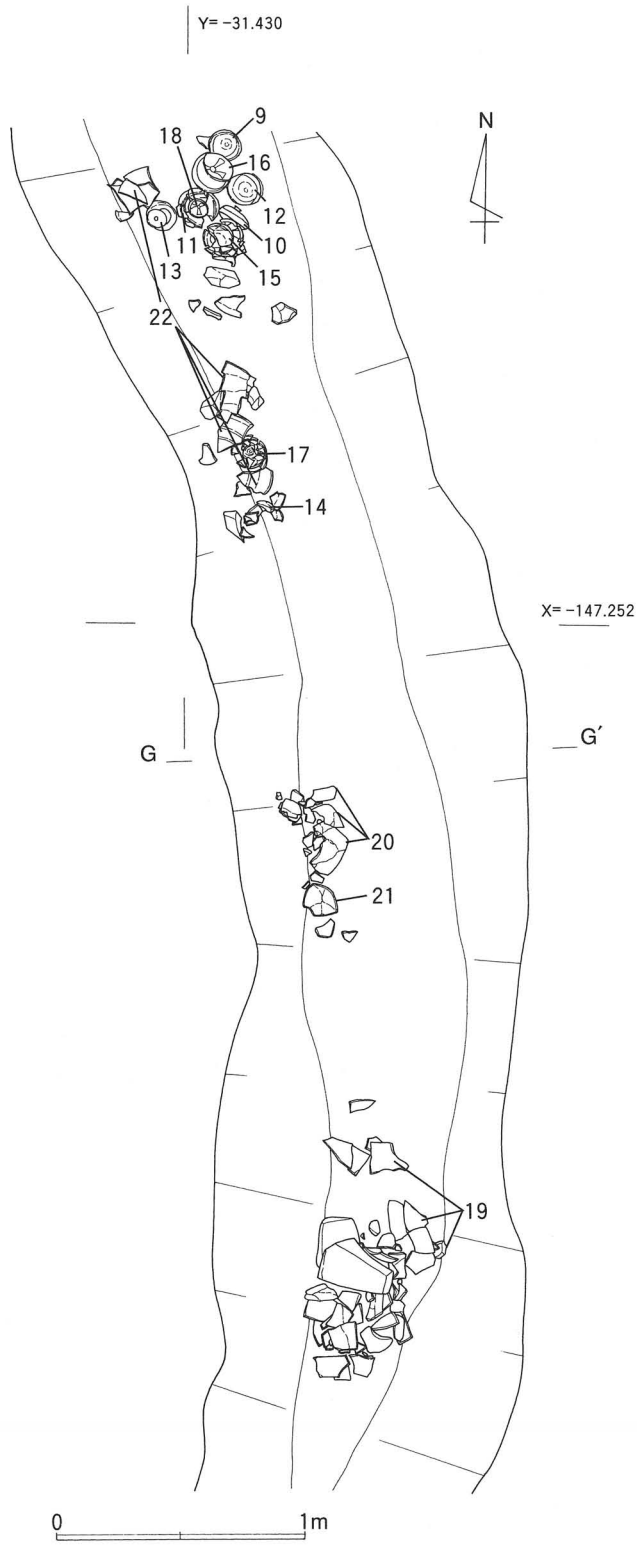
古墳の北西辺部とされる地点には、後に築造された10号墳の周溝が存在する。その周溝の外側の南東端から約３mの間は、東の山側に存在する周溝とほぼ同様な径で円弧を外側に描くことから10号墳の周溝と境を接し、一部を共有していた可能性が高い。

これらから９号墳は、径約9.4mを測る小規模な円墳と推定される。

３．墳丘

墳丘の盛土は、後世の削平ないしは流失により全く存在しなかった。古墳の検出面での高低差は、東の山側と西の斜面側では約1.6mを測ることから、比較的急な斜面上に盛土によって築造されていたものと推定される。

このことから墳丘の高さは、西側の低い地点で1.6m以上あったものと推



第８図　９号墳遺物出土状況図

定される。

4．埋葬施設

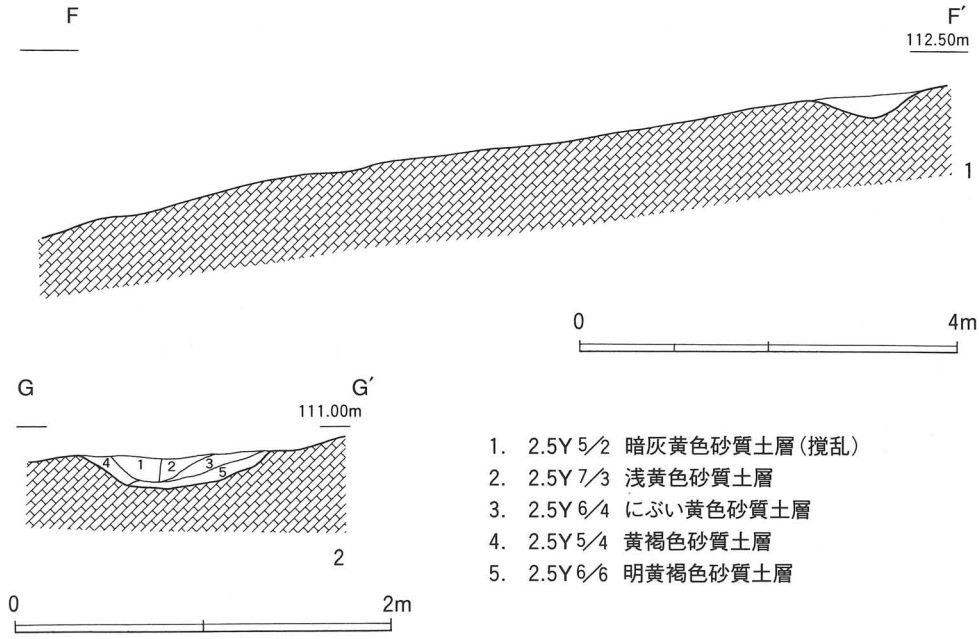
墳丘内の地山を精査したが、埋葬施設の痕跡も検出出来なかった。そのことから埋葬施設は、地山直上に盛土によって墳丘が築造され、その内部に存在していたものと推測される。そのため後世に盛土が、流失ないしは削平されたため、埋葬施設は欠失したものと考えられる。古墳の周辺からは石室に使われていたような石材が出土しなかったため、埋葬施設は木棺直葬であった可能性が高いと考えている。

5．遺物の出土状況

遺物は、残存する周溝のほぼ中央X＝−147.250、Y＝−31.430からX＝−147.255、Y＝−31.429付近の長さ約3.4m間に集中して出土した（第8図、図版5－2・4・5・6）。出土した遺物の種類は、須恵器がほとんどで、有蓋高坏蓋4個体、有蓋高坏5個体、無蓋高坏1個体、器台1個体、甕3個体で、他に不明鉄製品片1個体がある。

これらは、周溝底から0.05mから0.1m程度浮いた状態で出土した。出土状況は、北側約0.6mの間に有蓋高坏3個体、有蓋高坏蓋4個体、無蓋高坏1個体（図版5－4）が集中している。ほとんどが裏を向けて出土しているが、15のように上向きのものもある。有蓋高坏蓋は、有蓋高坏の周辺にほとんどが接して存在していることから、蓋をした状況で配置されていたものと推定される。

そこから0.8mの付近に有蓋高坏1個体がほぼ立っている状況で出土した。これら2箇所に器台片が点在して出土し、特にこの2箇所の間に脚部片が多く出土している。他の地点は坏部片の出土が多かったことにより、この地点に器台が配置されていた可能性が高い。



第9図　9号墳断面図

それらから南へ約1.0m離れた地点に、20・21の甕2個体（図版5－6）が出土している。甕は上向きに置かれたものと推定され、21は口縁部から体部上半が欠損していた。

そこから南へ約0.7m離れた地点に、甕1個体（第10－19図）が出土している。出土状況は、破片が多く不明な点が多いが、上向きに配置されていたものと推定される。

不明鉄製品片（第11－23図、図版21－23）は、北側の高坏が多く存在する地点周辺で出土した。

出土した遺物は、比較的完形品が多く、器種ごとに集中している傾向が認められる。調査時に出土状況を平面で観察すると、一部には立っている状況で出土しているものもある。これらは、転落して周溝内に落ち込んだ状況ではなく、配置しているように見受けられた。これらの遺物が、埋葬施設内の副葬品であれば、斜面側の西墳丘外に点在して出土するものと推定されることから、周溝内に配置されたものの可能性が強い。出土した須恵器の中には、17（図版5－5）の高坏、20・21の甕は、他のものと異なり焼成が甘く、使用には耐えられないと思われるものも含まれている。

これらのことから、墳丘上で祭祀が行われた後に周溝内に置かれたものか、周溝内で行われたものかは判断できなかったが、墓前祭祀が行われた形跡ではないかと考えている。

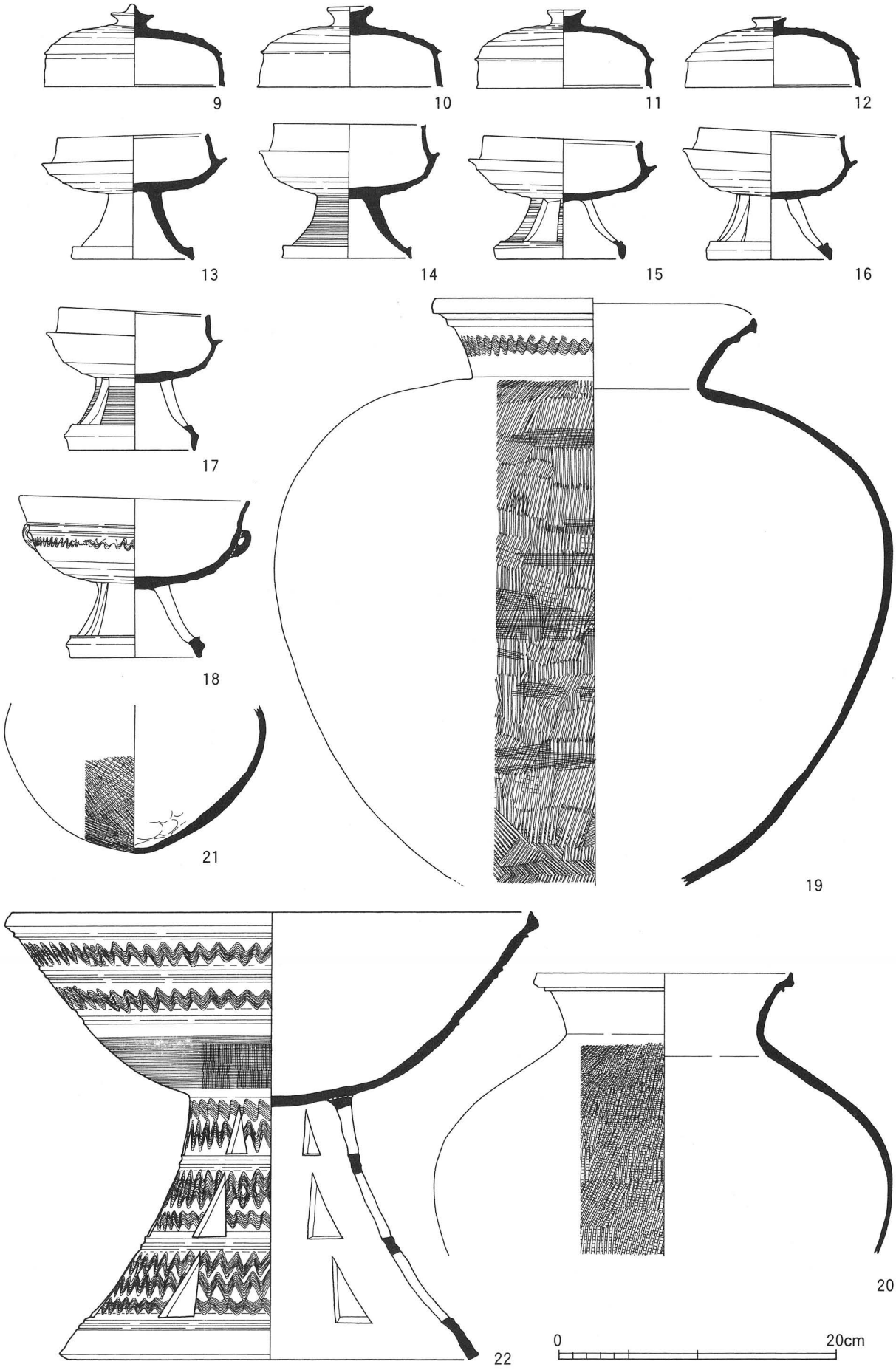
これらの遺物以外に古墳周辺を掘削中に須恵器甕片（第12－24図）が出土している。

5．出土遺物

周溝内からは、須恵器14個体、不明鉄製品1個体が出土した。

有蓋高坏蓋は4個体（第10－9～12図、図版17－9～12）出土した。器高の比率は、稜以下の口縁部が2分の1以上を占める。天井部と口縁部の境にある稜は明瞭で断面三角形に近い。口縁部は、直立気味のもの（9・11）とやや外反気味（10・12）がある。口縁端部断面は凹面を有し、平らに近いもの（9・10）、三角形のもの（11・12）がある。天井部は、やや平らなもの（9・10）とやや丸みを帯びているもの（11・12）の2種があり、3分の2以上にヘラケズリを施している。天井部中央に存在するつまみは、凹むもの（10・11・12）が大半であるが、乳頭状の突起をもつもの（9）も存在する。セット焼きの痕跡が、明瞭に認められるのは12のみである。11は、外面と内面の色調が異なるため可能性が高いが、断定はできない。9と10は、焼成が比較的甘いため不明である。

有蓋高坏（第10－13～17図、図版17－13～16・18－17）は5個体出土した。坏部は、体部が比較的浅いもの（13・15）と深いもの（14・16・17）があり、外面のヘラケズリは2分の1（14・17）と3分の2以上（13・15・16）がある。受部は比較的長く外上方にのびる。立ち上がりは高く内傾し、直線的なもの（13・15）、内弯気味なもの（14・16・17）がある。端部は、断面三角形に近いものが多く、角張るものが1個体（14）ある。その端部外面すべてに凹面がある。脚部は「ハ」の字状にのび、端部が断面三角形のもの（13・14）、逆「く」の字形のもの（15・16・17）があり、後者には、台形の三方透かしを有する。外面の調整はカキ目のもの（14・15・17）と回転ナデ（13・14）で仕上げたものがある。これらには、受部外面にセット焼きの痕跡がすべ



第10図　9号墳出土遺物1

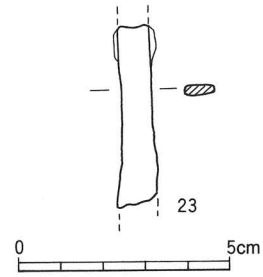
てに認められる。

これら有蓋高坏蓋と有蓋高坏とは一部を除き、焼成と口径、胎土、出土状況などから9と13、10と14、12と16、11と17とがセット関係にあるものと推定される。これらセット関係になるものは、胎土、焼成がほぼ同様な値を示すが、口径、受部に存在するセット焼きの痕跡が、若干異なることから、これら全てセットで焼かれたものではない。胎土、焼成、色調、調整方法、形態の特徴などから、同じ窯で焼かれた焼かれたと推定されるものは、9・10・13・14と12・16が可能性が高いと考えられる。

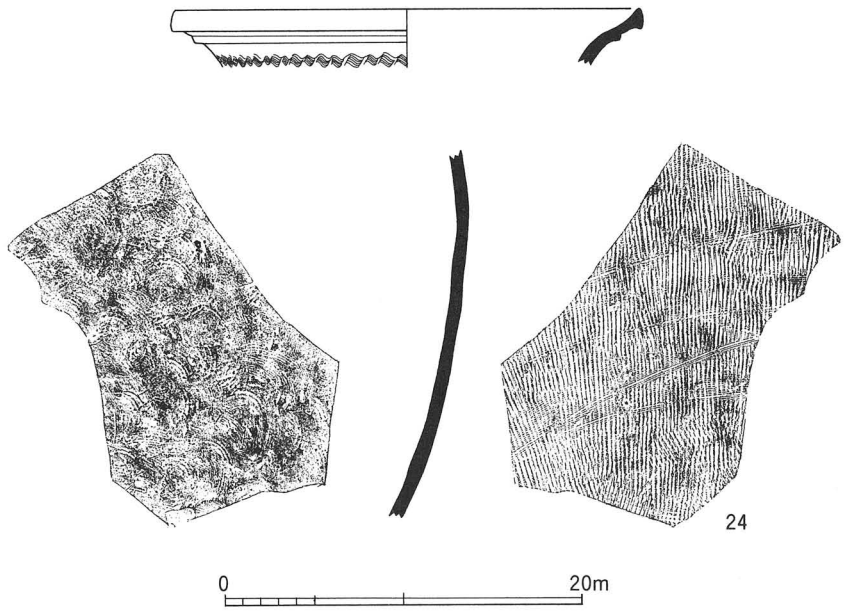
無蓋高坏（第10－18図、図版18－18）の坏部は深く、口縁はやや外上方にのび、端部は丸い。口縁と体部の境には2条の突線を有し、その下には、波状文を施す。その部分の左右対称な位置に、把手2個を貼付している。底体部の約2分の1にヘラケズリを施している。脚部は「ハ」の字にのび、脚部の端部は逆「く」の字形をなし、台形の三方透かしを有する。

甕は3個体出土した。19（第10－19図、図版18－19）は、底部が欠損し、その形状が丸くなっていたため、穿孔していた可能性がある。頸部から口縁部にかけて外上方に伸び、端部は断面三角形を呈し、その下には突帯を巡らす。頸部には波状文を施す。体部は肩部が張り出し、上方に最大径が存在する。外面には格子目のタタキ、内面に同心円タタキの後ナデによりすり消している。20（第10－20図）は、19より小型のもので、体底部は欠損している。形態は頸部に波状文が存在しないことを除くと極めて酷似している。焼成は、不良である。21（第10－21図）は、底部のみ残存し、焼成は不良である。

器台（第10－22図、図版18－22）の坏部は、底部から斜め上方に内弯気味にのび、比較的深い。口縁端部は断面三角形に近い形を呈する。坏部上方の3箇所にロクロ成形により1条から2条の突線で区画し、文様帯を2



第11図
9号墳出土遺物2



第12図　9号墳出土遺物3

箇所作り、その内部に波状文を施す。その下から脚部の境にかけては、タタキの後カキ目を施している。坏部と脚部の接合場所には、坏底部外面に放射状のキザミ目を入れ、接合しやすくしている。接合の後、回転ナデによって仕上げている。脚部は外反気味に「ハ」の字状にのび、端部は角張る。脚部の３箇所に回転ナデによる２条からなる突線で区画し文様帯を作る。内部に２条ないしは３条の波状文を施している。三角形の透かしを各文様帯ごと６箇所に直線的に配置している。

不明鉄製品（第11－23図、図版21－23）は、断面が長方形をなし、両端が欠失している。当初鉄鏃の茎部と考えていたが、幅がそれらより長いため、その可能性は低い。長細い製品と考えられるが用途は不明である。

６．小結

９号墳は、周溝のみ検出した。周溝から径約8.0mを測る小規模な円墳と推定される。古墳の北西側において、10号墳と周溝の一部を共有していることから、少なくとも10号墳が築造されていた時点までは、墳丘が存在していたものと推定される。

埋葬施設は、墳丘が流失していたため欠失していたが、墓前祭祀に使用したと推定される遺物が東周溝から多量に出土した。出土した遺物は、出土状況からほぼ現位置をとどめていたものと推定される。

出土した須恵器から時期は、田辺編年のＴＫ208型式、中村編年の第Ｉ型式３段階に相当し、５世紀後半と推定される。ただ乳頭状の突起の付いたつまみをもつ高坏蓋（９）は、定型化前の初期須恵器の伝統を引き継いだものと考えられる。同じように古い要素をもっているものと考えられるものとしては、13の有蓋高坏がある。しかし出土した須恵器のほとんどが定型化していると考えられることから、その型式の範疇に修まるものの、古い段階に属するものではないかと考えている。

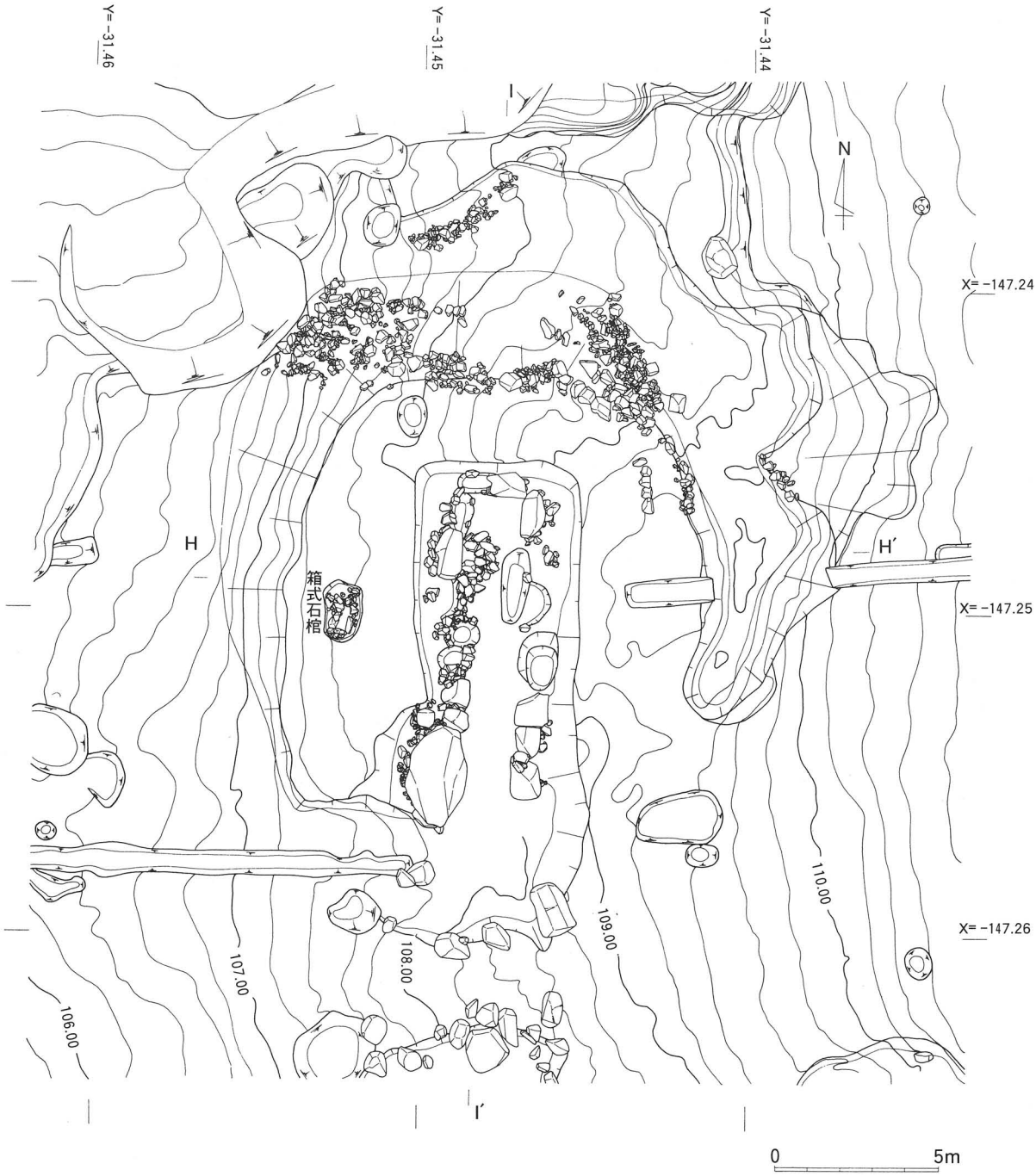
第３節　10号墳の調査

１．概要

10号墳（第13図、図版６）は、調査区の北西側、８・９号墳西のＸ＝－147.25、Ｙ＝－31.448付近を中心とし、標高約108m前後に位置する。調査前の現況は、石室内がゴミ捨て場になっており、周辺にはゴミが散乱し、横穴式石室の玄室左側壁の石材１石のみが表面に露出していた。

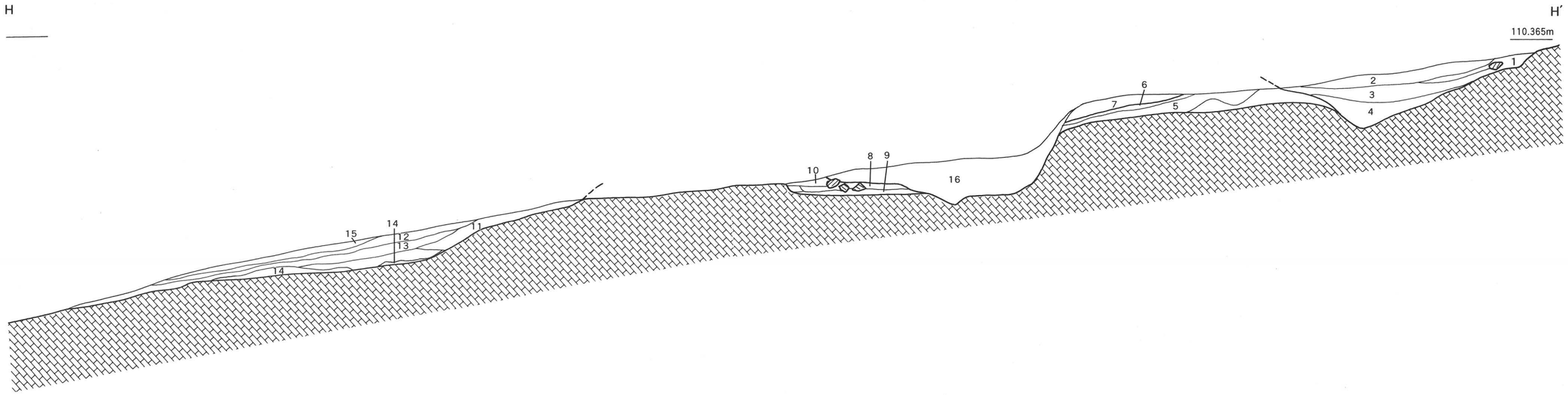
２．墳丘

墳丘は、東から西に下がる尾根筋のほぼ中央の斜面上に築かれている。墳丘のほとんどが削平を受け、墳丘裾部付近を残すのみであった。墳丘裾部付近の標高は、山側109.4m、平野側106.6

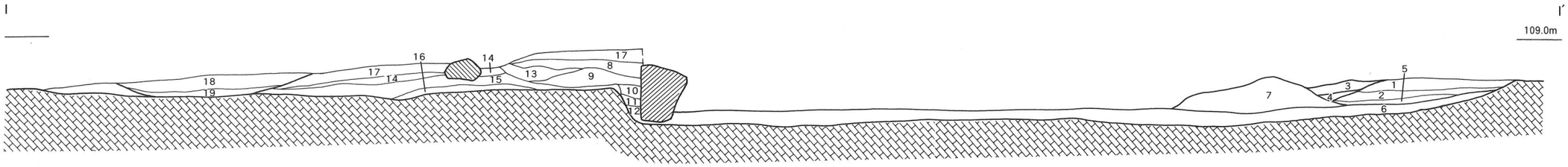


第13図　10号墳平面図

第14図　10号墳列石実測図



1. 2.5Y 5/4 黄褐色砂質土層
2. 5Y 5/6 オリーブ色砂質土層
3. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土層
4. 10Y 3/4 暗褐色砂礫層
5. 10YR6/6 明黄褐色砂質土層
6. 7.5YR4/3 褐色砂質土層
7. 10YR6/8 明黄褐色砂質土層
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫層
9. 2.5Y 5/6 黄褐色砂質土層
10. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂質土層
11. 5Y 4/3 暗オリーブ色砂質土層
12. 5Y 5/1 灰色砂質土層
13. 5Y 6/4 オリーブ黄色砂質土層
14. 7.5Y 5/8 明褐色砂質土層
15. 10YR5/6 黄褐色砂質土層
16. 撹乱



1. 5Y 6/4 オリーブ黄色砂質土層
2. 2.5Y 4/3 暗オリーブ色砂質土層
3. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色砂質土層
4. 2.5Y 5/4 黄褐色砂質土層
5. 5Y 5/3 灰オリーブ色砂質土層
6. 7.5Y 4/1 灰色砂質土層
7. 閉塞石
8. 7.5YR4/6 褐色砂質土層
9. 10YR4/6 褐色砂質土層
10. 2.5Y 3/2 黒褐色砂質土層
11. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色砂質土層
12. 5Y 4/3 暗オリーブ色砂質土層
13. 2.5Y 7/4 浅黄色砂質土層
14. 2.5Y 6/4 にぶい黄色砂質土層
15. 2.5Y 4/1 黄灰色砂質土層
16. 2.5Y 5/6 黄褐色砂質土層
17. 7.5YR4/4 褐色砂質土層
18. 5Y 5/6 オリーブ色砂質土層
19. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土層

0 4m

第15図　10号墳墳丘土層断面図

m前後を測り、約2.8mの比高差を持つ。

山側の高い部分には周溝が設けられている。西の平野側の低い部分には周溝はなく、盛土及び旧地形の削り出しによって墳丘が作られている。墳丘の規模は、東西約15.2m、南北約16.9mを測り、平面形では楕円形に近い形をした円墳である。東西の墳丘斜面の角度の状況から墳丘の高さは、東側で約3.0m、西側で約5.0m前後と推定される。

墳丘北側の裾部周辺には、列石（第14図、図版７・10－10）が存在する。石材は、周辺の地山内に多量に存在するものと同様な系統のものであることから、古墳周辺から集められたものと推定される。

調査当初は、墳丘の北側表面の全面に列石が配置されていたものと思われたが、埋葬施設である横穴式石室の規模と墳丘との高さの関係から、墳丘の列石として機能していたのは、北西側の長さ約４mの部分のみと推定される。そこから東の山側は、墳丘裾の基底部に存在している石のみ列石として機能していたものと思われる。基底部から上段の列石（第14図、図版10－10）は、平面観察の結果および復元した墳丘の高さの関係から盛土内に収まるものと思われる。列石築造の順番は、石と石との重複関係から第16図に示すとおりである。これらからこの部分は、地山を整形して墳丘の裾部を作ったのではなく、最初に墳形を整えるために、表土上面に列石を配置し、その次にその内側と外側に順番に石を配置したものと推察される。最後に墳丘裾部に列石を配置し、墳形を整えたものと考えられる。これらのことから北西部周辺の列石は、墳丘盛土の流失を防ぐ役目の他に、墳形を整えるために築造当初に配置されたものと考えている。

北西側の列石（図版７－３）は、長さ約5.0m、高さ約1.0mを測り、約５段分残存していた。石材の大きさは、0.2mから0.5mを測る。石は段ごとに墳丘に沿ってほぼ平行に並べられている。段と段との間隔は0.1～0.4mを測る。基底部から墳丘上部に行くに従い、間隔が広がる傾向が認められる。築造当時の列石の状況は、土層断面の観察および表面観察の結果、石のほとんどが埋まった状況で、表面の一部のみ露出していたものと考えられる。

この周辺の墳丘の築造方法は、土層断面（第15図、図版10－11・12）および平面観察の結果、基底部から盛土によって築かれている。現在は、近代に斜面の開削が行われたため現地形を留めていないが、北西下は番匠川によって開析され、急斜面となっていたものと推測される。その結果、墳丘の土砂の流失を防ぐため、特に念入りに築造されたものと考えている。

墳丘西斜面の下中央付近から、須恵器甕２個体分の破片（第21－32・33図）が出土している。

３．周溝

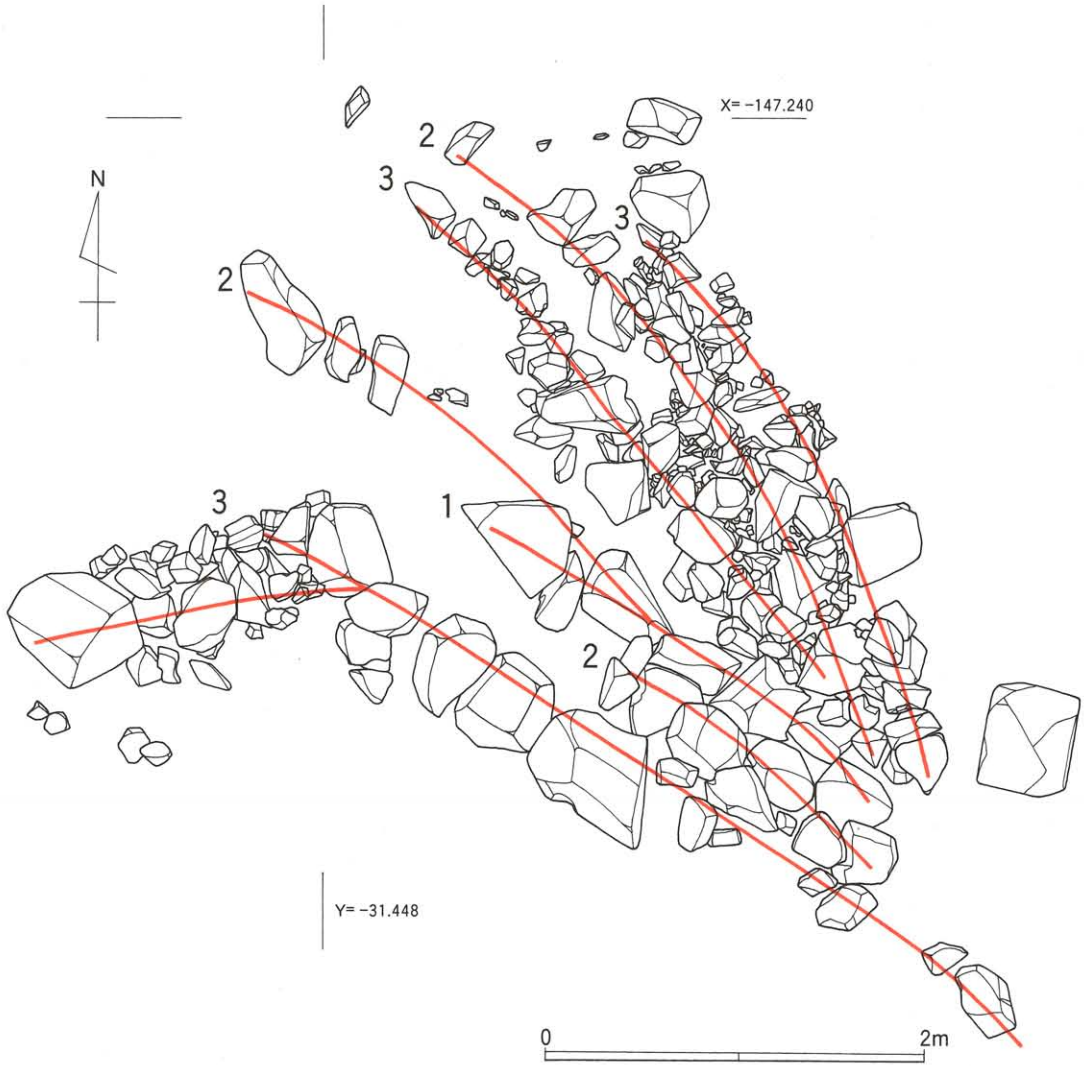
周溝（第13・15図、図版10－６・９）は、高い側全体を巡っているのではなく古墳の南東側、石室の掘方から東に約3.2m、X＝－147.254、Y＝－31.441付近から始まる。周溝の形状は、墳丘側についてはほぼ円弧を描くように丁寧に掘削されているが、外側は旧地形との関係から不定形で幅も一定していない。周溝外側の南東端から約4.5mの間は、８号墳と境を接していたものと思われ、外側に円弧を描く。溝底は、東南端から北西に行くに従い徐々に低くなり、谷部に水

が流れ込むような形状であることから、本来空堀であったものと思われる。溝底の高低差は、約1.6mを測る。周溝内の埋土からは、耳環（第20－40図、図版10－４）、上方の存在している古墳からのものと推定される須恵器把手付椀（第21－35図、図版10－５）などが出土した。

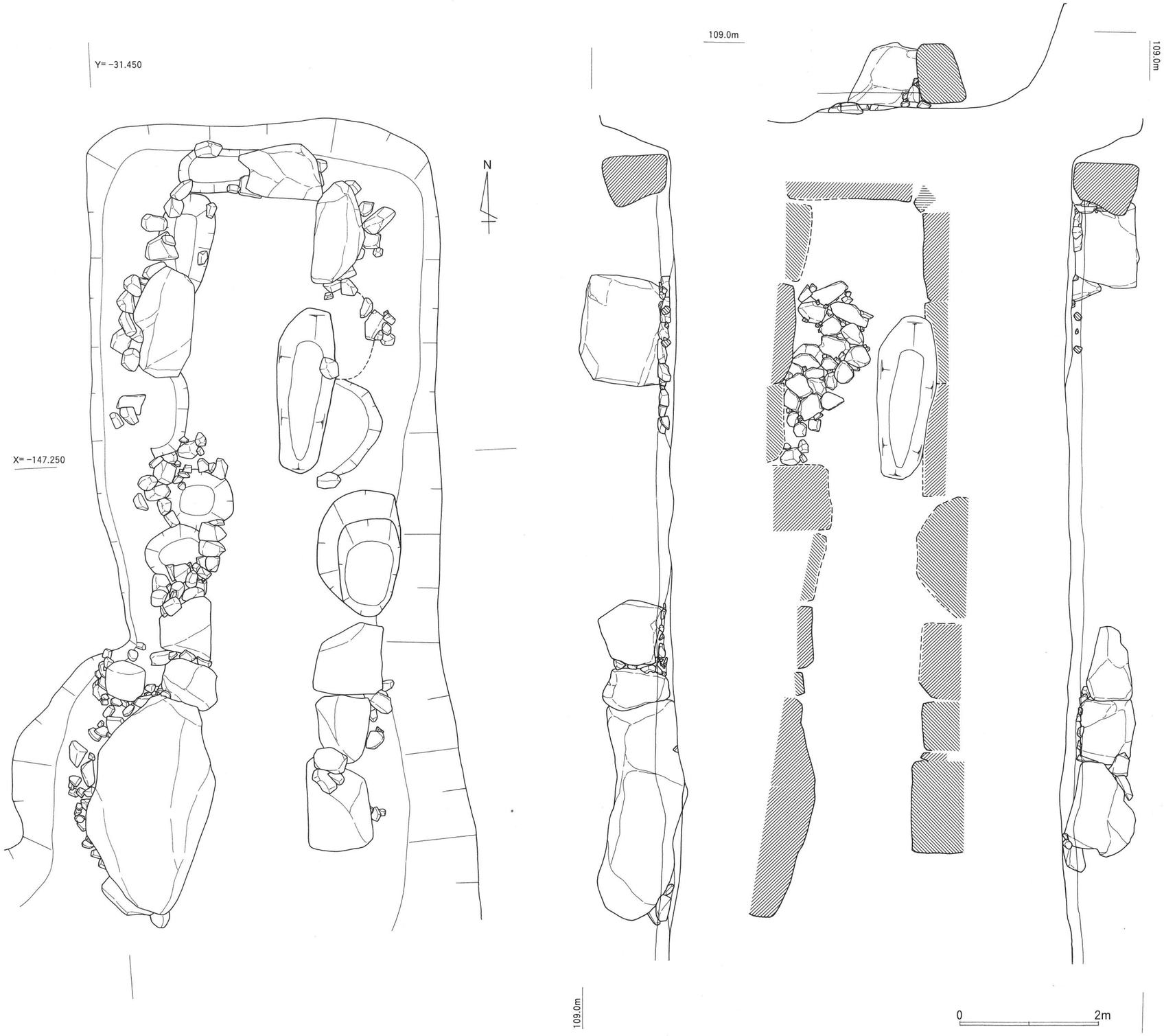
４．横穴式石室

埋葬施設（第17図、図版８）は、主軸がＮ５°Ｗ方向の左側壁に袖部を有する片袖式の横穴式石室である。石室の依存状態は悪い。近世にほとんどの石材が抜き取られていた。その後、ゴミ捨て場となり、石室内のほとんどが墓壙下面まで撹乱土で覆われ、一部が、墓壙の床面下にまで掘り込まれていた。

墓壙・墓道　墓壙は、東から西に下る尾根筋上に築かれ、墓壙（第13・17図、図版８－３）の入口付近は、尾根のほぼ中央部にあたる。そのため旧地表面の南側が約0.5m程度北側より高くなっている。石室の方向が尾根の中央部にも拘わらず、南北方向であることから、石室を南向きに作るという規制を受けたことにより、石室の床面をフラットにするため、旧地表面より低い位置に石室の羨門が設けられたと考えられる。そのため墳丘の南西側の地山を、墓壙南端とほぼ直角に開削し、墓道を築造している。墓壙と墓道の形状からほぼ同時に掘削されている可能性が高い。



第16図　10号墳北東部列石築造順図



第 17 図　10号墳石室実測図

墓壙の掘り方は、幅約5.0m、長さ約15.0mを測り、ほぼ長方形を呈する。ただ南西側の羨道部入口付近のみ基底部の石を配置するために、長さ約3.5m、最大幅1.8mの間掘削され広げられている。

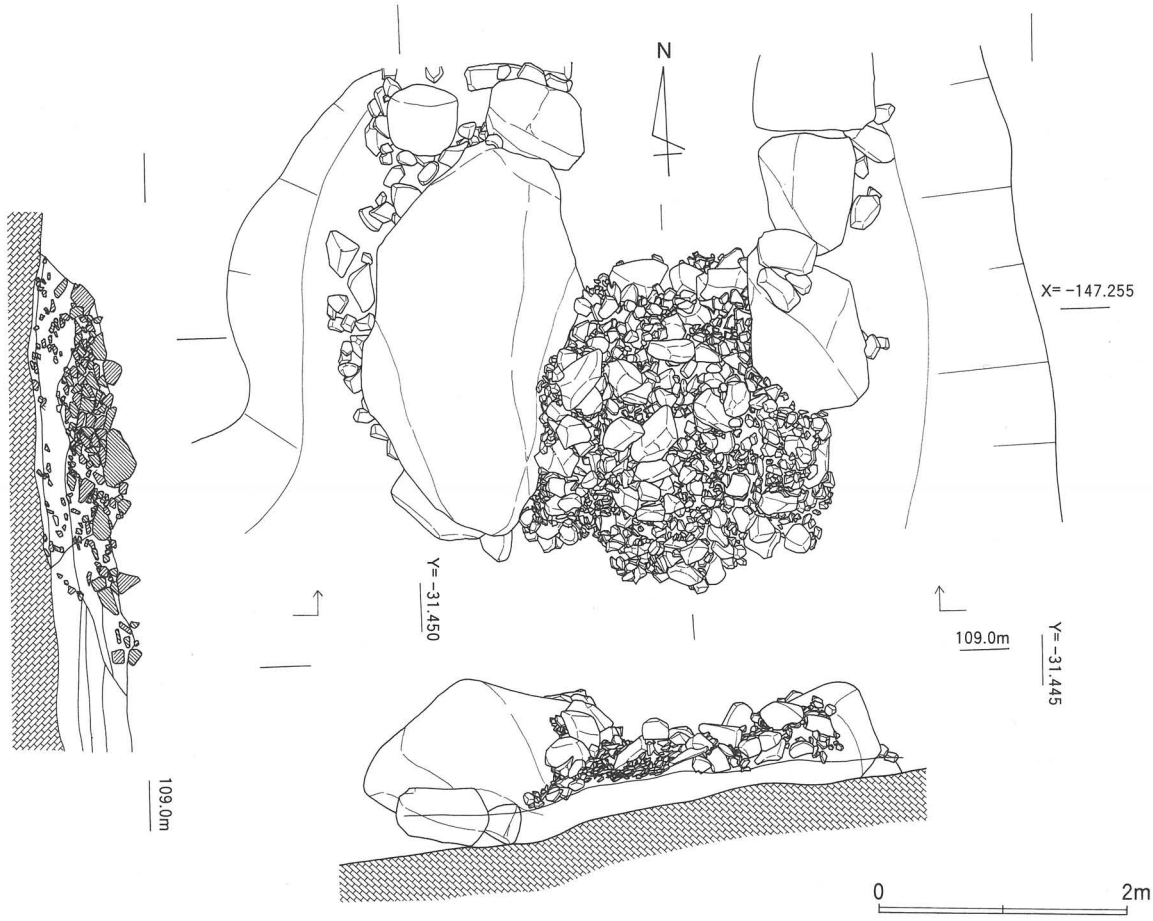
石室　石室（第17図、図版８）は、ほとんどの石材が抜き取られ、奥壁の一部と羨道部入口付近、玄室の側壁の基底石が残るのみであった。石材の抜取痕および基底石を安定するために配置された石が、比較的遺存状況がよく、それらによって石室の規模を確認した。

石室は、全長約10.25m、玄室長約3.8m、玄室奥壁幅約1.6m、玄室最大幅約1.9m、玄門部幅約1.8m、袖部幅約0.6m、羨道長約6.5m、羨門部幅約1.6mを測る。

奥壁　奥壁の基底石は、西側の２分の１が後世に割られていて、原形は不明であるが、石の抜取痕から１石であった可能性が高い。幅約2.0mを測る。

左側壁　左側壁は、奥壁と接する石と羨門から３石の基底石のみ残存し、それ以外は抜き取られていた。そのため石材の抜取痕および基底石を安定するために配置された石によって、基底石の数及び方向を確認した。基底石は長さ1.0mから1.8m程度の石を７石使用し、平坦な面を内側にほぼ直線に並ぶように構築していたものと思われる。羨門から３石目の石は、抜き取る際に割られ、タガネを使用した痕跡が認められた。

右側壁　右側壁の玄室部は、奥壁から２石目の基底石のみ残存し、石材の抜取痕および基底石



第18図　10号墳閉塞石実測図

を安定するために配置された石によって長さ1.2mから1.6m前後の石を３石使用していたものと推定される。右側壁は左側壁と異なり奥壁部から玄門部に行くに従い石室の幅が0.4m程度広がり、やや胴張り気味に石を配置している。

袖石は抜き取られていたが、基底石を安定するために配置された石によって、一辺約1.1m程度の方形に近いものを使用していたものと思われる。

右側壁の羨道部は３石であり、袖石からやや胴張り気味に配置している。羨門部に存在する石は、長さ約3.1m、幅約1.8m、高さ約1.2mと他と比較して長さ、幅とも大きく、奥壁に使用しているものよりも長い。そのためそれを配置するために墓壙が広げられ、また羨門部での側壁の長さが、右側壁より0.9m程度長い。

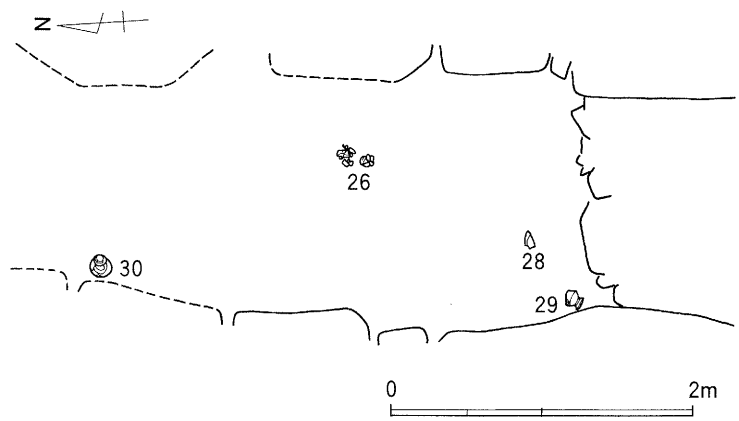
石室の構築方法（第15図、図版10－７・８）は、石室の裏込と墳丘盛土の土層を観察した結果、掘り方の埋土と墳丘の盛土が続いていることから、掘り方が存在する部分は基底石を配置した後に、掘り方に土を掘り込み、その上部については墳丘と同時に土を盛っていることが確認された。掘り方がほとんど無い箇所については、前者の状況から基底石を配置すると同時に墳丘の土を盛ったものと推定される。石室の２段目から上は残存していないが、これらの状況から石を配置した後、盛土を行ったものと考えられる。

玄室の床面は、後世に石室内が荒らされ、石室西側の一部のみ敷石が残存していた。その状況から玄室全面に敷石が敷かれていたものと推定される。

羨道部は、遺物の出土状況から敷石は存在しなかったものと思われる。敷石は、長さ0.1mから0.5m程度の上面がほぼ平らな石を使用し、石の下面と地山との間に砂質土を敷き詰め、石を安定させていた。羨道部については、床面上に存在する遺物が地山面より0.1mから0.2m程度浮いた状況で検出され、またそれより下から地山面までは、玄室の敷石下に敷き詰めていた土と同系統の砂質土であったため、石室築造の際に敷かれたものと推定される。

閉塞石　閉塞石（第18図、図版９）は、羨門部から長さ約2.7mにわたって検出した。最大高さ0.6mを測る。閉塞石の構築方法は、まず最初に長さ0.5m、幅0.3m程度のやや細長い石を３石横方向にほぼ羨道の幅に並べ、奥側の位置を決めている。そこから手前の右側壁の端まで石を積み重ねたものと推定される。石材は河原石状のものが多く、大きさは0.05mから0.5m程度のものとさまざまであるが、基本的に小石が多い。

玄門の付近から須恵器、土師器の破片が少量出土し、その中には奈良時代のものが認められることから、追葬が終わった後も、石室が開けられていた可能性がある。



第19図　10号墳羨道部遺物出土状況図

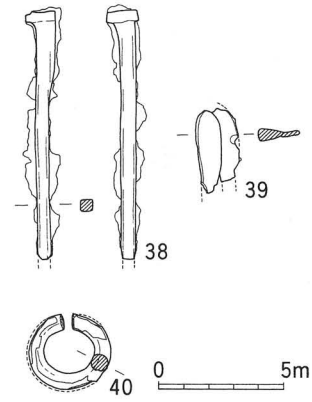
5．遺物の出土状況

玄室および羨道内の床面は、近世の盗掘および石の抜き取りによって荒らされており、ほとんど遺物は出土しなかった。玄室内からは、撹乱層中より須恵器坏蓋２個体（第21－25・27図）の破片、黒色土器（第21－34図）以外何も出土しなかった。羨道床面上（第19図）からは、土師器高坏（第21－30図、図版10－１）、須恵器脚付鉢（第21－29図、図版10－２）、坏蓋２個体（第21－26・28図、図版10－２・３）、鉄釘（第20－38図）、不明鉄製品（第20－39図）が出土しているが、出土状況から現位置を留めていないものと思われる。

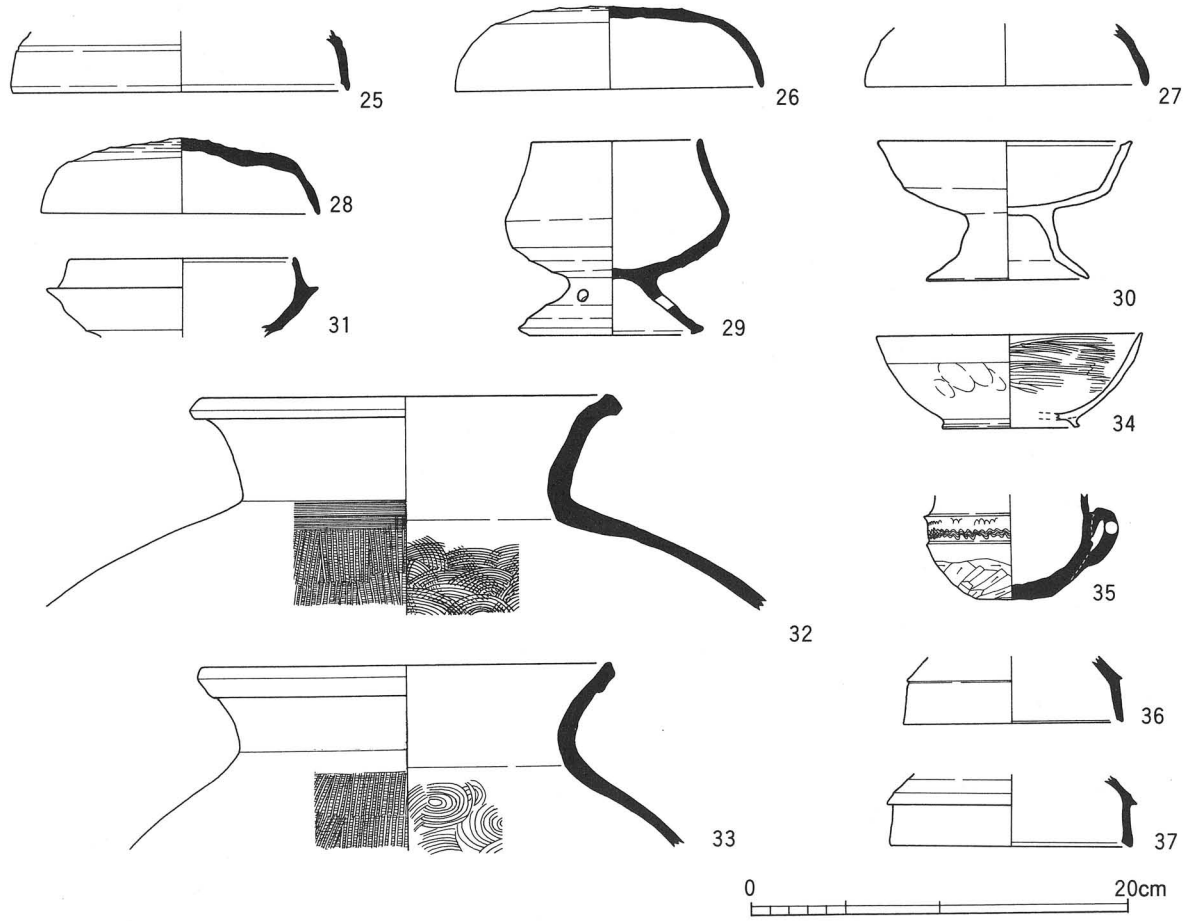
他に盛土内から坏身（第21－31図）、墳丘裏込内から坏蓋（第21－36・37図）が出土している。

6．出土遺物

石室内の遺物　坏蓋は４個体出土した。25（第19－25図）は口縁部から稜まで残存し、天井部は欠損している。稜から口縁端部にかけて直立気味に下り、端部断面は三角形に近く、内面に段を有する。稜は極めて甘く、わずかに回転ナデによってくぼみをもたせ、天井部と口縁部を分けている。26・28（第21－26・28図、図版19－26・28）は、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描き、



第20図
10号墳出土遺物１

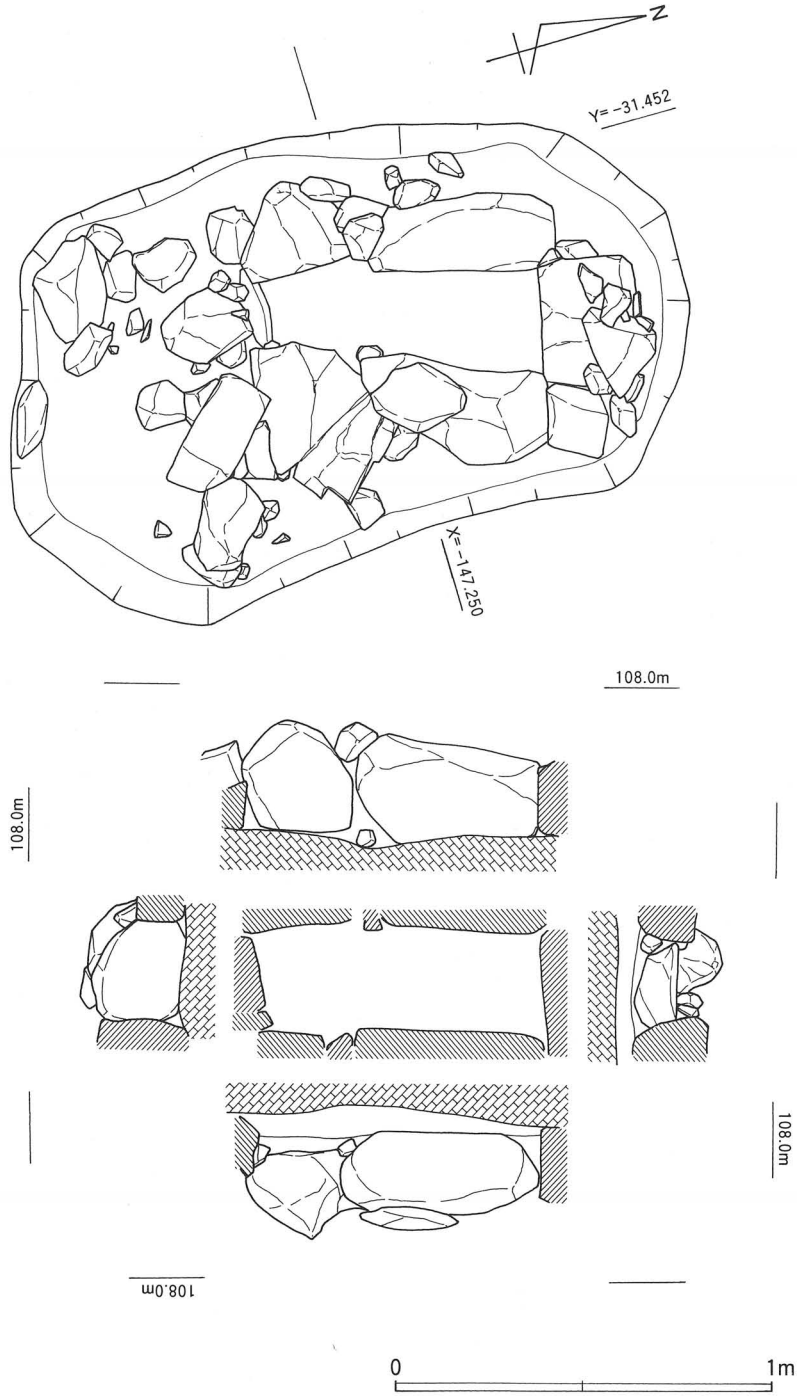


第21図　10号墳出土遺物２

口縁端部は丸く仕上げている。天井部の2分の1に回転ヘラケズリを施している。27(第21－27図)は天井部が欠損しているが、26・28と同じ形態のものである。

脚付鉢（第19－29図、図版19－29）は、体部の境から口縁端部にかけてやや内弯気味に内傾する鉢部をもち、端部は丸い。体部の3分の2に回転ヘラケズリを施す。脚部は外方に「ハ」の字に開き下方に回転ナデにより2段の緩やかな段を有する。端部はやや角張り、内面に段を有する。脚部上方には3方向に円孔を施している。

土師器高坏（第21－30図、図版19－30）は、底部と口縁部の境は屈曲し、口縁端部にかけて外上方に開く坏部をもち、端部は断面三角形を呈する。



第22図　10号墳箱式石棺実測図

端部内面には緩やかな凹線を巡らす。底部はやや平らである。脚部は短く、ラッパ状に外反し、端部は丸くおさめる。内外面とも剥離している箇所が多く、調整が不明である箇所も多いが、残存部からロクロ成形によって作られているものと推定される。

西墳丘裾部の遺物　甕2個体が出土した。32（第21－32図）は外反する口頸部を有し、端部はやや丸みを帯びる。口頸部は回転ナデによって仕上げている。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキで仕上げている。33（第21－33図）は外反する口頸部を有し、端部で外方に屈曲させ肥厚し、断面は長方形を呈する。口頸部にはカキ目を施す。体部外面は平行タタキ、内面は同心

円タタキで仕上げている。

7．箱式石棺

箱式石棺（第22図、図版11）は、墳丘内の横穴式石室の墓壙から西へ約1.6m、墳丘の斜面から東へ約1.2mのX＝−147.25、Y＝−31.452付近に存在する。それから上の盛土は削平を受け欠失し、墳丘築造時の旧表土上面で検出した。そのため墳丘との前後関係は不明である。方向はN5°Wで横穴式石室の主軸と一致する。そのことから、横穴式石室築造と相前後して石棺が作られたものと推定される。

天井石は欠失していたが、石棺の状況から基本的には基底石のみで作られている可能性が高い。内法の長さ約0.75m、幅約0.27mを測る。石材は、周辺の地山に存在している河原石に似た石を使用している。

石室内部は、平らに近い面を内側に向け、両側壁とも2石で石と石との隙間には詰石が認められる。南の奥壁は、1石で長さ約0.25m、幅約0.24m、高さ0.23mを測る。北の奥壁は、2石と推定されるが、2段目の石が0.1m程度北にずれている。基底石は、長さ約0.34m、幅約0.26m、高さ0.11mを測る。両側壁は、長さ0.3mから0.5m程度を測る石を2石ずつ使用している。

石室内部には、黒色に近い砂質土が堆積し、近年に盗掘を受けた形跡は全くなく、遺物は全く出土しなかった。棺を使用した痕跡が、平面断面観察の結果認められなかったため、竪穴式石室ではなく石棺と考えられる。

8．小結

古墳の時期は、出土した須恵器からみると田辺編年のTK43型式、中村編年のⅡ－4型式と推定され6世紀後半に比定できる。玄室からのものと羨道部に存在するものとでは、型式的には若干ではあるが玄室のものが古い要素をもつ。

石棺と推定される石材も出土しなかったことと、現位置を留めての出土ではなかったが、羨道部より鉄釘が出土していることから、埋葬施設は木棺と考えられる。玄室では若干古い型式の須恵器（坏蓋）が出土していること、羨道部より鉄釘と共に土器が出土していることから、少なくとも木棺は3棺あったものと推察される。

同墳丘内には、小児棺と推定される箱式石棺が検出されている。横穴式石室以外に葬られた例としては、山畑25号墳より検出された竪穴式の小石室（長さ1.6m、幅0.8m）がある[32]。検出した箱式石棺は石室の内法から見るとこれより極めて小さく、横穴式石室に埋葬されたのではなく特別に石棺を作っていることから、被葬者あるいは古墳の築造者と密接な関係があった乳児の墓と推定される。

副葬品以外に玄室の撹乱土から内黒の黒色土器（第21－34図）が出土していることから9世紀には石室は開いていたものと推定される。

第４節　11号墳の調査

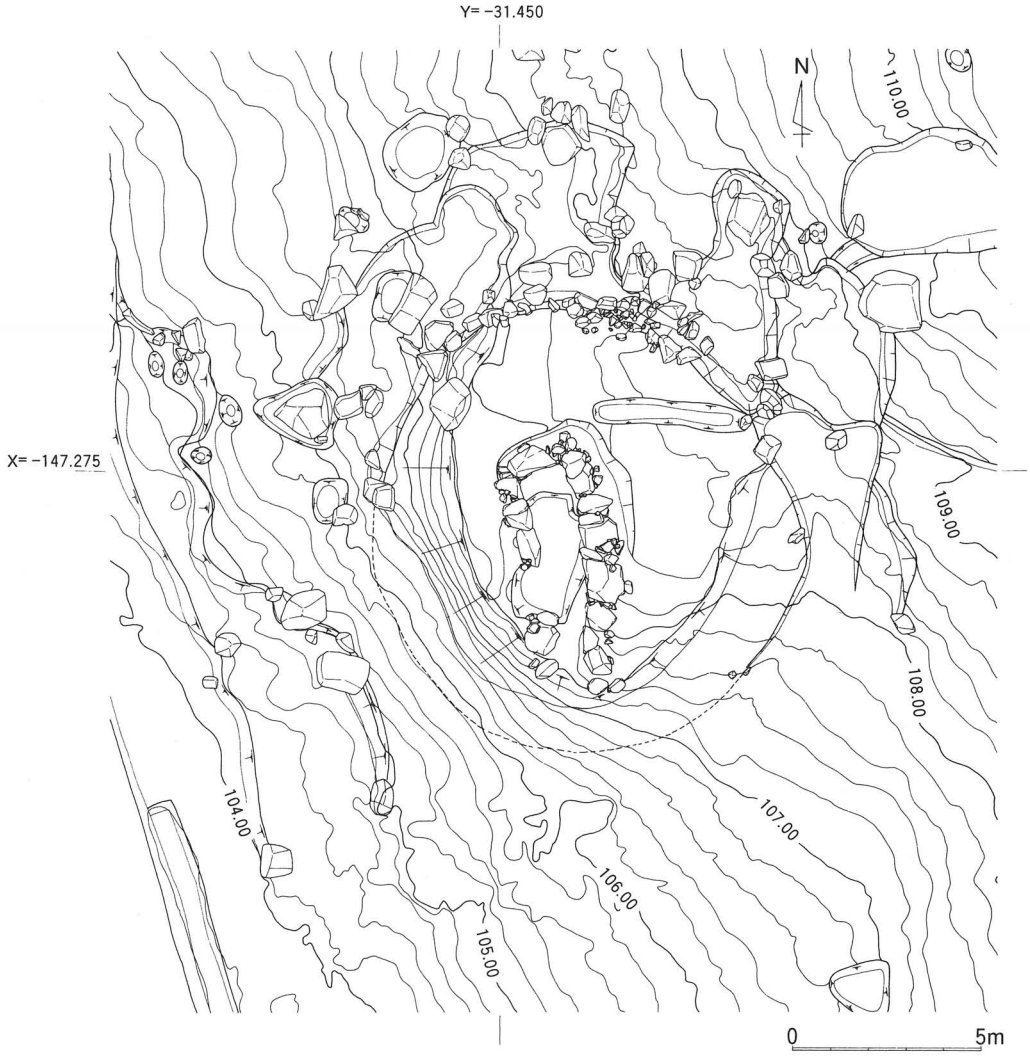
１．概要

11号墳（第23図、図版12・13）は、調査区のほぼ中央、10号墳の南側、X＝－147.277、Y＝－31.499付近を中心とし、標高約108m前後を測る東から西に下る尾根筋の南斜面上に位置する。

調査前の現況は、畑の段の南西端にあたっていることから墳丘の一部が削平を受け、東南側の墳丘裾部周辺は後世に畑を作るために盛土を行っていたため埋没していた。石室の側壁と奥壁の一部が地表面に露出していたが、周辺の地山および畑の境界に石を積み上げ石垣を作っていたため、区別がつかない状況であった。

２．墳丘

墳丘（第23・25図、図版14－３・４）は、東から西に下る尾根の南斜面上に築かれている。墳丘は、石室の側壁の２段目から上部が欠失し、西側も盛土が流失していた。墳丘裾部付近の高さは、山側108.4m、平野側106.4m前後を測り、約２mの比高差を持つ。山側の高い部分には周溝



第23図　11号墳平面図

が設けられている。西の平野側の低い部分には周溝は存在しない。

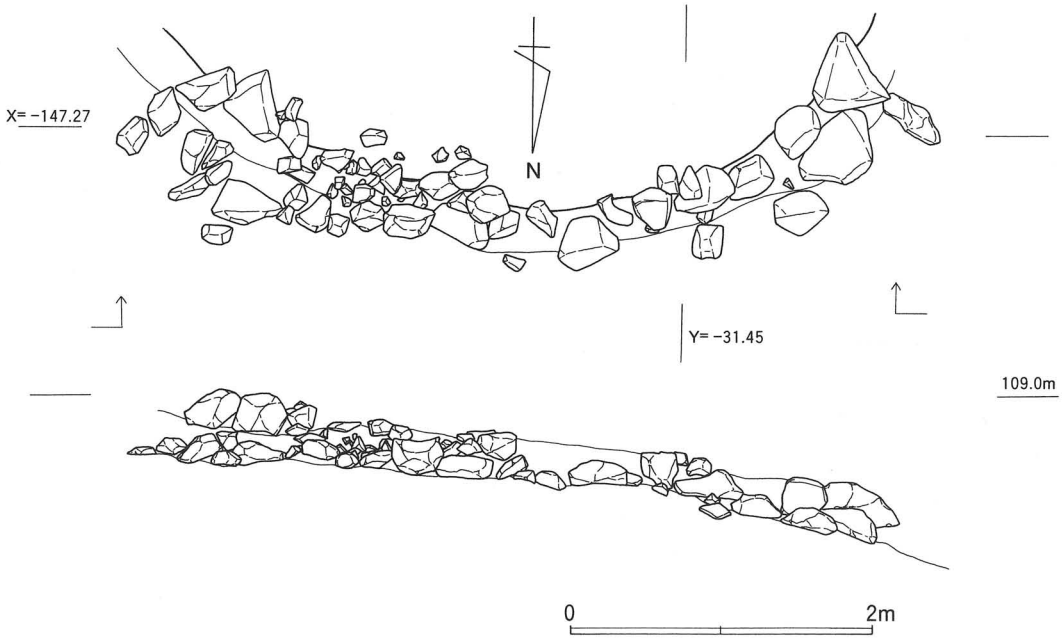
墳丘は、土層断面観察の結果、尾根の南斜面上に、ほとんどが盛土によって築造されている。墳丘の裾部付近で地山を削り出して作られているのは、山側の北西から北東側の一部のみであった。墳丘盛土内には、土砂の他に石が多く認められる。そのことから周溝掘削時に掘り出された石も使用したのではないかと推測される。

墳丘は、石室との位置関係から、南西側が畑造成時に墳丘が長さ約11.7m、最大幅約2.5m程度削平されているが、他の地点の形状から東西約11.6m、南北約12.2mを測る南北方向にやや長い円墳である。東西の墳丘斜面の角度、石室の形状から古墳築造当時の墳丘の高さは、東側で約２m、西側で約５m前後を測るものと推定される。

墳丘北西から北東側の裾部周辺には、列石（第24図、図版12－１・15）が存在する。列石は、周溝底から一段のみ残存している所が多いが、一部２段まで存在している場所もある。列石の一部は、地山内の墳丘裾部に存在し、周溝掘削時に取り除けなかった石をそのまま使用したものも見受けられる。一段目の石材は比較的大きな石（長さ0.2～0.6m、幅0.13～0.35m）を使用しているが２段目になると若干小さくなる（長さ0.15～0.25m、幅0.1～0.2m）傾向が認められる。石材は周辺の地山内に多量に存在するものと同様な種類であることから、古墳周辺から集められたものであろう。

３．周溝（第23・25図、図版12－３・４）

周溝は、斜面の高い側全体に巡っているのではなく、古墳の南東側X＝－147.274、Y＝－31.44付近でブリッジとなり、南東側と北西側の溝とに別れている。周溝の墳丘側については円弧を描くように丁寧に掘削されているが、外側は不定形で幅も一定していない。特に北西側の周溝周辺は、地山内に多量の石が含まれ、特に大きな石を避けて掘削されていることから溝幅が一定では



第24図　11号墳列石実測図

ない。溝底にも石が多数露出し一定ではないが、溝底は両方向に向かって徐々に低くくなり、丘陵斜面と溝底が平行となり収束する。溝の計測値は、幅1.2mから6.1m、深さ0.2mから0.4mを測る。

ブリッジは地山を削り出して作られ、溝底で幅約1.4m、上面幅約0.2m、高さ約0.2mを測る。ブリッジは、石室の入り口とは全く関係のない位置にあること、上面に何個かの石が露出していることに加え、幅が狭いことなどから、それを使って古墳に渡ることは難しいと思われる。そのことから周溝を掘削する際にブリッジを意図的に築造されたのではなく、地山内に石が多いため残した可能性が高い。

4．埋葬施設（第28図、図版13－2、14－1・2）

埋葬施設は、南に開口する横穴式石室である。石室内部の依存状態は悪く、石室内はゴミ捨て場となっていた。石室内のほとんどが墓壙下面まで撹乱土で覆われ、床面の約2分の1が、床面下まで掘り込まれ、一部の石材が基底石まで抜き取られていた。石室は、左側壁に袖部を有する片袖式の横穴式石室と推定される。

墓壙　古墳は、東から西に下る尾根の南斜面上に築かれている。そのため墓壙の掘り方は、石室全面に掘られているのではなく、山側の奥壁から左側壁の一部のみしか掘削されていない。残りの部分は、盛土上に石室が作られている。幅は、4.4mを測り、左側壁側の奥壁から約5mの地点で旧斜面となるため消滅する。

石室　石室の羨門は、墳丘の南側裾部から高さ約1.0mの地点に存在する。

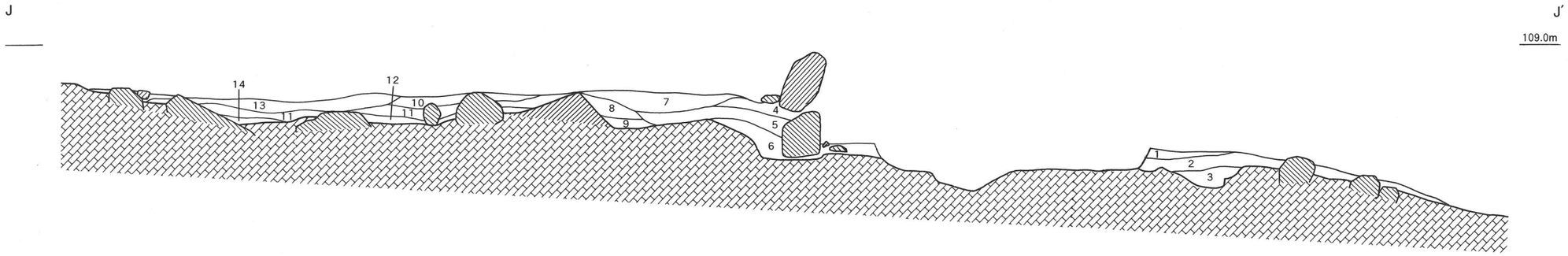
石室の基底石の3分の2は、盛土上に築かれている。石室の平面プランは、左側壁に袖部を有する全長約6.9mを測る片袖式の横穴式石室であるが、右側壁の玄室と羨道部とを分ける地点に存在する基底石が0.15m程度外側に出ているため、袖を意識していた可能性がある。玄室と羨道部と主軸が異なり、玄室がN13°E、羨道がN3°Wとなる。石室の構築方法が、玄室部と羨道部で異なった可能性が考えられるが、石材が基底部を除き残存していないので、詳しいことは不明である。

羨門部手前の両側壁側に存在する石は、当初側壁の石と考えられたが、他の石は接して存在しているのに対して、0.1m程度離れて配置されていることから、羨門に設けられた列石と考えている。

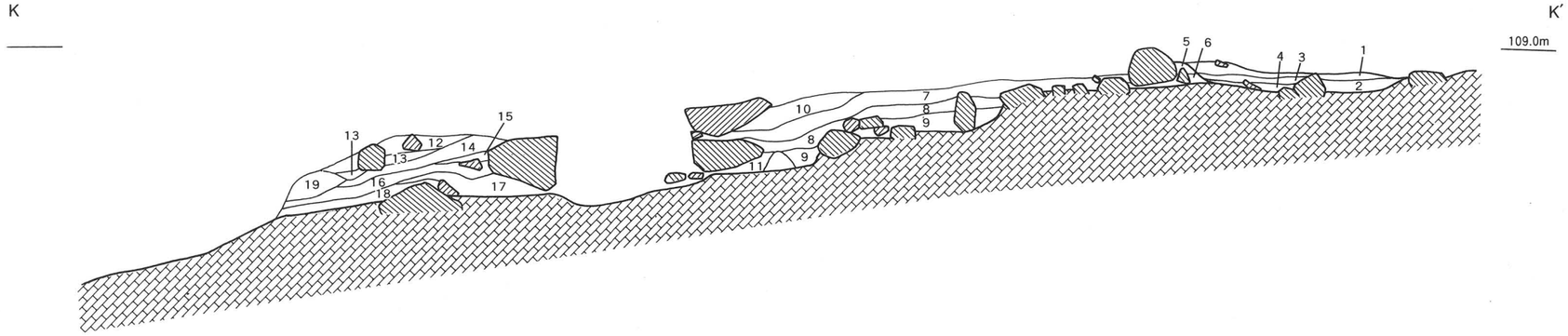
袖部付近は、石材が抜き取られているため、袖石が欠失しているが、玄室と羨道との関係から、玄門幅1.0m前後と推定される。

玄室は、奥壁部付近で幅約1.7m、袖部付近で幅約1.8m、長さ約3.1mを測る。玄室の床面は、奥壁付近を除きほとんどが、床面下まで掘削されていたが、残存していた状況から、玄室全面に敷石が敷かれていたものと推定される。敷石の状況は、万遍なく詰めて敷かれていたのではなく、石と石との間隔が開いている。

石室の残存状態は悪く、ほとんどが基底石のみであったが、奥壁付近は2段目まで残存してい



1. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土層
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土層
3. 2.5Y 6/4 にぶい黄色砂質土層
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質砂土層
5. 2.5Y 5/6 黄褐色粘質砂土層
6. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘質砂土層
7. 7.5YR4/3 褐色礫まじり砂質土層
8. 10YR6/8 明黄褐色粘質砂土層
9. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色粘質砂土層
10. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色砂質土層
11. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色砂質土層
12. 7.5YR4/4 褐色砂質土層
13. 7.5YR3/4 暗褐色砂質土層
14. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土層



1. 7.5YR3/2 黒褐色粘質砂土層
2. 10YR4/4 褐色粘質砂土層
3. 10YR3/3 暗褐色粘質砂土層
4. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色細砂土層
5. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色粘質砂土層
6. 2.5Y 3/2 黒褐色粘質砂土層
7. 10YR3/3 暗褐色砂質土層
8. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土層
9. 10YR2/3 黒褐色砂質土層
10. 10YR3/4 暗褐色砂質土層
11. 10YR4/4 褐色砂質土層
12. 10YR4/4 褐色砂土層
13. 10YR4/3 にぶい黄色粘質砂土層
14. 10YR3/4 暗褐色粘質砂土層
15. 2.5Y 4/1 黄褐色礫まじり砂土層
16. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質砂土層
17. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘質砂土層
18. 2.5Y 3/2 黒褐色粘質砂土層
19. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色礫まじり砂土層

0 4m

第 25 図　11号墳墳丘土層断面図

た。

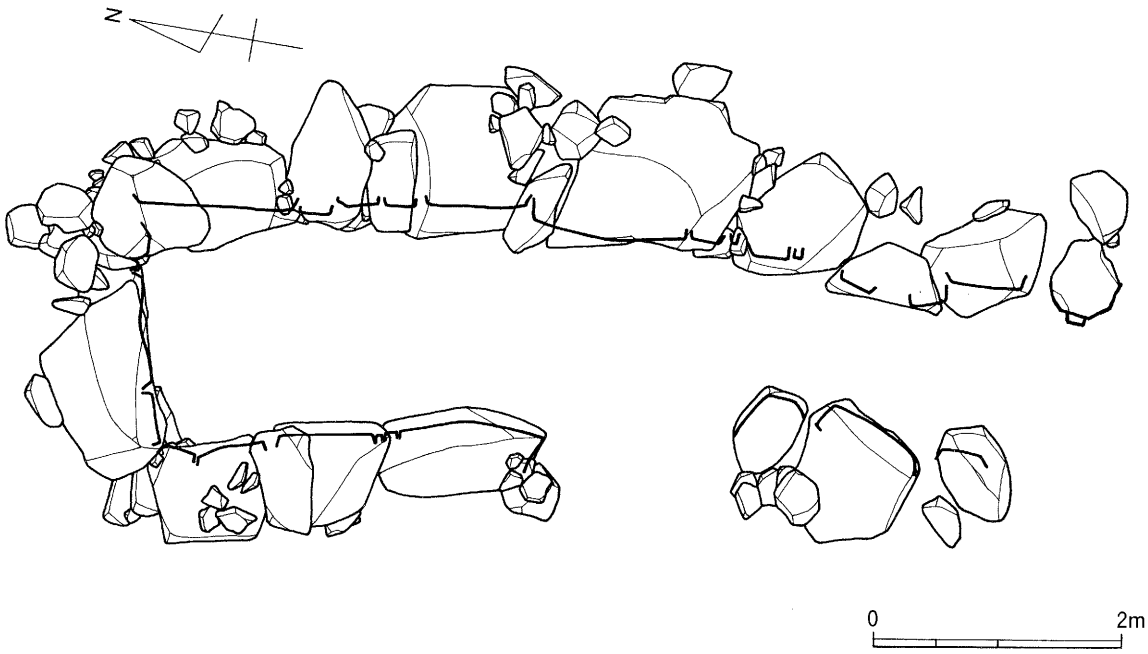
羨道は、玄室との境付近が近世の盗掘により、右側壁の石材の一部が抜き取られている。羨門部で幅約1.1m、中央付近で幅約1.0mを測る。袖部が欠失しているため、長さは不明であるが、平面プランの形状から3.7m前後と推定される。

左側壁は、平面プランではやや胴張り気味であったのが、検出面上面のプランでは、胴張りが強くなっている。そのことから上段にいくに従い胴張りが激しかったものと推測される（第26図)。基底部と石の上部で測ると平面プランより約0.34m程度内側に入り、石の内面が斜めに立ち上がっている。奥壁と側壁との境の２段目の石は直角になるように積まれているのではなく、斜めに渡すようになっている。これらの状況から判断すると２段目以降天井石までの側壁のもち送りの角度は相等きつかったものと判断される。

羨道部に存在する基底部の石は、玄室と境にある石は大きいが、そこから玄門にかけての石は、基底部に小さい石を詰石状に配置し、その上に大きな石を置いている。

右側壁は、袖石と羨道部付近が後世に抜き取られていた。石と石の間隔から２石存在していたものと推定される。

右側壁は左側壁と異なり、もち送りの角度が激しくなく、上面と下面の平面プランがほぼ一致する箇所も認められる。胴張りもほとんど認められないが、奥壁と境を接する基底石が斜めに配置されていることからドームを意識しているのではないかと考えられる。玄室の基底石は、ほぼ地山直上ないしは墓壙床面に直接置かれているが、羨道部に存在する２石は墳丘築造の際に、盛



第26図　11号墳平面・平面プラン比較図

土と同時に配置されたものと推察され、掘り方はなく、石の底は床面から深い位置にある。

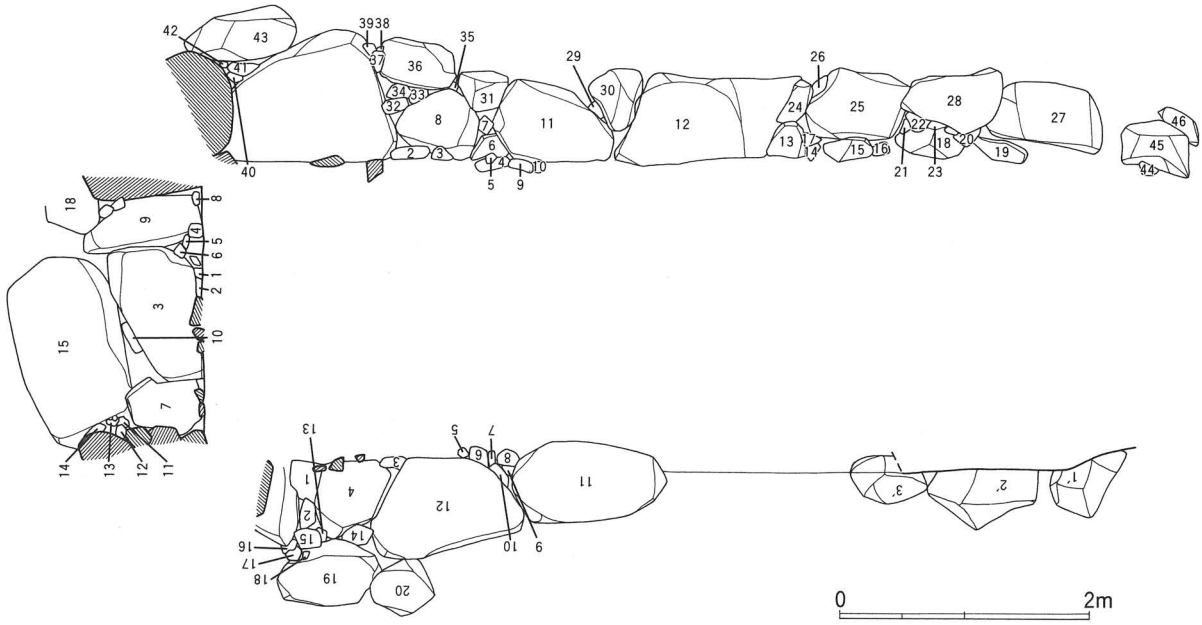
奥壁の平面プランは内側にやや内弯している。基底部の石は３石で、中央に大きな石を配置し、両サイドにやや小さい石を配置している。２段目の石を積むため右側壁側の石は高く、左側壁側はやや小さい。２段目の石は大きく、ほぼ奥壁幅の長さをもつ。基底石がほぼ垂直に立てているのに対して、石室に向かって斜めに配置している。これらのことからドームを意識するために基底石を３石配置し内弯させ、２段目の石によって内側に向けているのではないかと考えている。

石室の築造順（第27図）は、石材の構築方法から奥壁の基底石からと推定される。まず最初に中央の基底石を安定させるために床面上に置き、その上に基底石を配置している。その次に左右の基底石の順となる。その次に左右の側壁の順となるが、右側壁に存在している基底石の底部が、掘り方もなく床面下の盛土内に存在していることに対して、左側壁の羨道側は、床面上に基底石が存在することから、左側壁より右側壁の方が早く積まれたものと推察される。側壁の築造順は、基本的には奥壁に近い所から積んでいるが、石材の形状により相前後している箇所も見受けられる。２段目の石は残存しているものが少ないが、基底石同様に奥壁から積まれ、側壁も基本的に奥壁に近い所から順に積まれているものと推定される。

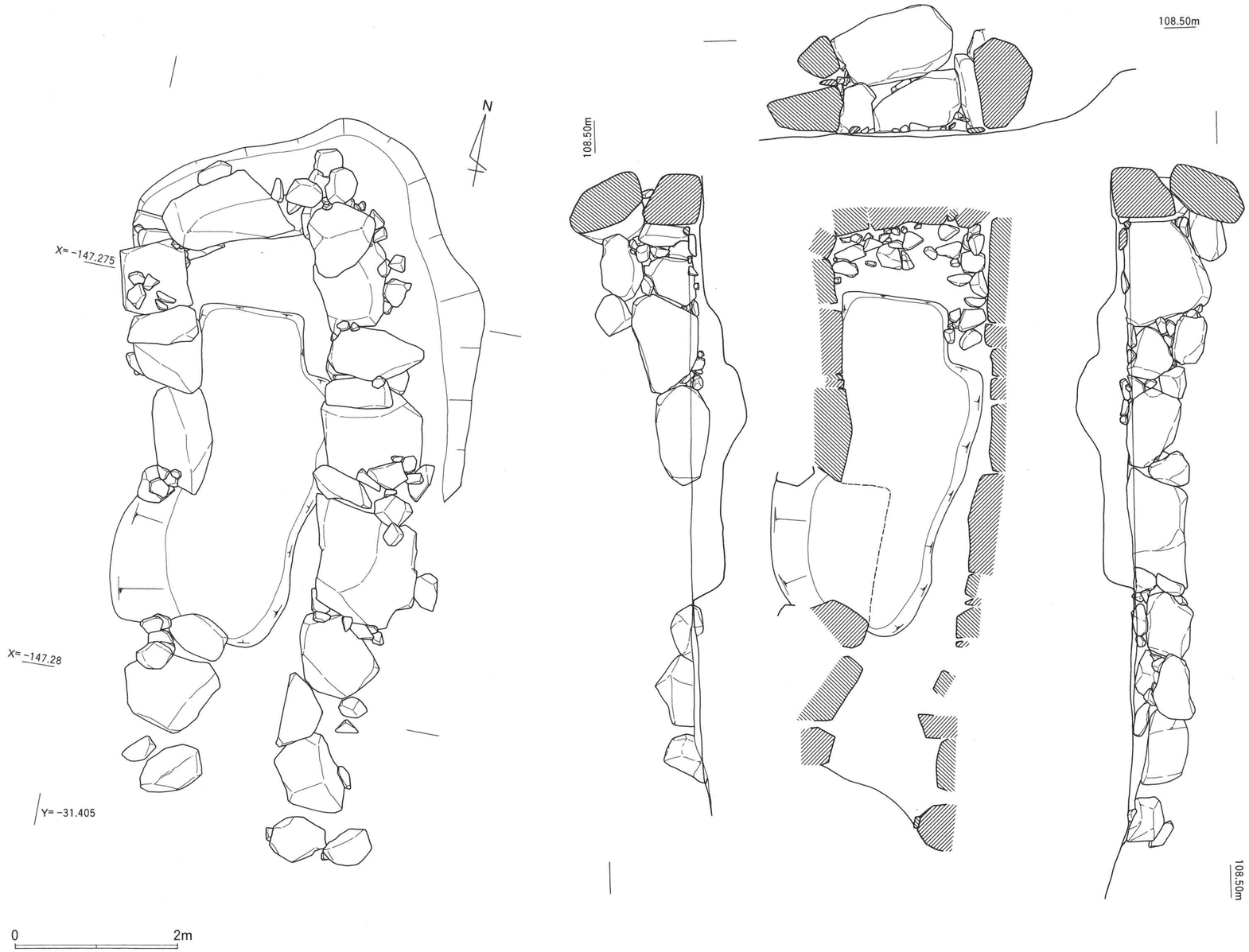
５．遺物の出土状況（第29図、図版16）

遺物は、横穴式石室の玄室内、羨道部、羨門部、南西墳丘裾部とに別れる。

玄室　玄室のほとんどが後世に掘削され、床面が残っていなかった。わずかに奥壁周辺の部分が現況を留め、床面に敷石が存在していた。遺物は、奥壁に沿って、両側壁に沿って奥壁との境



第 27 図　11号墳石室築造順図



第 28 図　11号墳石室実測図

の１石を囲むように出土している。遺物は左側壁部分に鉄製品が集中し、奥壁から右側壁にかけては、須恵器が出土している。玄室と羨道部の境付近では土師器鉢が出土している。

特に出土状況で注目されるのは、鉄鉾である。鉄鉾は左側壁の奥壁と接する石の羨道よりの位置で石に接するように出土した。出土状況は、埋葬時には本来は柄の部分が存在したものと推定されるが、敷石と敷石との隙間の土に３㎝程度石突の部分が斜めに差し込まれていた。本来鉾先とで一対になるものと推定されるが、鉾先の部分は出土していない。

出土した遺物の内訳は、鉄製品は鉄鉾１本、刀子２本、鉄鏃３本、鉄釘３本で、須恵器は、坏蓋２個体、坏身１個体、高坏１個体、脚付鉢１個体、土師器は鉢１個体である。

羨道部　羨道部からは、玄門から羨門側へ約0.7mの左側壁付近で鉄釘が２本、現位置が動いているが、他に４本出土している。それ以外に遺物は出土しなかった。

羨門部　羨門部では、床面から約0.15m浮いた状況で坏身が２個体出土した。坏身は裏向けで、約0.5m離れて対になるように配置されていた。これらの土器は、埋葬時期よりは須恵器の型式から少なくとも100年近く離れていること、床面より上層で出土したことから最終段階の追葬に伴う副葬品ではなく、墓前祭祀に伴うものと考えている。

南西墳丘裾部　墳丘の南西裾部から長さ約1.2m、幅約0.5mの範囲に土器溜状を呈して遺物が出土した。遺物は完形品は少なく折り重なるような状況であった。遺物の中には図化はできなかったが、平安時代の土師器小皿片が含まれている。出土状況から墓前祭祀に伴うものではなく、石室の羨門部に近いことから、盗掘を受けた際に副葬品が集められ、投げ込まれたものと推定される。出土遺物から少なくとも平安時代には石室が開けられていたものと推定される。

６．出土遺物

石室出土遺物　41・42（第30－41・42図、図版19－41・42）の坏蓋は、天井部は丸く、口径に対して器高が低い。天井部と口縁部を分ける稜は短く、口縁部と天井部の境に比較的強い回転ナデによる沈線によって作られている。口縁は内弯し、端部断面が角張るもの（41）、三角形のもの（42）があり、凹面をなす。天井部の約２分の１にヘラケズリを施し、後は回転ナデによって仕上げている。43・44（第30－43・44図、図版19－43・44）の坏蓋は、天井部中央にやや退化した宝珠つまみを有し、内面にはかえりを付している。蓋の内面には、口縁端部付近に比較的高いかえりを有しているが、口縁端部より、張り出してはいない。蓋の形はやや丸みを帯び、天井部の約３分の１にヘラケズリ、後は回転ナデによって仕上げている。つまみは蓋成形後貼付け、後に回りに回転ナデを施している。

坏身（第30－45図、図版19－45）は、立ち上がりが比較的短く内傾し、端部は丸い。受部は比較的長くやや水平にのびる。体部は口縁に比較的浅い。体部の約３分の１にヘラケズリ、後は回転ナデによって仕上げている。

無蓋高坏（第30－46図、図版19－46）は、坏部は口縁部と体部の境にややするどい稜が認められる。

そこから口縁端部にかけてはやや外反気味に外上方にのび、端部は丸い。底部はやや丸みを帯び、約2分1にヘラケズリ、後は回転ナデによって仕上げている。脚部はラッパ状に開き、端部は明瞭な段を有し、外面に凹線を巡らす。外面にはカキ目を施し、長方形に近い長い透かしを3カ所に開けている。

脚付鉢（第30－47図、図版19－47）は、坏部は底部からやや直線的に外反し長くのび、端部は丸い。底部はやや丸く、幅は狭い。口縁部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ後ナデによって仕上げている。脚部はラッパ状に開き、端部は丸く膨らむように仕上げている。脚部外面にはカキ目を施し、4箇所に長方形の透かしを開けている。

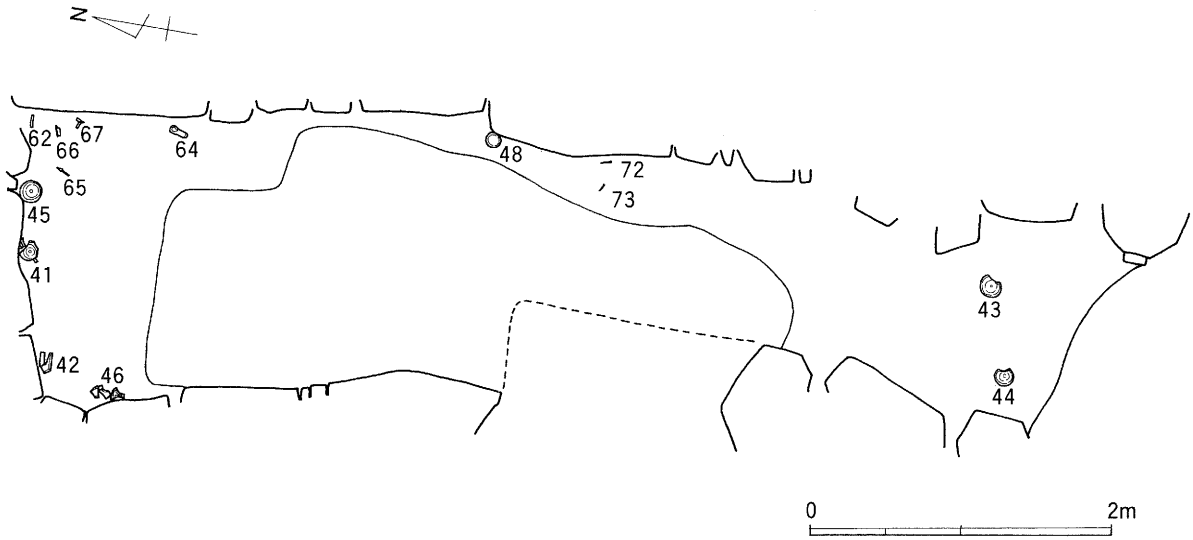
土師器鉢（第30－48図、図版19－48）は、体部は丸く、口縁部と体部の境は明瞭ではない。口縁部は短く上方に伸び、端部は断面三角形に近く鋭い。

刀子（第31－62・63、図版21－62・63）は2本出土した。62は刀身との境の茎の部分に白い骨状のものが認められ、鹿角装と推定される。その下に木質が存在する。刀身の部分に部分的に薄い鉄板状のものが存在する。内面には径1㎜、長さ3㎜程度の鋲が打ち込まれ、木質が残る。刀身の一部には黒漆ではないかと思われる部分が認められる。そのことからこの部分は形状は不明ではあるが鞘の残欠ではないかと考えられる。

鉄鉾（第31－64図、図版21－64）は、断面がすべて円形をなすためであるため、石突の部分と想定される。しかし、他の出土例からみるとそれらより長いため、身の部分の可能性もある。円錐形に鉄板を折り曲げて作られていると思われるが、先端部分に銹が多く付着しているため詳細は不明である。

鉄鏃（第31－65・66・67図、図版21－65・66・67）は3本出土した。いずれも長頸細根式両刃鏃に属するものである。

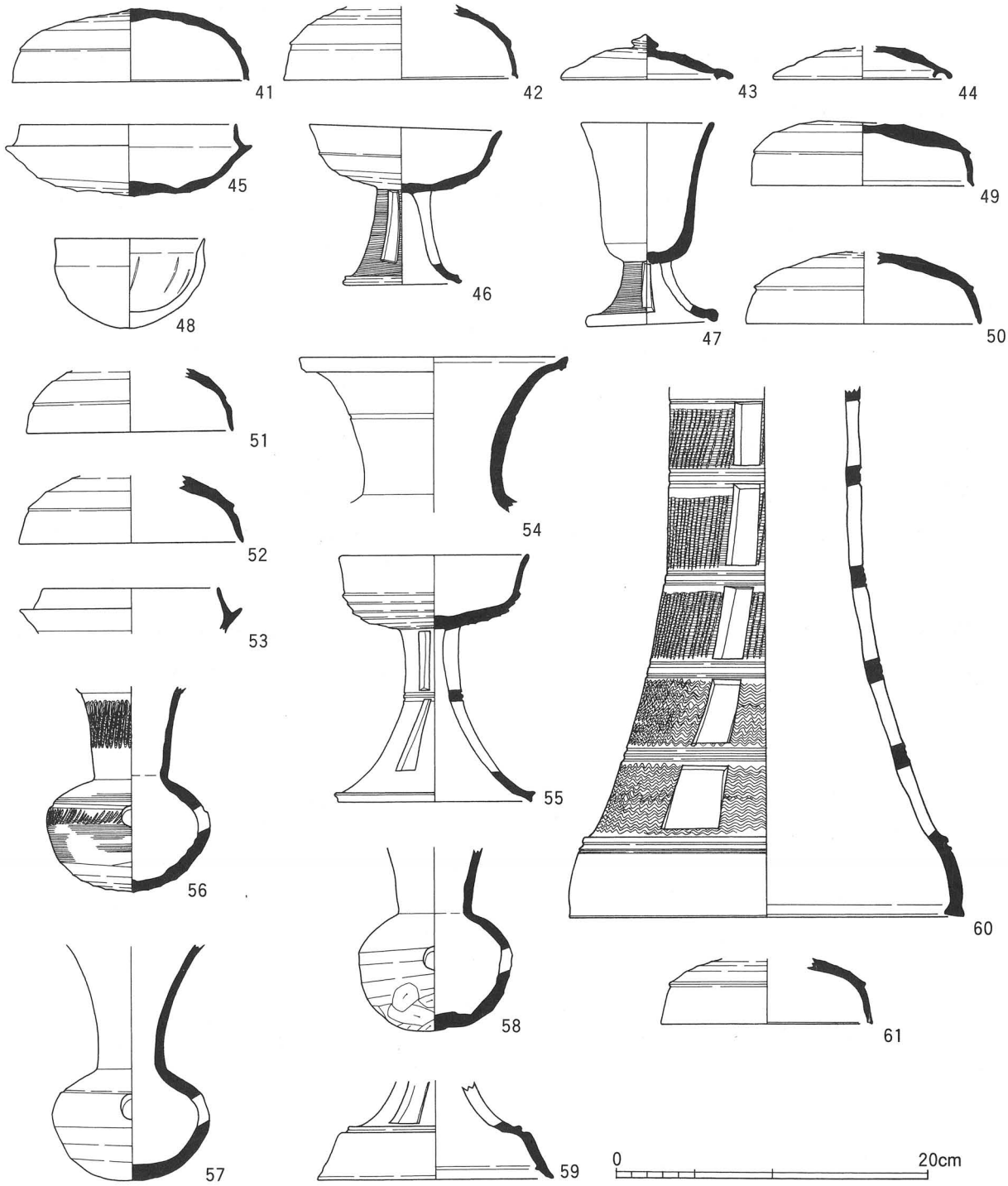
鉄釘（第31－68～76図、図版21－68～76）は全部で9本出土した。玄室は3本（68～70）、羨



第29図　11号墳遺物出土状況図

道は6本（71～76）である。頭部が残存しているものはすべて扁平で折り曲げている。中には木質が残存しているものもある。

南西裾部出土遺物　坏蓋（第30－49～52図、図版21－49・50・51）は4個体図化できた。49は天井部は平に近く、稜から口縁端部にかけてはほぼ直立気味に立ち、端部は断面三角形を呈する。稜は比較的するどい。天井部の約2分の1にヘラケズリ、あとは回転ナデによって仕上げている。50・52は、全体に丸みを持ち、稜は49に比べ退化している。口縁は外反し端部は丸い。天井部の約2分1にヘラケズリ、後は回転ナデによって仕上げている。形態は、50・52と極めて似ている



第30図　11号墳出土遺物1

が、稜がより退化し、やや強い回転ナデの沈線により作られている。

坏身（第30－53図）は、体部のほとんどが欠損している。口縁は比較的短く、内傾し端部は丸みを持つ。受部は外上方に伸び、比較的長い。体部のほとんどは欠損しているが、３分の２にヘラケズリ、あとは回転ナデによって仕上げている。

長頸壷（第30－54図）は、口縁部のみで体部が欠損している。口頸部は長く外反し、上方に沈線を施す。口縁端部は、上方にのび断面三角形を呈する。

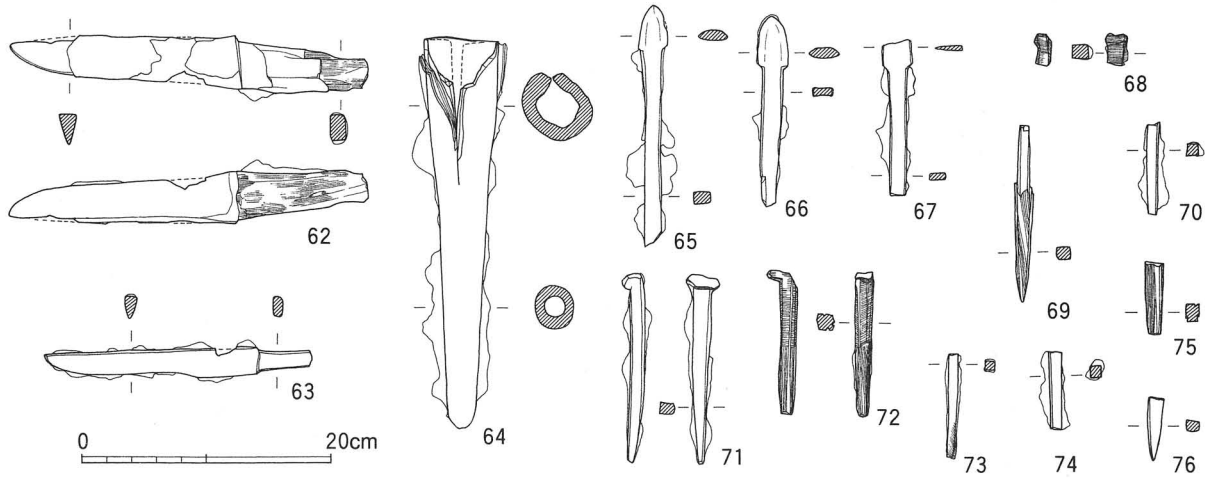
無蓋高坏（第30－55図、図版21－55）は、いわゆる長脚２段の高坏である。坏部は、口縁部と底部の境に比較的鋭い稜をもち、口縁部と体部を分ける。口縁部は、やや外反し、端部は丸い。体部は、回転ナデによる突線を３条施し、その下の３分の１にヘラケズリを施す。脚部はラッパ状に開き、端部は角張る。脚部の脚底から約５分の３の地点に、２条からなる沈線を施し２段に分ける。下段には台形、上段には、長方形の透かしを３箇所に開けている。

瑕（第30－56・57・58図、図版21－56・57・58）は、すべて口縁部が欠損している。体部は球形をなし、ほぼ中央に最大径がくる。口頸部は長くラッパ状に開く。口頸部に波状文、体部中央に刺突文（56）を施すものも認められる。

台付長頸壷（第30－59図）の台部である。脚は、脚頸部の境に１条の突帯を有し「ハ」の字に開き、端部は、断面三角形で内面に段を有する。台形の透かしを３箇所脚頸部に開ける。

器台（第30－60図、図版21－60）は、脚部のみ残存する。脚部は外方にやや外反しながら下り、裾部は内弯し、端部は平面をなす。１から２条の沈線によって区画し、５箇所に文様帯をつくり、内に波状文を施す。上方の３段には長方形の透かし、下方の２段には台形の透かしを３方向に開ける。

盛土内の遺物　坏蓋（第30－61図）は、天井部との境の稜からやや外方に直線的にのび、端部は断面三角形に近い。稜は比較的明瞭で、天井部はやや丸みをもつ。天井部の約３分の２にヘラ



第31図　11号墳出土遺物２

ケズリ、あとは回転ナデで仕上げる。

7．小結

11号墳は、埋葬施設に小規模な横穴式石室をもつ古墳であるが、石室の構造は持ち送りの激しい、ドームを意識した古式の形態を留めた古墳であったと推定される。

出土した須恵器の無蓋高坏の脚部に、長脚２段（55）と１段（46）透かしのものが認められる。この２個体は、製作技法、焼成、胎土から同一窯で同時期に焼かれた可能性があり、型式的には、高坏の１段透かしと２段透かしが混在する微妙な時期ではないかと推定される。須恵器の編年でいえば、田辺編年でＭＴ15型式からＴＫ10型式の間、中村編年ではⅡ型式第２段階と推定され、６世紀前半に比定される。羨門部で出土した２個体の坏蓋（43・44）を除き、すべてこの型式の範疇に入るものと思われる。この中で古い要素を持つものとして、49の坏身、46の無蓋高坏を挙げることができ、新しい要素を持つものとして51・52の坏蓋、53の坏身がある。

羨門部で出土した須恵器坏蓋は、田辺編年のＴＫ217型式、中村編年のⅢ型式第２段階に相当する。当初は最終段階の追葬に伴う遺物かと思われたが、須恵器の型式差が100年間もあること、床面より約0.1mも高い位置からの出土であること、羨門部からの出土であることから、追葬の遺物ではなく墓前祭祀に伴う遺物ではないかと考えている。

出土した遺物の型式差から少なくとも３時期に分けることができ、玄室、羨道内から鉄釘が出土していることなどから、少なくとも木棺は３棺あったものと推定される。

第４章　みかん山古墳群の諸問題

第１節　古墳の分布、築造順について

みかん山古墳群は、現在の所総数12基からなる古墳群[33]（表１）で、今回その内の４基の発掘調査を実施した。みかん山古墳群の分布状況から判断すると、西の調査区外の枚岡山荘内に存在する１号墳を含め一支群を形成するものと推定され、古墳群の中で最も高所に位置する。

調査を実施した４基の古墳の時期は、５世紀後半から６世紀後半にかけてのもので、築造順序は、出土した須恵器の型式から判断すると、９号墳（田辺編年ＴＫ208型式、中村編年Ｉ型式３段階）、８号墳（田辺編年ＴＫ23型式、中村編年Ｉ型式４段階）、11号墳（田辺編年ＭＴ15～ＴＫ10型式、中村編年Ⅱ型式２段階）、10号墳（田辺編年ＴＫ43型式、中村編年Ⅱ型式４段階）の順となる。

これらの古墳から出土した遺物から、８号墳と11号墳との間には若干の時期の開きが認められる。しかし、10号墳（第21－36・37図）、11号墳（第30－61図）の墳丘の盛土、横穴式石室の裏込内から出土している須恵器は、田辺編年のＴＫ43型式、中村編年のＩ型式５段階に相当するものと推定され、この空白の期間を埋める古墳の存在を伺わせる資料と考えている。

古墳名	墳丘	主体部	主体部規模	時期	出土遺物他
１号墳	円墳?	横穴式	—	不明	
２号墳	不明	—	—	—	
３号墳	不明	横穴式	（玄）5.6m （羨）3.2m	—	
４号墳	円墳?	横穴式	不明	—	石棺、須恵器
５号墳	円墳 12m	横穴式・無	（全）6.3m	6世紀後半	須恵器（高坏・短頸壺・甕）、土師器、鉄釘、耳環、埴輪（円筒・朝顔・形象）
６号墳	不明	横穴式	（全）3m以上	6世紀後半 ～末	須恵器（坏身・坏蓋・高坏・甕）、 土師器（杯・鉢）、武器（小刀）、耳環、鉄釘
７号墳	不明	小竪穴	（全）0.7m	6世紀後半 ～末	
８号墳	方墳	木棺?	—	5世紀後半	須恵器（坏身・坏蓋・䍁・甕）、土師器（甕）
９号墳	円墳	木棺?	—	5世紀後半	須恵器（高坏蓋・高坏・器台・甕）、鉄器
10号墳	円墳	横穴式	（玄）3.8m （羨）6.5m	6世紀後半	須恵器（坏蓋・脚付鉢）、 土師器（高杯）、鉄釘
		箱式石棺	（全）0.75m	6世紀後半	
11号墳	円墳	横穴式	（玄）3.1m （羨）3.7m	6世紀前半	須恵器（坏蓋・坏身・高坏・器台・䍁・壺・脚付鉢）、 土師器（鉢）、鉄釘、武器（鉾・鉄鏃・刀子）
12号墳 （びわ塚）	不明	—	—	—	

表１　みかん山古墳群一覧表

これら空白の期間を埋める古墳の位置は、５世紀後半代の２基の古墳が存在する東側の調査区外が最も可能性が高いと考えられる。その地域は、現在寺院となり旧地形の大半が破壊されているが、周辺の地形と比較すると緩やかな斜面が広がっている。

10号墳と11号墳の２基の古墳から出土した遺物は、型式的に時期的な重なりは全く認められないことから、11号墳の追葬が終わった段階で、10号墳の埋葬が始まったものと考えられる。

調査区外の西、枚岡山荘内に存在する１号墳（第２図）は、墳丘上に横穴式石室の石材と推定される巨石が２石ないし３石露出しているが、未調査のため時期は不明である。古墳の分布状況から１号墳は、今回調査を行った古墳と一支群を構成すると考えられることから時期を特定することを試みた。

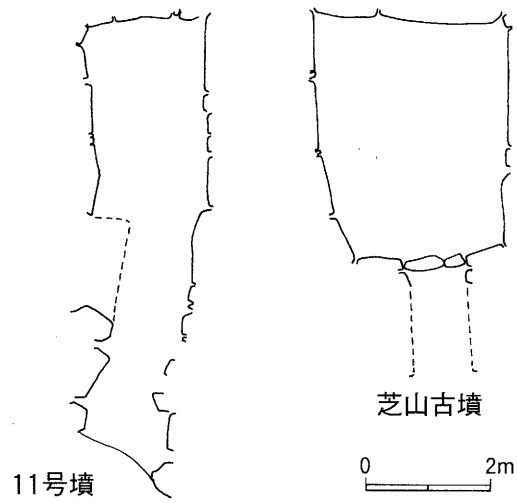
墓前祭祀のために11号墳の羨門付近に置かれたと推定される７世紀前半の須恵器坏蓋２個体（第30－43・44図）を除くと、10号墳から出土した遺物が一番新しい型式であること。調査を行った２基の横穴式石室の築造時期が、６世紀前半（11号墳）と６世紀後半（10号墳）と推定され、調査を実施した古墳の中に６世紀後半から７世紀前半代にかけての古墳が存在しないこと。この周辺の群集墳が、７世紀前半で築造が終了すること。１号墳は、支群の中ではこれらより下方に築かれていること。

これらのことなどから、１号墳は、６世紀末から７世紀初頭にかけて築造され、支群のなかでは最終段階のものと考えている。

第２節　11号墳と芝山古墳との比較について

みかん山古墳群より北に1.5kmの石切町に存在するゴーランドによって調査された古墳である芝山古墳[34]とみかん山古墳群の中では最も古い11号墳は、芝山古墳が全長約28mの前方後円墳に対して、11号墳は径約15m前後を測る小規模な円墳であるが、埋葬施設が横穴式石室で、導入期のものという共通点をもっている。そのことから両者の比較検討を行った。

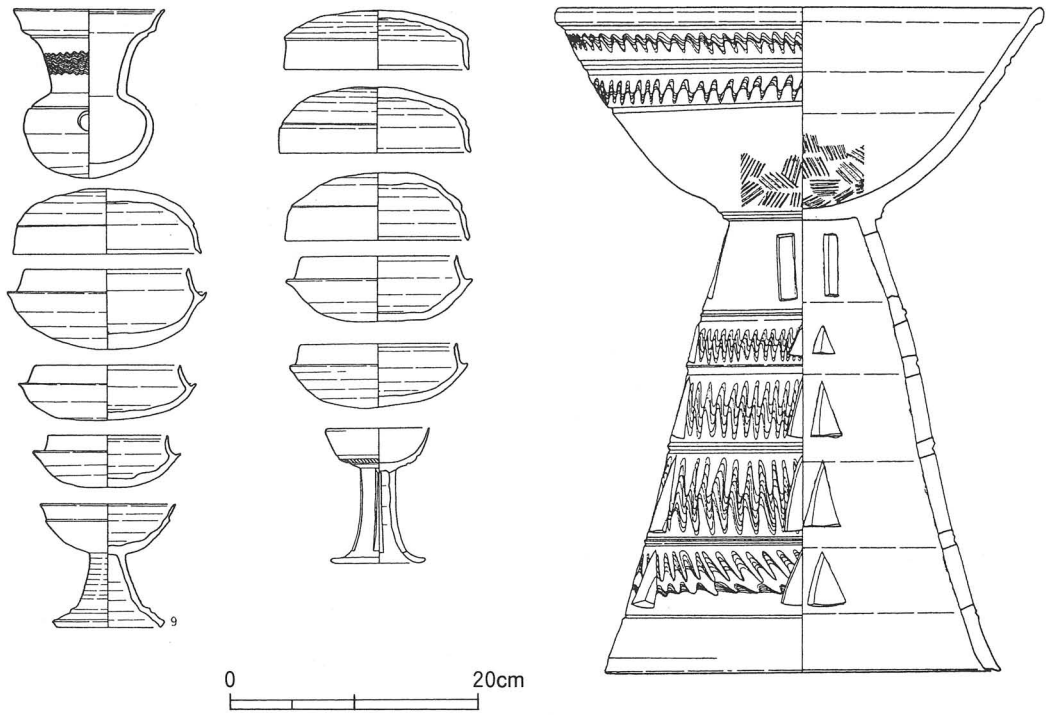
芝山古墳の埋葬施設は、両袖の横穴式石室（第32図）で、玄室の右側壁が3.55m、左側壁が4.16m、奥壁幅3.17m、前壁幅2.41m、高さ3.12mを測り、平面プランは不正台形に近い。天井石は３枚で持送りの激しい構造の石室である。羨道は、長さ1.8m、



第32図　11号墳・芝山古墳平面プラン比較図
「枚岡の原始古代」より転載一部改変

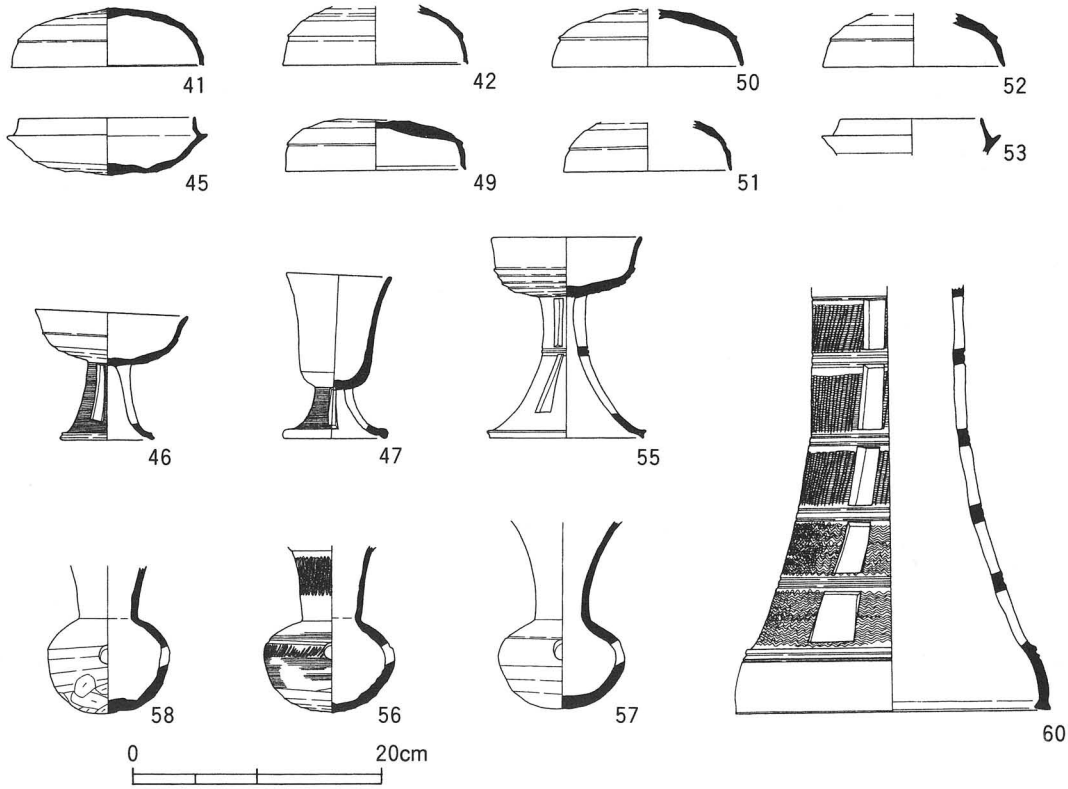
幅1.0m、高さ1.5mを測る。

11号墳の埋葬施設は右袖の横穴式石室（第26図・第32図）である。計測値は、玄室の全長約3.1m、奥壁幅約1.7m、前壁幅約1.8m、高さ1.5m以上を測り、平面プランは長方形に近い。



第33図　芝山古墳出土須恵器

「大阪府芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題」より転載一部改変



第34図　11号墳出土須恵器

両側壁の構築方法から持送りの激しい構造の石室と推定される。羨道は長さ3.7m前後、幅1.0m前後、高さ0.7m以上を測る。

芝山古墳の玄室の平面プランが不正台形に近いのに対して、11号墳は長方形に近いプランで、羨道がそれより長い。芝山古墳が単数埋葬と推定されているのに対して、複数埋葬と考えられる。11号墳の石室の構築方法は、持送りが激しい、奥壁、側壁の平面プランが丸みを帯び、ドームを意識して作られていることなど横穴式石室の構築方法に古い要素を数多く持っている。

芝山古墳から出土した須恵器（第33図）から時期は、田辺編年のＭＴ15型式、中村編年のⅡ型式第１段階と推定される。11号墳玄室からの出土したもの（第34図）は、坏類（41・42・45）については芝山古墳よりは若干新しい要素をもつが、無蓋高坏（46）の脚部の透かしが１段であることから、田辺編年のＭＴ15型式の要素を持ちつつも若干新しく、中村編年ではⅡ型式第２段階に相当するものと考えている。

これらのように11号墳は、芝山古墳よりはやや新しい要素をもっているが、芝山古墳に比べ規模は小さいものの、この周辺では芝山古墳に続く６世紀前半代の横穴式石室導入初期の古墳であり、もっとも早い段階に採用されている例といえる。しかし初期の段階で、なぜこのような歴代墓とされる家族単位の小規模な古墳に、新しい埋葬形式である横穴式石室が導入されたのか不明な点が多い。

第35図　総持寺遺跡弥生時代周溝墓・古墳平面図

「総持寺遺跡調査概要Ⅱ」より転載一部改変

第3節　5世紀代の小規模墳について

調査した5世紀後半代の2基の古墳の中で9号墳は、この時期の小規模墳に方墳が極めて多いのに対して、珍しく円墳である。この現象をどのようにとらえるべきであるか他の調査例から検証してみたい。

小規模墳についての用語の概念規定であるが、それについて数多くの論考が出ており、用語の種類だけでも、下記のようにさまざまである。

「低墳丘方形墓」(小池　寛[35])、「低墳丘古墳」(都出比呂志[36])、「方形区画墓」(寺沢　薫[37])、「古式小古墳」(細川修平[38])、「古式小墳」(近藤義朗[39])、「小型低方墳」(和田晴吾[40])、「埋没小古墳」(岸本道昭[41])などがあり、その存在形態から古式群集墳(石部正志[42])、5世紀型群集墳(長山雅一[43])、初期群集墳(寺沢知子[44])と呼ばれている。

番号	墳形	規　模	全長	埴輪 有○ 形象◎	備　考
1	方	5.0	6.7	×	
2	方	4.5～5.0	6.6	×	
3	方	4.0	7.8	×	
4	円	9.0	11.6	×	
5	方	5.0	(7.1)	×	
6	方	5～5.5	7.2	×	
7	方	9.0	12.0	◎	紡錘車・鉄器・馬形埴輪
8	方	9.5	13.4	◎	ｶﾞﾗｽ製小玉・家形埴輪
9	方	7.0	11.7	◎	水鳥形埴輪
10	方	7.0	(10.9)	○	須恵器把手付椀・須恵器杯2ｾｯﾄ
11	方	7.0～8.0	10.5	◎	家形埴輪
12	方	8.5～9.5	13.4	◎	馬形埴輪
13	方	10.0～10.5	15.2	○	鉄刀
14	方	7.5	10.3	○	
15	方	9.0	12.4	◎	家形埴輪
16	方	9～10	12.2	○	
17	方	7.3～8	10.2	○	
18	方	4.0	7.1	×	
19	方	9.0	13.9	○	須恵器杯蓋
20	方	5.5	6.8	×	
21	方	9.5～10.5	12.3	○	
22	方	8～8.5	10.6	○	
23	方	8.0	10.4	◎	家形埴輪・須恵器大甕・須恵器高杯
24	方	7.0～8.0	10.5	○	
25	方	12.6～14.0	19.0	×	
26	方	不明	(10.0)	×	
27	方	6.2～8.0	9.6	×	須恵器高杯
28	方	9.5	12.9	○	
29	方	7.0～8.0	9.8	◎	家形埴輪・須恵器壺
30	方	8.4～9.2	11.8	○	
31	方	7.0	9.7	◎	鶏形埴輪・水鳥形埴輪
32	方	7.0	8.6	×	
33	方	7.4～8.5	11.4	×	
34	方	7.0	8.9	×	
35	方	6.0	(7.1)	×	
36	方	5.0	6.0	×	
37	方	3.5	4.4	×	
38	方	8.5	11.0	○	須恵器高杯5・蹄・高杯蓋

表2　総持寺古墳群一覧表

番号	形状	規　模	全　長	備　考
1	円	9.0	11.0	長さ0.8mの突出部あり。
2	方	6.5	9.0	
3	方	9.0	10.5	

表3　総持寺遺跡周溝墓一覧表

このように用語の概念規定は各氏によりさまざまであり、これらの名称を用い、存在形態、分布状況からさまざまな論考がなされている。

しかし、その規模についてどこまでが小規模墳であるか明確な数値を記していない。ここではとりあえず、38基の小規模墳が群集している総持寺古墳群の中で規模が最大のものを参考にし、一辺ないし径が15m以下のものを指すこととした。小規模墳の名称については、和田晴吾氏が用いた方形のものを「小型低方墳」、円形のものを「小型低円墳」とし、全体をさすものについては小規模墳とした[45]。

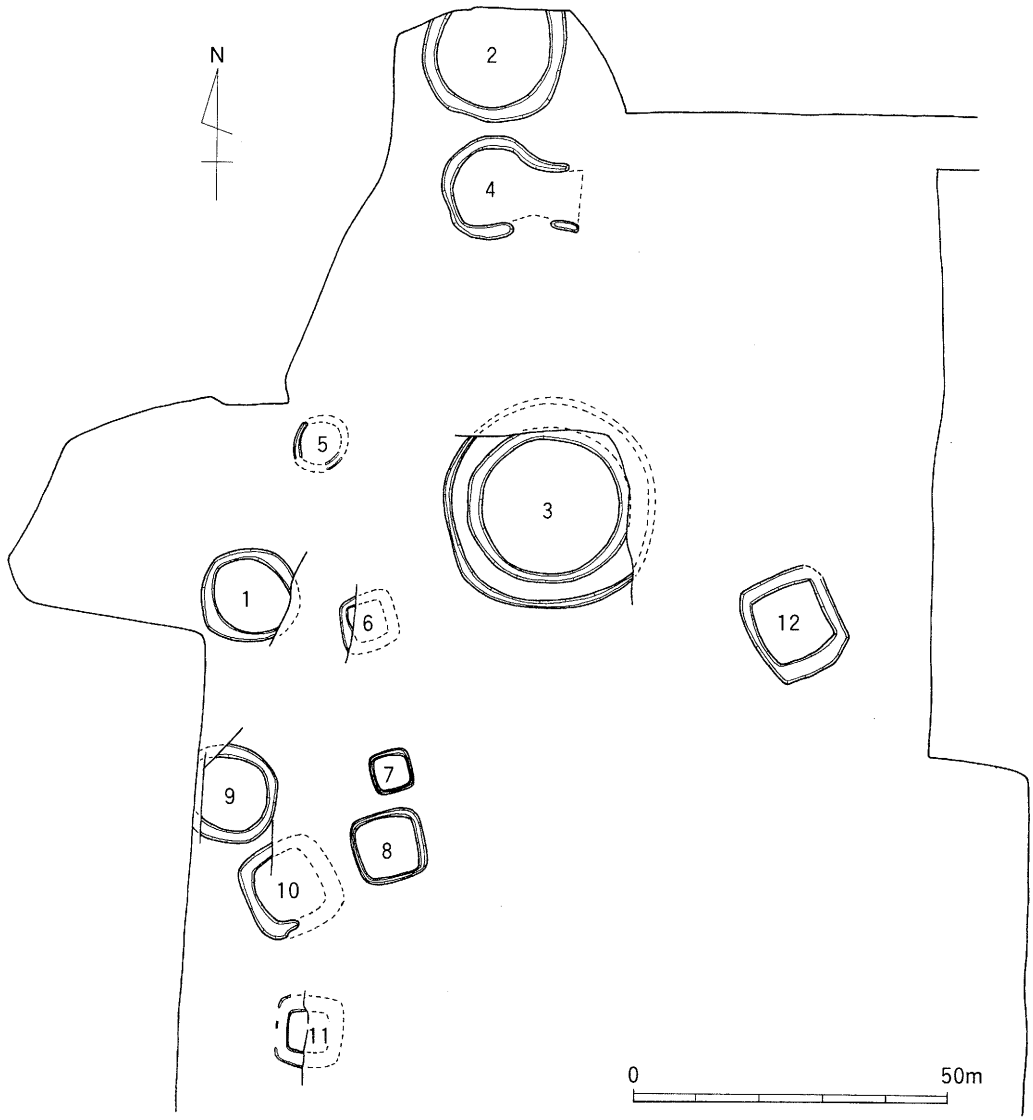
大阪府内では、小型低方墳の中に小型低円墳が存在する例としては、茨木市総持寺に所在する総持寺古墳群(第35図[46])がある。古墳群は、総持寺遺跡の範囲内に存在し、遺跡の時期は、弥生時代後期から中世に至るまで連綿と続いている。古墳群は5世紀前半から後半にかけてのもので、同一丘陵上の北約1.3kmには、ほぼ同一時期に築造された摂津地域で最大規模の前方後円墳である太田茶臼山古墳が存在する。太田茶臼山古墳の周辺には、その陪塚と推定される7基の小規模

墳が知られている。総持寺古墳群が同一丘陵上にあることから、太田茶臼山古墳[47]の被葬者と従属関係にある墓域と考えているが、古墳の位置関係から周辺の陪塚に葬られた人々より階層は下である可能性は高い。

検出した38基の小型の古墳は、分布状況からいくつかのグループに分けることができる。規模には関係なく埴輪を持つものと持たない古墳がある。これらのうち1基のみ径約9mの小型の円墳で、残りのすべてが、一辺4mから14mを測る小型低方墳と呼ばれるものである。小型低円墳の規模も他に比べて大きくなく中規模程度である。

番号	墳 形	規 模	全長	備考
1	円 墳	11.0	15.0	埴輪
2	円 墳	18.0	23.0	鶏型埴輪
3	円 墳	22.0	34.5	2重周溝・埴輪・須恵器
4	帆立貝(?)		23.0	
5	円 墳	(6.5)	8.0	須恵器
6	方 墳	(5.0)	8.0	須恵器
7	方 墳	5.5	6.5	
8	方 墳	9.0	11.0	
9	円 墳	12.0	15.0	
10	方 墳	9.0	14.0	
11	方 墳	6.0	12.0	
12	方 墳	11.0	15.0	

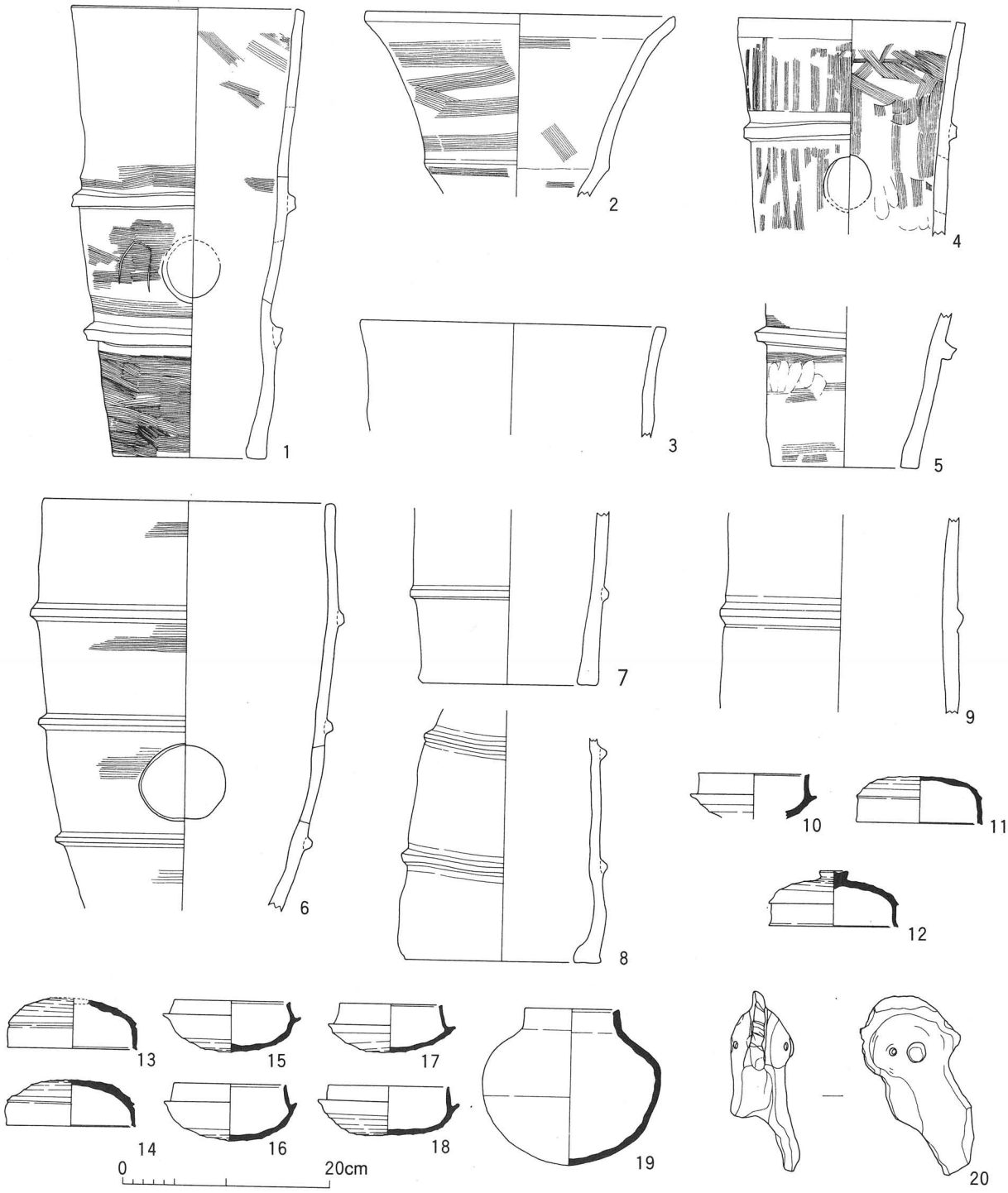
表4　西福井遺跡古墳一覧表



第36図　西福井遺跡古墳平面図

分布状況から方墳の中に混在しており、離れて位置している状況ではないことから別の集団の墓とは考えにくい。

次の例は、茨木市所在西福井遺跡[48]から検出された古墳群（第36図）である。西福井遺跡は、丘陵縁辺部に広がる遺跡で、縄文時代から中世にいたる遺構・遺物が検出された。古墳は総数12基で構成され、その中で小型低円墳が３基、小型低方墳が６基存在する。同一丘陵上部には総数38基からなる横穴式石室を内部主体とする新屋古墳群がある。

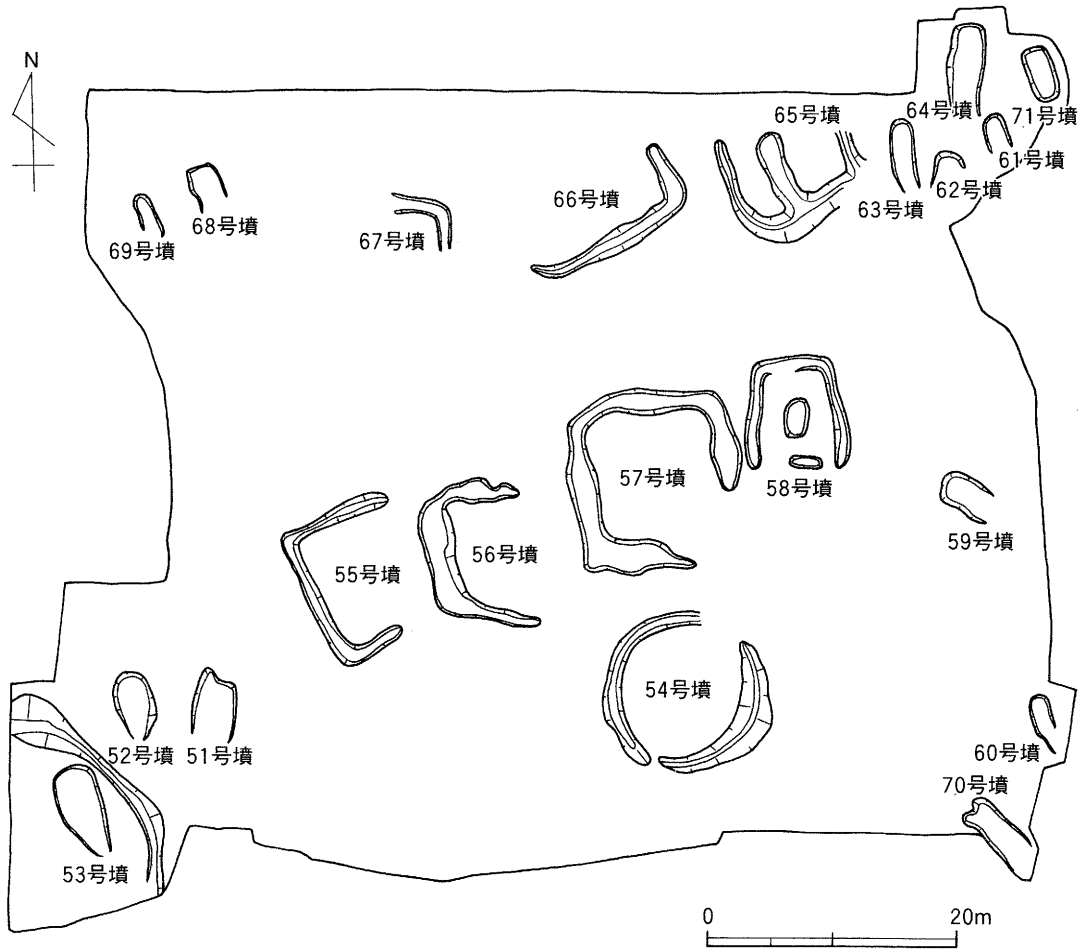


第37図　西福井遺跡古墳出土遺物

1～5．3号墳　12．6号墳　20．2号墳
6～11．1号墳　13～19．5号墳

検出された古墳は、中には接しているものも見受けられるが周溝は切り合わず、点在して存在しているものが多い。時期的には５世紀後半代（第34図）でおさまるものと思われる。主墳と推定される２重堀を持った墳丘の径約22mの円墳をほぼ中央に配置し、その周辺に６基の一辺5.0mから11.0mを測るものと径6.5mから12.0mを測る３基の小型の円墳、円墳１基（径約18m）、１基の帆立貝式古墳（全長約23m）と推定される古墳で構成される。分布状況から主墳を中心に４グループに分けることができる。

３番目の例としては、古墳時代前期末から後期末まで92基の古墳が調査または確認されている寛弘寺古墳群[49]の中に小型低方墳と小型低円墳とで構成される一群がある。これらの一群は、東部丘陵に存在するの２つの首長墓と推定される支群に挟まれた東西約70m、南北約62mの範囲に21基の古墳[50]が検出された。これらの一群は、５世紀後半から７世紀前半に至るまで築かれ、系譜がたどれる例といえる。これらは、５世紀後半から６世紀中頃にかけて築造された小規模墳と６世紀後半から７世紀前半にかけて築造された埋葬施設に横穴式石室ないしは竪穴式石室をもつ古墳で構成される。分布状況、出土遺物から２つのグループに分けることができそうだ。これらの中で５世紀後半から６世紀中頃にかけて築造された８基の小規模墳の中に、５世紀末と推定される径約10mの小型低円墳が存在する。この小型低円墳は、位置関係から２つのグループには属さな



第38図　寛弘寺53～71号墳平面図

「寛弘寺遺跡調査概要Ⅸ」より転載一部改変

いと推定される。

6世紀後半以降のものは、ほとんどの古墳が接して存在し、そのため石室と石室の間が狭く、単独で墳丘をもっていたかどうかは、盛土が削平されているため不明である。

『なぜこのような小型の円墳が少数ながら出現するのか。』という疑問に答えるものに、大阪府内では、総持寺遺跡[51]（第35図）から検出された弥生時代後期後半の周溝墓群（表2）がある。発掘された周溝墓3基のうち1基に円形のものがある。これらの周溝墓群は、総持寺古墳群の南西端部にあり、古墳とは100年以上も時期が離れているが、周溝が切り合わず接するように存在する。このことから古墳を築造する時点までは、墳丘が残存し、それらを避けて古墳群が築造されたものと推察される。つまり古墳群の被葬者達は、周溝墓を墓として認識し、それに葬られた人々を同族の先祖として意識していた可能性が強い。

また、岸和田市下池田遺跡[52]からは、弥生時代中期末から後期初頭にかけての円形周溝墓1基、八尾市成法寺遺跡[53]からは、古墳時代前期とされる径17mから18mと推定される円墳も確認されている。これらの例のように大阪府内では、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけて少数ながら周溝墓の形が、円形のものも存在している。

このことについては、小池　寛氏が、『墳形については伝統的な方形周溝墓を踏襲していることから原則的に方形と考えてよい。』としたが、さらに岸和田市下池田遺跡から検出された弥生時代中期末から後期初頭の円形周溝墓の例から、『その系譜を引く円形墓の存在も完全に否定できない状況であろう[54]。』とした。この例として芝山遺跡6・7号墳[55]をあげている。

その他には兵庫県内では、弥生中期から後期にかけて円形のものが数多く発見されている[56]。これらのことから方形の墓（方形周溝墓）が一般的ではないといえる。弥生時代中期以降検出例は少ないが、方形の墓以外に円形の墓が築造されているのは、特異な例ではないと言える。これらの例のように、福永信雄氏が言われたように『畿内中心部においては極一部（円形）を除き全て方形である[57]。』ではなく、『方形が大半を占めるが、方形の中に円形も混在する例も数多く見受けられる。』といったほうが正しい。小型低方墳が、方形周溝墓という古来からの埋葬形式の伝統を引き継いでいるとするならば、少数ながら小型低円墳が存在する現象は、これも古来からの伝統を引き継いでいるといえよう。

古墳時代中期に小型の方墳の中に少数ながら小型の円墳が混在する意味付けは、各古墳群の中での存在形態、群構成がさまざまであることから、現在の所不明の点が多く今後の研究課題としたい。

第4節　中期古墳の立地について

生駒山西麓では、従来古墳時代前期から中期にかけての古墳は、平野部あるいは丘陵低位部にかけて存在し、山麓部には、存在しないといわれてきた。8・9号墳はこれらの常識を覆した資

料と言える。これが何を意味するのか周辺の同時期の古墳の分布状況（第３図）から考えてみたい。

えの木塚古墳、塚山古墳、舳古墳、大賀世古墳群[58]などの、４世紀末から５世紀後半までの比較的大きな古墳は、扇状地の扇端部に立地する例が多い。それに比べ、植附古墳群[59]、段上古墳群[60]、巨摩１号墳[61]、山賀古墳[62]などの小型低方墳は、平野部に存在するものがほとんどを占める。このことからあらかじめ階層差によって古墳の築造される場所が決まっていたものと推察される。

これらの立地条件をみかん山古墳群の２基の５世紀後半代の古墳群にあてはめてみると、標高120m前後の尾根上に築かれていることから、平地に存在する古墳と同様地形的条件は悪い。そのことから丘陵底部から平野部にかけて存在する古墳とほぼ同じような規制があったのではなかろうか。つまり、大きな古墳を造ることができる階層は扇状地の扇端部に築造され、それ以下の階層は平野部ないしは、尾根上に築造したと考えている。尾根上に築いた例は現在の所、戎山古墳[63]からの出土遺物、客坊山古墳群[64]など極めて少ないが、今後調査例が増えることを期待したい。

これらを岸本道昭氏は『心合寺山古墳など八尾市楽音寺周辺の前方後円墳を地域首長の墓とし、下位の集団首長墳は小さな方墳であった[65]。』とし、埋没小古墳（小型低方墳）の被葬者を氏族共同体を背景とする首長の墓とした。しかし、この論以降も植附古墳群、段上古墳群、みかん山古墳群のように河内平野周辺の調査例が増え、植附古墳のように群集して存在するものもあることや塚山古墳、大賀世古墳群のように、小型低方墳ではなく中規模な古墳の被葬者はどのように扱えばよいのであろうか。東大阪市内においては、古墳時代中期の古墳が少ないが、岸本氏のことばを借りて言うならば、これらが氏族共同体の首長ではないかと推定される。そして小型低方墳や小型低円墳の被葬者達のほとんどは有力な世帯共同体（有力家父長層）の墓ではないかと考えている。

このような現象は、山畑古墳群[66]の中にある瓢箪山古墳[67]（山畑52号墳）、芝山古墳のように、６世紀前半代までは続くのではないかと推察される。

第５節　古墳の被葬者像について

みかん山古墳群周辺の古墳から出土した遺物の中に、埴輪が存在しているものが多く認められる。しかし今回調査した一群には全くそのようなものは認められず、古墳周辺からも出土しなかった。この地域の、特に５世紀後半から６世紀前半にかけての古墳には、埴輪が存在する報告が多くなされている。５世紀後半では、大賀世古墳群、舳古墳など比較的大きな古墳はもちろんのこと、みかん山古墳群に葬られた被葬者とほぼ同様なクラスと考えている平野部に存在する小型低方墳である段上古墳群、山賀古墳、巨摩１号墳からも出土している。植附古墳群では、古墳からではないが周辺に埴輪の存在する古墳の可能性を示す埴輪片が出土している。そして坊主山古墳[68]、芝山古墳をはじめとして、６世紀前半とされる古墳にも数多く認められる。６世紀後半に

なってからもみかん山５号墳などのように少数ながら存在しているものもある。

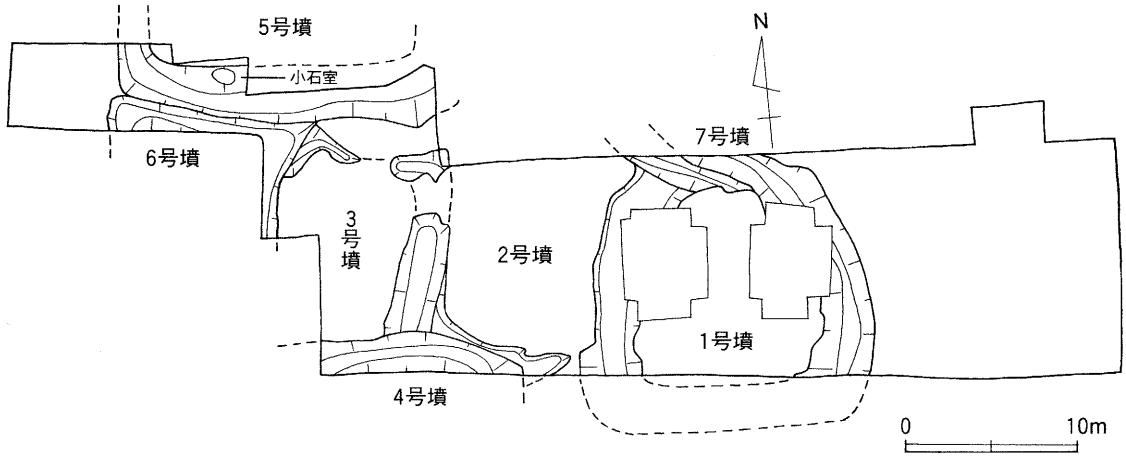
これらの例のように、『古墳が小型であるから、埴輪を持てないのではなく、持つ必要がなかった。葬送儀礼に埴輪を必要としなかった集団であった。』と考えている。その代わりに、５世紀後半に比定される９号墳に見られるように、周溝に墓前祭祀を行ったと推定される遺物が存在していることから、埴輪に代わる何らかの祭祀が行われていたのではないかと推定される。

山畑古墳群をはじめとする周辺の後期古墳の副葬品に、馬具類が出土する古墳が多く、渡来系の集団である馬飼部との深い関係が数多くの文献[69]の中で指摘されている。また、平野部に存在する段上古墳群、植附古墳群のように５世紀中ごろから後半にかけての中期の古墳には、韓式系土器、鉱滓、馬の上顎骨が出土していることなどから、渡来系の氏族の墓[70]と想定している。

今回調査を実施した古墳には、そのようなものは１点も出土しなかった。そして調査地区より西の同じ尾根筋において、1994年から1995年にかけて東大阪市教育委員会によって発掘調査が実施された５～７号墳[71]も同様に馬具類が出土したという記述がない。これらのことから、みかん山古墳群に葬られた被葬者は、それらとは関係のない在地の氏族であった可能性がある。

調査の結果、１号墳を含め５基の古墳は、みかん山古墳群の中で一支群を形成しているものと推察される。これらは、各古墳間に時期の開きが若干認められるものがあるが、５世紀中ごろから後半にかけての古い段階から７世紀前半に至るまで約150年以上も連綿と続いていた墓域であったものと考えている。そして、ほぼ１世代ごとに各１基が連続して築かれていることから、歴代墓と考えられる。主墳と推定される大規模な古墳をもたず、各古墳の規模も小さいことから、周辺に勢力を誇っていた人々の墓域とは考えられず、同族墓というよりもむしろ一家族単位の墓と推察される。

生駒山西麓では、このように家族単位と推定される古墳が連綿と続く古墳群の例としては、当古墳群北西約1.7kmの東大阪市中石切町に所在する植附古墳群（第38図）を挙げることができる。植附古墳群は、標高約７m前後の平野部に、５世紀中ごろから７世紀後半にかけて250年近く連綿と築造された古墳群で、７基の小型低方墳と小規模な竪穴式石室１基で構成されている。



第39図　植附古墳群平面図「生駒山西麓における小型方墳群の一形態」より転載一部改変

東大阪市内においては、みかん山古墳群の他に歴代墓の可能性がある古墳群として、客坊山古墳群がある。確認されている19基の古墳のうち標高170mから210m前後の丘陵尾根筋に存在する4基が、分布状況から一支群をなすものと推定される。1号墳は前方後円墳とされ、埋葬施設である横穴式石室の構造が古式の形態を止めている。2号墳は埋葬施設が不明の円墳である。3号墳は前方後円墳といわれ、内部主体は不明であるが、墳丘裾部からヒレ付の円筒埴輪が出土している。4号墳は円墳で、横穴式石室とされている。これらの状況から5世紀から6世紀にかけて連綿と続く古墳群と推定され、歴代墓の可能性が高いが、調査されていないので不明な点が多い。

他の東大阪市内の生駒山西麓に存在する古墳群は、山畑古墳群などのように6世紀中頃から後半にかけて築造が開始され、7世紀前半には築造が終了するパターンが圧倒的に占めており、これらは生駒山西麓では特異な例として挙げることができる。

みかん山古墳群と客坊山古墳群の2例と植附古墳群の数少ない例から検証することは危険性を伴うが、山麓に存在する歴代墓と平野部に存在する歴代墓には、大きな差が認められるのではないかと推察される。これらは、歴代墓と5世紀代に小古墳が存在するという点で、共通点をもっている。しかし、みかん山古墳群の被葬者が、この地域では最も早い段階である6世紀前半代に横穴式石室という埋葬形式を採用していることに対して、植附古墳群の被葬者は、7世紀後半に古墳の築造が終了するまで横穴式石室を採用せず、5世紀代の小型低方墳の埋葬方法であった木棺直葬を引き続いて行っているという点で、大きな相違点が認められる。つまり、みかん山古墳群に葬られた人々は、この周辺の古墳群に先駆けて、小規模な古墳ではあるが6世紀前半には横穴式石室を採用したものと、植附古墳群のように7世紀後半に至るまで採用しなかったものとでは、歴然と階層差が存在したものと考えられる。階層的には、みかん山古墳群に葬られた人々の方が上であったと可能性が高い。

東大阪市の山麓一帯に山畑古墳群を筆頭に6世紀前半から中頃にかけて新たに造墓活動が始めた集団と、5世紀後半代に造墓活動を始めたみかん山古墳群とでは、古墳に葬られた被葬者の性格が全く異なると考えられる。これらから3種類ないし4種類のパターンを想定している。

1．みかん山古墳群、客坊山古墳群のように5世紀後半から、標高120mから200m前後の山麓に古墳を築き、連綿と連続して築かれ歴代墓の可能性が高いもの。

2．東大阪市内では、段上古墳群、山賀古墳、巨摩1号墳などの古墳に加え、瓜生堂遺跡上層[72]、岩田遺跡[73]などからは、埴輪の出土が知られている。これら平野部に存在する古墳は、6世紀前半代にはほとんどの造墓活動が終了する。これ以降、これらと対照的に生駒山西麓には横穴式石室を埋葬施設に持つ群集墳が急速に増加する傾向が認められる。この現象をとらえることにより、被葬者が同等クラスの集団とすれば、6世紀前半において平野部に基盤をもつ集団が急速に衰退したのではなく、生駒山西麓に墓域を移したのではないかと考えている。

3．山畑古墳群を中心とする一群で、生駒山西麓の東西約1.2km、南北約1.2kmの範囲に6世紀前半から7世紀初頭まで、現在の所120基を越える古墳が集中して存在する。これらの古墳

の副葬品には、馬具類が出土する古墳が多いことや、双円墳、上円下方墳、方墳など特異な墳形をもつ古墳群として知られ、渡来人である馬飼部との深い関係が数多くの文献の中で指摘されている。よって新たにこの地に墓域をかまえた集団の可能性が推定される。しかし、5世紀中頃から後半にかけて築造された段上古墳群、植附古墳群のように、韓式系土器、鉱滓、馬の上顎骨などが出土していることにより、古墳群築造以前にも、朝鮮半島から渡来した馬を飼う集団がいたことも否定できない。

4．植附古墳群のように、5世紀中ごろから平野部において造墓活動が開始され、横穴式石室も採用せず、7世紀後半まで同じ地域で墓を作っていた。

第6節　まとめ

以上のように、さまざまな観点からみかん山古墳群の被葬者について論を進めたが、まとめると以下の様になる。

古墳時代中期に造墓活動を開始したみかん山古墳群の5基からなる一支群に葬られた被葬者は、この地において7世紀前半まで約150年間連綿と造墓活動が続けられた。出土遺物の時期に重なりが認められないことから一家族単位の歴代墓と推定される。

この集団は、5世紀代の多くの古墳に認められるような葬送儀礼に埴輪を使用せず、造墓活動が終了するまで続けられた。

この周辺の氏族共同体の長の墓と推定される芝山古墳に続き、6世紀前半代という早い段階で横穴式石室を採用している。しかし、古墳の規模、墳形、立地条件などから在地の首長層ではないと推察される。また、出土遺物に馬具などが出土しなかったことにより、渡来系氏族の墓域と推定される山畑古墳群と異なり、在地性の強い有力な氏族の墓域と考えられる。

参考文献〉

東大阪市教育委員会 『東大阪市の古墳』『わが町再発見』 1996
藤井直正、都出比呂志、河内歴史研究グループ「原始・古代の枚岡」東大阪考古学研究会 1967
須恵器の編年については、
田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ 1966
中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』 大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会 1980
を参考にし、古墳の時期を決定し型式名を併記した。

註〉

(1) 東大阪市教育委員会 『東大阪市の古墳』『わが町再発見』 1996
(2) 藤井直正、都出比呂志、河内歴史研究グループ「原始・古代の枚岡」東大阪考古学研究会 1967
(3) 大塚初重「大阪府芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題」『考古論集 祝慶 松崎寿和先生六十三歳論文集』松崎寿和先生退官記念事業会 1977
大塚初重氏の論文中に、須恵器の実測図 (P319・321) がある。田辺編年でMT15型式、中村編年でⅡ－1型式のものと判断される。本文中に5世紀後半との記述がある。
これらのほかに、
藤井直正、都出比呂志、河内歴史研究グループ「原始・古代の枚岡」東大阪考古学研究会 1967
東大阪市教育委員会 『東大阪市の古墳』『わが町再発見』 1996
などの従来の報告では古墳の時期は、5世紀後半とされていたが1段階新しく6世紀初頭とした方がよさそうである。
福永信雄「生駒西麓における小型低方墳の一形態」『西谷真治先生古希記念論文集』 西谷真治先生の古希をお祝いする会 1995
の論稿中には6世紀前半と記載されている。
(4) 梅原末治 『河内五条の方形墳』「近畿地方古墳墓の調査1」日本文化研究所 1935
(5) 京都大学考古学教室「金山古墳および大藪古墳の調査」『大阪府文化財調査報告書 第2輯』 大阪府教育委員会 1953
須恵器から見ると田辺編年でTK217型式、中村編年でⅡ－6ないしはⅢ－1型式にあたる。6世紀末から7世紀初頭と推定される。
(6) 上田宏範・森浩一「大阪府枚岡市石切町墓尾古墳群の調査」『古代学研究 23』 古代学研究会 1971
原田修「墓尾古墳」東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 8 東大阪市教育委員会 1971
須恵器からみると田辺編年でTK217型式、中村編年でⅡ－6ないしはⅢ－1型式にあたる。6世紀末から7世紀初頭と推定される。
(7) (2) と同じ。
(8) 西の山古墳は、明治14年開墾中に後円部から石棺が発見され、その中に人骨、勾玉、刀剣、銅鏃、管玉などが出土している。
(9) (1) と同じ
1971年に、縄手小学校体育館建設に先立って発掘調査された。検出された周濠の形状から小型の前方後円墳またはやや大きな円墳と考えられている。ヒレ付円筒埴輪、子持勾玉が出土している。
(10) (1) と同じ。
径20mの円墳。円筒埴輪・朝顔形埴輪の他に、盾、衣蓋などの形象埴輪が出土している。
(11) 福永信雄「生駒西麓における小型低方墳の一形態」『西谷真治先生古希記念論文集』 西谷真治先生の古希をお祝いする会 1995
(12) 上野利明「半堂遺跡」『半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概要』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要23 東大阪市教育委員会 1986
上野利明 中西克宏「大賀世2号墳・3号墳出土の遺物について」『財団法人東大阪市文化財協会紀要Ⅰ』 (財) 東大阪市文化財協会 1985
3基からなる古墳群で、墳形・規模など不明であるが、周溝内から埴輪、須恵器などが出土している。埴輪は円筒埴輪の他に、人物、いのしし、しか、大刀、衣蓋、盾、短甲、琴、馬などの形象埴輪が存在している。出土した須恵器でみると2号墳・3号墳は、田辺編年のTK47型式、中村編年のⅠ－4型式にあたる。
(13) (1) と同じ。
径12mの円墳と推定され、円筒埴輪、須恵器、製塩土器が出土している。
(14) 近畿大学「近大山賀遺跡Ⅱ」1989
一辺約13mの方墳で、周溝内から円筒埴輪、衝角付冑形埴輪、須恵器などが出土している。出土した須恵器でみると田辺編年のTK47型式、中村編年のⅠ－5型式にあたり、5世紀末と推定される。

(15) 玉井 功・小野久隆「巨摩・瓜生堂」（財）大阪文化財センター 1981

一辺約15mの方墳と推定され、主体部は、木棺直葬の他に埴輪円筒棺がある。周溝内から須恵器、円筒埴輪の他に椅子、水鳥、人物などの形象埴輪が出土している。

出土した須恵器からみると田辺編年のTK47型式よりは新しくMT15型式よりは古い様相をもつ。中村編年では Ⅰ－５型式よりは新しくⅡ－１型式よりは古い様相をもつ。よって５世紀末から６世紀初頭としておきたい。

(16) 大阪府史蹟名勝天然記念物 第３冊 大阪府教育委員会 1928

現在破壊されて存在しないが、この本によると横穴式の円墳で、古墳の数値の記載がある。

東大阪市教育委員会「東大阪市の古墳」『わが町再発見』 1996

この本に出土した遺物の写真が記載されている。この中の有蓋高坏のセットから判断すると５世紀後半と推定される。田辺編年のTK47型式、中村編年のⅠ－４ないし５型式にあたる。

この２つの資料から５世紀後半代の横穴式石室をもつ古墳としたが、他の資料では６世紀前半代とされているものが多い。

(17)（１）と同じ。

1995年に２基の古墳が発掘調査された。小型低方墳と呼ばれるもので、周溝内から須恵器、土師器、韓式系土器、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、馬の歯などが出土した。

(18)（３）と同じ。

(19)（１）と同じ。

68基確認されている。ほとんどが埋葬施設に横穴式石室をもつ円墳であるが、双円墳、方墳、上円下方墳が含まれている。馬具の出土が多いことから馬飼部をひきいる渡来系氏族である河内首一族の築いた古墳群とされている。

原田修 『山畑古墳群Ⅰ』 東大阪市文化財調査報告書第1冊 東大阪市教育委員会 1973

福永信雄「山畑48号墳出土の土師器について」『調査会ニュース』 No.２東大阪市遺跡保護調査会 1974

才原金弘「山畑遺跡採集の遺物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.３ No.４ (財)東大阪市文化財協会 1988

芋本隆裕「山畑66号墳の調査」『馬場川・上六万寺遺跡・山畑66号墳調査報告 昭和55年度』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要22 東大阪市教育委員会 1981

芋本隆裕「山畑25号墳保存整備に伴う石室床面の調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 平成３年度』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要31 東大阪市教育委員会 1992

(20)（１）と同じ。

４基が確認されている。埋葬施設に横穴式石室をもつ。

(21)（１）と同じ。

19基が確認されている。ほとんどが横穴式石室を埋葬施設にもつ円墳であるが、３号墳のみ前方後円墳といわれており、墳丘からヒレ付円筒埴輪が出土している。

原田 修「客坊山所在の一古墳と石棺」『調査会ニュース』 No.５ 東大阪市遺跡保護調査会 1976

(22)（１）と同じ。

28基が確認され、すべて横穴式石室を埋葬施設にもつ円墳である。

吉村博恵「坏内出土の歯－古代葬送習俗の一端－」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.３ No.１ (財)東大阪市文化財協会 1987

吉村博恵「花草山23・24号墳発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和62年度』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要29 東大阪市教育委員会1988

(23)（１）と同じ。

11基の古墳が確認されている。すべて埋葬施設に横穴式石室をもつ。墳形は不明なものが多いが円墳と推定される。

木建正宏「菊水学園出土の古墳時代遺物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.５ No.４ (財)東大阪市文化財協会 1987

(24)（１）と同じ。

９基が確認されている。ほとんどが円墳であるが、２号墳（二本松古墳）のみ方墳で埋葬施設に横穴式石室をもつ。

『枚岡市六万寺町二本松古墳の調査』 枚岡市文化財調査報告1 枚岡市教育委員会 1965

(25)『河内四条史』 1977、1981

この周辺の古墳群ついては、数多くの発掘調査がなされ、各種の報告書、論文が刊行されている。この本は各古墳の説明について詳しく記述している。

(26) (1) と同じ。

南北の長さ約50mを測る。2つの墳丘内には埋葬施設に横穴式石室をもつ。時期は6世紀前半とされている。これらの他に同じ古墳群内に鬼塚 (53号墳)、神並古墳群の中にある夫婦塚 (5号墳) がある。

(27) (1) と同じ。

一辺約28mの四角い盛土の上に径14mの丸い盛土を重ねている。埋葬施設は横穴式石室で全長16.6mを測り府下最大のものである。

(28) (1) と同じ。

一辺約10.4mの方墳で、埋葬施設は、横穴式石室である。この時期の方墳は、出雲井12号墳、五条古墳、山畑18号墳、六万寺2号墳 (二本松古墳) がある。

(29) 『新撰姓氏録』河内国諸蕃に、「河内連」がのせられ、「出自百済国都慕王男陰太貴首王也」とあることによって、百済からの渡来人であったことがわかる。河内連はもとは直姓であり、天武天皇10年に連となった。

(30) (6) と同じ。

(31) 壬生田純之 『日本横穴式石室の系譜』 学生社 1991

(32) (1) と同じ。

芋本隆裕「山畑25号墳保存整備に伴う石室床面の調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 平成3年度』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要31 東大阪市教育委員会 1992

(33) (1) と同じ。

(34) (3) と同じ。

(35) 小池 寛 [「低墳丘方形墓」少考－用語の概念規定－] 『京都府埋蔵文化財論集』 第2集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991

(36) 都出比呂志「墳墓」『日本考古学』 4 集落と祭祀 岩波書店 1986

(37) 寺沢 薫「矢部遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』 第49集 奈良県橿原考古学研究所 1985

(38) 細川修平 [「古式小古墳」素描] 『史想』 第21号 京都教育大学考古学研究会 1988

(39) 近藤義朗「前方後円墳の時代」岩波書店 1983

(40) 和田晴吾「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』 Vol.4 立命館大学人文科学研究所 1988

和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』 第5巻 近畿Ⅰ 角川書店 1992

(41) 岸本道昭「河内平野の埋没小古墳研究予察」『山賀 (その5・6)』 (財) 大阪文化財センター 1986

(42) 石部正志「古墳文化論－群集小古墳の展開を中心に－」『日本史を学ぶ』 1 原始・古代 雄山閣 1975

(43) 長山雅一「長原古墳群の性格について」『古代史論集 上』 塙書房 1988

(44) 寺沢知子「初期群集墳の一様相」『考古学と古代史』 同志社大学考古学シリーズⅠ 1983

(45) (35) から (44) と同じ。

これらの他に

吉村 健「小古墳による奈良盆地の政治史的研究 (上)」『考古学研究』 第35巻 第4号 1989

吉村 健「小古墳による奈良盆地の政治史的研究 (下)」『考古学研究』 第36巻 第1号 1989

田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』 第32巻 第4号 1986

伊賀高弘「上人ヶ平古墳群における小規模な方墳について」『京都府埋蔵文化財論集』 第2集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991などがある。

(46) 奥 和之「総持寺遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 1995

山上 弘・酒井泰子「総持寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ」大阪府教育委員会 1997

(47) 摂津地域最大の前方後円墳で、墳丘全長226m、後円部径138m、高さ19.2m、前方部長117m、幅147m、高さ19.8m、幅28～33mの周濠、古墳全長286mを測る。時期は5世紀後半と推定される。

(48) 1981～1982年度にかけて新設高校建設に先立って、大阪府教育委員会によって発掘調査された。報告書未刊行。

(49) 河南西部地区農地開発事業に伴う発掘調査として、1982年度に開始され、1993年度に終了した。調査面積は13,2000㎡にも及ぶ。発掘調査によって検出された古墳の概要は、下記に記載されている。

山本 彰「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ」大阪府教育委員会 1983

山本 彰「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ」大阪府教育委員会 1984

大谷直孝「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅲ」大阪府教育委員会 1985
大谷直孝「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ」大阪府教育委員会 1986
上林史朗・奥 和之他「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ」大阪府教育委員会 1987
上林史朗「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅵ」大阪府教育委員会 1987
上林史朗「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ」大阪府教育委員会 1988
上林史朗「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅷ」大阪府教育委員会 1989
上林史朗「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅸ」大阪府教育委員会 1990
上林史朗「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅹ」大阪府教育委員会 1991
上林史朗「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅺ」大阪府教育委員会 1992
小林義孝「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅻ」大阪府教育委員会 1994
藤田道子「寛弘寺遺跡発掘調査概要・XV」大阪府教育委員会 1996

(50) 上林史朗「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅸ」大阪府教育委員会 1990

(51) 山上 弘・酒井泰子「総持寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ」大阪府教育委員会 1997

(52) 中村 浩・近藤利由「下池田遺跡―第2次発掘調査報告書―」大谷大学資料館報告書 第17冊 大谷大学資料館 1987

(53) 福田英人「成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ」大阪府教育委員会 1986

(54) (35) と同じ。

(55) 小池 寛「芝山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』 第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987

(56) (52) と同じ。

この中で、近藤利由氏は、「下池田遺跡検出の円形周溝について」として考察を設け、円形周溝墓および小型低円墳の集成を行っている。これによると兵庫県が最も多く検出されている。また、滋賀県においては、小型低円墳の例が多いことがわかる。

(57) (11) と同じ。

(58) (1) と同じ。

(59) (11) と同じ。

(60) (1) と同じ。

(61) (15) と同じ。

(62) (14) と同じ。

(63) (1) と同じ。

(64) (1) と同じ。

(65) (41) と同じ。

(66) (19) と同じ。

(67) (1) と同じ。

(68) (1) と同じ。

(69) (29) と同じ。

(70) (11) と同じ。

(71) (1) と同じ。

(72) 芋本隆裕「瓜生堂上層遺跡」『瓜生堂上層遺跡・Ⅲ池遺跡』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 20 東大阪市遺跡保護調査会 1980

(73) 福永信雄「岩田遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報』Ⅰ 東大阪市遺跡保護調査会 1975

出土遺物計測値表

凡　例

番号 …… 挿図、図版の遺物番号と一致する。

色調 …… 小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帳」日本色彩研究所 1992
により、色名についてはJIS notationで表した。

胎土 …… 密、やや密、やや粗、粗の順で表した。

焼成 …… 堅緻、良好、やや不良、不良の順で表した。

番号	出土地点	種類	器種	法量（　）は復元値				色調	胎土	焼成	残存	備考
				口径	器高	脚・高台径	その他					
1	8号墳 南溝	須恵器	坏蓋	(12.2)	残存高 4.6			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N5/0	密	良好	1/5	
2	8号墳 南溝	須恵器	坏蓋	(11.8)	残存高 3.3			(内) N6/0 (外) N6/0 (断) N6/0	密	良好	1/12	
3	8号墳 東溝	須恵器	坏身	11.1	4.9			(内) 5GY6/1 (外) N5/0 (断) 5R6/1	やや密	堅緻	3/4	
4	8号墳 東溝	須恵器	坏身	(10.8)	残存高 3.2			(内) 5PB5/1 (外) 5PB4/1 (断) N5/0	密	良好	1/6	
5	8号墳 南溝	須恵器	壷	(11.6)	残存高 5.4			(内) N5/0 (外) 7.5Y6/1 (断) 5Y6/2	密	良好	口頸部 1/5	
6	8号墳 南溝	須恵器	瑞	(9.1)	(11.6)			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) 2.5Y7/2	密	良好	3/4	自然釉付着 火だすき痕
7	8号墳 東溝	須恵器	甕	(16.5)	(31.0)			(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	密	良好	口頸部1/4 底部完形	自然釉付着
8	8号墳 東溝	土師器	甕	(19.5)	残存高 5.9			(内) 2.5YR4/8 (外) 5YR6/8 (断) 7.5YR7/6	やや粗	不良	口頸部 1/4	
9	9号墳 東溝	須恵器	高坏蓋	12.8	5.9		つまみ径 3.0	(内) 7.5Y7/1 (外) 5Y7/2 (断)	密	良好	完形	つまみは乳頭状突起
10	9号墳 東溝	須恵器	高坏蓋	13.1	5.8		つまみ径 3.2	(内) 5Y7/1 (外) 5Y7/2 (断)	密	良好	完形	
11	9号墳 東溝	須恵器	高坏蓋	12.3	5.6		つまみ径 2.7	(内) 5B5/1 (外) 10BG5/1 (断)	密	良好	完形	
12	9号墳 東溝	須恵器	高坏蓋	12.4	5.0		つまみ径 2.5	(内) 5PB6/1 (外) 7.5R5/1 (断)	密	堅緻	完形	
13	9号墳 東溝	須恵器	有蓋高坏	10.6	9.0	8.5		(内) N7/0 (外) N7/0 (断)	密	良好	完形	
14	9号墳 東溝	須恵器	有蓋高坏	(10.7)	9.6	9.0		(内) 5Y7/1 (外) 5Y7/1 (断) N7/0	密	不良	2/3	
15	9号墳 東溝	須恵器	有蓋高坏	11.1	8.9	8.9		(内) 5PB5/1 (外) 5PB5/1 (断) 5R5/1	密	堅緻	4/5	3方向の台形透かし
16	9号墳 東溝	須恵器	有蓋高坏	10.2	9.6	8.5		(内) 5B6/1 (外) 10BG6/1 (断)	密	良好	完形	3方向の台形透かし
17	9号墳 東溝	須恵器	有蓋高坏	(10.6)	10.3	8.8		(内) 5B5/1 (外) 5B6/1 (断) 5R5/1	密	堅緻	4/5	3方向の台形透かし
18	9号墳 東溝	須恵器	無蓋高坏	16.2	11.7	9.2		(内) N6/0 (外) 7.5Y7/3 (断) N6/0	密	堅緻	完形	3方向の台形透かし 自然釉付着 一対の把手
19	9号墳 東溝	須恵器	甕	22.5	残存高 42.3		体部最大径 43.9	(内) N6/0 (外) N4/0 (断) 7.5R5/2	密	堅緻	4/5	自然釉付着
20	9号墳 東溝	須恵器	甕	(17.9)	残存高 20.2		体部最大径 (32.6)	(内) 2.5GY8/1 (外) 2.5GY8/1 (断) 2.5GY8/1	密	不良	口頸部1/4 肩部3/4	

表5　土器計測値表1（cm）

番号	出土地点	種類	器種	法量（ ）は復元値				色調	胎土	焼成	残存	備考
				口径	器高	脚・高台径	その他					
21	9号墳 東溝	須恵器	甕		残存高 10.5			(内) 7.5Y7/2 (外) 7.5Y7/2 (断) 7.5Y7/2	密	不良	底部のみ	
22	9号墳 東溝	須恵器	器台	37.0	32.1	(28.6)		(内) 10YR5/1 (外) N5/0 (断) 2.5YR5/3	密	堅緻	口縁部2/3 脚部1/3	3段に6方向の三角形透かし
24	9号墳 周辺	須恵器	甕	(25.8)	残存高 3.2			(内) 5B4/1 (外) 5B3/1 (断) 5R5/1	密	堅緻	口縁部 1/4	自然釉付着
25	10号墳 玄室	須恵器	坏蓋	(17.6)	残存高 3.1			(内) N6/0 (外) N6/0 (断) N6/0	密	良好	1/10	
26	10号墳 羨道	須恵器	坏蓋	(16.0)	4.4			(内) 10YR7/3 (外) 7.5YR7/6 (断) 10YR7/3	密	不良	1/3	
27	10号墳 玄室	須恵器	坏蓋	(14.7)	残存高 3.1			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N4/0	密	良好	1/10	
28	10号墳 羨道	須恵器	坏蓋	14.6	4.0			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) 5B5/1	密	良好	1/3	
29	10号墳 羨道	須恵器	脚付鉢	8.8	10.3	8.4		(内) 10BG6/1 (外) 2.5GY6/1 (断) 10BG6/1	やや密	良好	完形	自然釉付着 3方向の円孔
30	10号墳 羨道	土師器	高坏	13.3	7.5	8.5		(内) 5YR5/6 (外) 5YR5/6 (断) 5YR5/4	密	やや 不良	完形	
31	10号墳 北西墳丘裾部	須恵器	坏身	(11.7)	残存高 4.1			(内) N5/0 (外) N6/0 (断) N6/0	やや密	良好	1/6	
32	10号墳 北西墳丘裾部	須恵器	甕	(21.2)	残存高 12.6			(内) N5/0 (外) 7.5Y7/3 (断) N4/0	やや密	良好	口頸・肩部 1/3	自然釉付着
33	10号墳 北西墳丘裾部	須恵器	甕	(21.0)	残存高 9.8			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N5/0	密	堅緻	口頸・肩部 1/6	
34	10号墳 玄室	黒色土器	椀	(14.0)	5.0	(7.0)		(内) N2/0 (外) 10YR7/4 (断) 10YR7/4	密	良好	1/3	内黒
35	10号墳 東溝	須恵器	把手付椀		残存高 5.6			(内) 2.5GY4/1 (外) 2.5GY4/1 (断) 2.5GY4/1	密	良好	口縁部欠損	自然釉付着
36	10号墳 玄室石室裏込	須恵器	坏蓋	(11.5)	残存高 3.5			(内) N6/0 (外) N6/0 (断) N6/0	密	良好	1/10	
37	10号墳 盛土	須恵器	坏蓋	(12.6)	残存高 3.8			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) 5R6/1	やや密	堅緻	1/4	
41	11号墳 玄室	須恵器	坏蓋	(14.9)	4.7			(内) 5Y6/1 (外) 5Y6/1 (断) 5Y7/1	密	良好	3/4	
42	11号墳 玄室	須恵器	坏蓋	(14.9)	残存高 4.7			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N5/0	密	良好	1/2	
43	11号墳 羨門	須恵器	坏蓋	11.0	2.8		かえり径 9.0	(内) 5Y7/2 (外) 2.5Y7/1 (断) 5Y5/1	やや密	良好	4/5	つまみ径1.7 自然釉付着
44	11号墳 羨門	須恵器	坏蓋	11.3	残存高 2.1		かえり径 8.9	(内) 7.5Y6/1 (外) 5Y6/1 (断) 5Y6/2	やや密	良好	4/5	つまみ欠損

表6 土器計測値表2 (cm)

番号	出土地点	種類	器種	法量（　）は復元値				色調	胎土	焼成	残存	備考
				口径	器高	脚・高台径	その他					
45	11号墳 玄室	須恵器	坏身	13.6	4.6			(内) N6/0 (外) N6/0 (断) 7.5Y7/1	やや密	良好	完形	
46	11号墳 玄室	須恵器	無蓋高坏	12.1	10.3	7.1		(内) 5B5/1 (外) N5/0 (断) 2.5YR4/2	密	堅緻	3/4	3方向の台形透かし
47	11号墳 玄室	須恵器	脚付鉢	8.1	13.1	7.9		(内) 5Y6/2 (外) N7/0 (断) N5/0	密	良好	2/3	4方向の台形透かし 自然釉付着
48	11号墳 玄室	土師器	鉢	(9.5)	5.7			(内) 7.5YR6/6 (外) 7.5YR6/6 (断) 7.5YR6/6	密	良好	4/5	
49	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	坏蓋	(14.2)	4.1			(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	やや密	良好	1/2	
50	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	坏蓋	(14.8)	残存高 4.6			(内) 7.5Y7/0 (外) 7.5Y7/0 (断) 7.5Y7/0	やや密	良好	1/3	
51	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	坏蓋	12.9	残存高 4.0			(内) N5/0 (外) N5/0 (断) N5/0	やや密	良好	1/2	
52	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	坏蓋	(14.1)	残存高 4.3			(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N8/0	やや密	良好	1/4	
53	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	坏身	(11.0)	残存高 2.9			(内) N7/0 (外) N7/0 (断) N7/0	やや密	良好	1/12	
54	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	壺	(16.6)	残存高 9.9			(内) 5B7/1 (外) N5/0 (断) 2.5YR5/2	やや密	堅緻	口頸部 1/7	自然釉付着
55	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	無蓋高坏	(11.9)	15.8	(12.3)		(内) 10Y7/1 (外) N4/0 (断) 10Y7/1	密	堅緻	1/2	3方向の長方形透かしと 3方向の台形透かしの2段
56	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	瓶		残存高 13.7		頸部径 4.8	(内) 5B6/1 (外) 5B6/1 (断) 5P4/1	密	堅緻	2/3	
57	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	瓶		残存高 15.1		頸部径 4.4	(内) N3/0 (外) N3/0 (断) N3/0	密	良好	2/3	
58	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	瓶		残存高 11.7		頸部径 4.7	(内) N6/0 (外) N5/0 (断) N7/0	密	良好	口縁部欠損	自然釉付着
59	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	脚付壺		残存高 6.2	15.0		(内) 5Y7/1 (外) 5Y7/1 (断) 5Y7/1	密	良好	脚部 1/2	
60	11号墳 南西墳丘裾部	須恵器	器台		残存高 33.8	(25.4)		(内) 10Y6/1 (外) 5Y4/1 (断) 2.5YR4/2	やや密	堅緻	脚部 1/2	自然釉付着 5段の6方向の透かし
61	11号墳 盛土	須恵器	坏蓋	(13.3)	残存高 4.2			(内) N8/0 (外) N8/0 (断) N6/0	密	良好	1/4	

表7　土器計測値表3（cm）

番号	出土地点	全長（現存長）	頭部幅×厚	幅×厚	木質残存状況	頭部	備考
38	10号墳 羨道	(10.0)	1.3×1.2	0.5×0.5		扁平ｵﾘﾏｹﾞ	先端欠
68	11号墳 石室	(1.3)	0.8×0.6	0.6×0.5	全面横方向	扁平ｵﾘﾏｹﾞ	木質残存良好、頭部のみ
69	11号墳 石室	(7.2)		0.5×0.5	全面縦方向		木質残存良好 先端のみ
70	11号墳 石室	(3.7)		0.5×0.5			頭部・先端欠
71	11号墳 羨道	(7.6)	1.3×0.7	0.6×0.5	頭部のみ横方向	扁平ｵﾘﾏｹﾞ	先端欠
72	11号墳 羨道	(5.7)	0.7×1.0	0.7×0.7	頭部から3.0㎝横方向他縦方向	扁平ｵﾘﾏｹﾞ	木質残存良好 先端欠
73	11号墳 羨道	(4.2)		0.4×0.4	横方向（少し残存）		頭部・先端欠
74	11号墳 羨道	(3.2)		0.4×0.4			頭部・先端欠
75	11号墳 羨道	(2.9)		0.6×0.7	全面縦方向		頭部・先端欠
76	11号墳 羨道	(2.5)		0.5×0.5			先端のみ

表8　鉄釘計測値表（cm）

番号	出土地点	全長（現存長）	刃長	刃幅	刃厚	頭部形	備考
65	11号墳 玄室	(9.8)	1.8	1.2	0.4	両刃	長頸細根式両刃鉄鏃
66	11号墳 玄室	(7.8)	2.2	1.2	0.4	両刃	長頸細根式両刃鉄鏃
67	11号墳 玄室	(6.3)	欠	1.2	欠	両刃	長頸細根式両刃鉄鏃 刃身欠

表9　鉄鏃計測値表（cm）

番号	出土地点	全長（現存長）	刃部長	刃幅	備考
62	11号墳 玄室	(14.5)	9.4	2.1	茎部は鹿角が残存、木質も残存 刃部に木質と鋲状のもの残存。黒漆が刃部に一部付着（鞘か?）
63	11号墳 玄室	(10.8)	8.7	1.2	

表10　鉄刀子計測値表（cm）

番号	出土地点	全長（現存長）	袋断面	口径	備考
64	11号墳 玄室	(15.9)	円形	3.0	石突部 錆付着

表11　鉄鉾計測値表（cm）

番号	出土地点	長径	短径	厚さ	端部成形	内部	備考
40	10号墳 東溝	3.2	3.0	0.65	しぼり込み	銅芯	金残存

表12　耳環計測値表（cm）

番号	出土地点	現存長	厚	備考
23	9号墳 東溝	3.4	0.7×0.25	2点付着（鉄鏃か刀子） 錆付着
39	10号墳 羨道	4.3	0.5×1.0	錆付着

表13　不明鉄製品計測値表（cm）

THE REPORT OF THE EXCAVATION AT MIKANYAMA KOFUN CLUSTER

CONTENTS

PHOTO PL.1 (above) THE REMAINS IN SITU AT KOFUN NO.9
(below) SUE WARE FOUND AT KOFUN NO.9
PHOTO PL.2 (above) KOFUN NO.10 AND 11
(below) GOBLET OF SUE WARE
PREFACE
EXPLANATION NOTES
INDEX
CHAPTER 1 INTRODUCTION 7
CHAPTER 2 GEOGRAPHICAL AND HISTORICAL SITUATION OF THE SITE 3
CHAPTER 3 OUTLINE OF THE RESEARCH 7
1 KOFUN NO.8 7
2 KOFUN NO.9 11
3 KOFUN N0.10 17
4 K0FUN N0.11 30
CHAPTER 4 ANAIYSIS 44
1 THE SCOPE OF THE SITE AND THE DATE OF BUILDING OF EACH KOFUN 44
2 A COMPARISON BETWEEN KOFUN NO.11 AND SHIBAYAMA KOFUN 45
3 SMALL-SIZED KOFUN WITH LOWER MOUND IN THE 5TH CENTURY 48
4 THE LOCATION OF THE TUMULI IN MIDDLE KOFUN PERIOD 52
5 THE CLASS OF THE DECEASED BURIED TO THE KOFUN 53
6 CONCLUSION 56
REFERENCES AND NOTES 54
LIST OF THE REMAINS FROM THE SITE 57
ENGLISH SUMMARY 62
SUMMARIZED DATA OF THE EXCAVATION 66

FIGURES

1 LOCATION OF HIGASHI-OSAKA CITY AND THE SITE
2 AREA OF EXCAVATION
3 DISTRIBUTION OF KOFUN IN HIGASHI-OSAKA CITY
4 TRACES FOUND AT THE EXCAVATION
5 TRACES OF KOFUN NO.8 AND 9

6 LAYER OF KOFUN NO.8
7 FIGURES OF THE REMAINS FOUND AT KOFUN NO.8
8 SITUATION OF THE REMAINS OF NO.9
9 LAYER OF KOFUN NO.9
10 to 12 FIGURES OF THE REMAINS FOUND AT KOFUN NO.9
13 TRACE OF KOFUN NO.10
14 RANGES OF ROCKS SURROUNDING THE BOTTOM OF THE MOUND OF KOFUN NO.10
15 LAYER OF KOFUN NO.10
16 DETAIL OF THE RANGES OF STONES SURROUNDING THE SKIRT OF KOFUN NO.10
17 STONE CHAMBER OF KOFUN NO.10
18 STONES USED FOR CLOSING THE CHAMBER OF KOFUN NO.10
19 SITUATION OF THE REMAINS AT THE CORRIDER OF NO.10
20 to 21 FIGURES OF THE REMAINS FOUND AT KOFUN NO.10
22 GRAVE CONSISTED OF STONES SET IN RECTANGULAR FORM
23 TRACE OF KOFUN NO.11
24 RANGES OF STONES SURROUNDING THE SKIRT OF THE MOUND OF KOFUN NO.11
25 LAYER OF KOFUN NO.11
26 PLAN OF THE STONE CHAMBER OF KOFUN NO.11
27 STONE CHAMBER OF KOFUN NO.11
28 DETAIL OF THE STONE CHAMBER OF KOFUN NO.11
29 SITUATION OF THE REMAINS AT THE CHAMBER OF NO.1
30 to 31 FIGURES OF THE REMAINS FOUND AT KOFUN NO.11
32 PLAN OF THE STONE CHAMBER OF KOFUN NO.11 (left) AND SHIBAYAMA KOFUN (right)
33 FIGURES OF THE REMAINS FOUND AT SHIBAYAMA KOFUN
34 FIGURES OF THE SUE WARE FOUND AT KOFUN NO.11
35 CEMETRY AT SOJIJI SITE IN YAYOI TO KOFUN PERIOD
36 KOFUN CLUSTER AT NISHI-FUKUI SITE
37 FIGURES OF THE REMAINS FOUND AT NISHI-FUKUI SITE
38 THE PLAN OF THE DISPOSION BETWEEN KOFUN NO.53 TO NO.71
39 KOFUN CLUSTER AT UETSUKE

TABLES

1 LIST OF EACH KOFUN AT MIKANYAMA KOFUN CLUSTER
2 LIST OF EACH KOFUN AT SOJIJI SITE
3 LIST OF EACH YATOI GRAVE SURROUNDED BY A DITCH AT SOJIJI SITE
4 LIST OF EACH KOFUN AT NISHI-FUKUI SITE

5 to 14 LIST OF THE REMAINS

PLATES

1 VIEW FROM THE AIRPLANE
2 to 3 VIEWS OF THE AREA OF EXCAVATION
4 KOFUN NO.8 AND 9
5 KOFUN NO.9
6 to 11 KOFUN NO.10
12 to 16 KOFUN NO.11
17 to 21 REMAINS

SUMMARY

INTRODUCTION

Mikanyama 'Kofun' (tomb with mound which were built in the late 3 rd century to 7 th) Cluster is situated on a ridge of 80 to 120ms high above sea level, ranged from Higashi-toyoura-cho to Yamate-cho of Higashi-osaka City, Osaka Pref. ,Japan. By now, we regard the scope of the site as about 370m wide from east to west and 160m from north to south, and there existed 12 Kofun.

We surveyed 5,000m² of this site. It was the highest point of the scope, and we found 4 Kofun. The outline of each Kofun is as followed.

OUTLINE OF THE RESEARCH

We presume Kofun No.8 a square one of 7m wide in each side, thought it had been severely destroyed that we found no trace of mound nor a burial.

Some 'Sue Ware' (solid unglazed ware derived from the contemporary of Korean Peninsula) and a 'Haji Ware' (biscuit ware developed from Yayoi ones) was found from the east and the south ditches. According to the most reliable chronology of Sue Ware, the date of building No.8 can be determined to the late 5 th century.

Kofun No.9 was a circular one which ratio was about 9 m. It lost its whole mound, too. We don't think it had a rock chamber, for we found no fragment of a rock. The deceased had presumably been buried directly under the ground along with his or her wooden coffin.

This Kofun shared some part of its surrounding ditch with Kofun No.10. Many of its relics, most of them Sue Ware, were gathered upon the eastern part of this ditch.They seemed to have been set there deliberately. The type of its Sue Ware tells us that Kofun No.9 was built a little earlier than No.8.

As mentioned above, Kofun No.10 was neighboring at No.9. Its plan was circular,which ratio was 17m or so, and had a mound of 3 to 5ms high. At the northern part of the mound, its skirt had been reinforced and arranged by some ranges of stones. Around the mound existed an irregular shaped ditch as a drain.

There remained a rock chamber, though severely damaged. They had spread small stones all over on its floor, but not on its corrider's floor.

Most of the goods dedicated to the dead were stolen, so left were some fragments of Sue Ware in the chamber. From the chronological view of Sue Ware, there might have been three burials here. The remains also tells us that this Kofun was built in the late 6th century.

There was a trace of a burial beside the chamber of Kofun No.10, surrounded by the rocks arranged to form a rectangule. We suggest this was accompanied to the chamber. Though not disturbed, we found no remains here.

We regard they buried an infant who was a very close relative to the person buried in the chamber or to the one who had ordered to build this Kofun.

Kofun No.11 resembled with No.10 in many ways : it also had a circular mound, which was 12ms in ratio and 5m in hight, surrounded by some ranges of stones at northeastern part, and there was a rock chamber and an irregular shaped ditch. We concluded No.11 had been built in the early 6 th century, much earlier than No.10. The chamber and its corrider of this Kofun were also delibrately damaged, still left were some iron products, such as a halberd, two knives, three arrow-heads, and three nails. There also remainded many Sue Ware and a Haji Ware. And these relics tell us that three funerals might have been carried out in this chamber. But most interesting fact which drew our attention is the plan of this chamber. It shows us that it was one of the earliest of this type near around the site.

CONCLUSION

The rock chamber of Kofun No.11 was the second earliest one among the tumuli of this cluster: the first is named Shibayama Kofun which is classified as a 'Zenpo-koen-fun' (tomb with keyhole-shaped mound) and therefore presumed to have been built for the landlord of the area. But these tumuli we surveyed were rather small in size compared with the standard in those days. So we suggest that the ones who had been buried were not the persons of great power.

And the chronological order of the remains unearthened from these tumuli tell us that each Kofun was built in due order. The absence of the ornaments for horses shows us that the buried person were not the ones from Korean Peninsula.

As a result, we concluded that each Kofun had belonged to a member of a certain family of a landed class near around.

Unlike their contemporaries, none of them used 'Haniwa' (biscuitfigurine set on the mound of a Kofun) for their Kofun. They had kept building the tumili for about 150 years, till the first half of the 7th century.

報 告 書 抄 録

ふりがな	みかんやまこふんぐん
書名	みかん山古墳群
副書名	府営枚岡公園駐車場建設に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1997－2
編著者名	奥 和之
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540 大阪市中央区大手前2丁目
発行年月日	1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
みかんやまこふんぐん みかん山古墳群	ひがしおおさかし 東大阪市 ひがしとようらちょう 東豊浦町地内	27227	49	34° 40′ 16″	135° 39′ 25″	1997年8月18日～ 1998年3月31日	3,600	府営枚岡公園駐車場建設

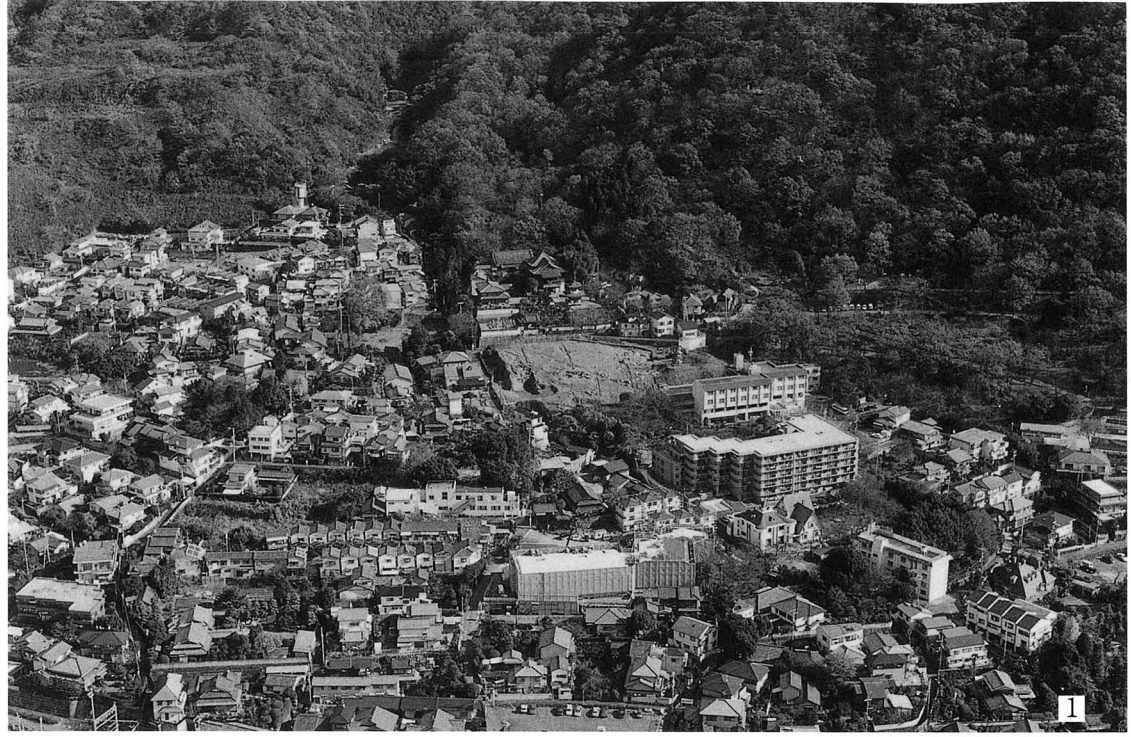
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みかん山古墳群	古墳	古墳時代中期	8号墳	須恵器 土師器	
		古墳時代中期	9号墳	須恵器 土師器 鉄器	
		古墳時代後期	10号墳	須恵器 土師器 鉄器	横穴式石室 箱式石棺
		古墳時代後期	11号墳	須恵器 土師器 鉄器	横穴式石室

図　　版

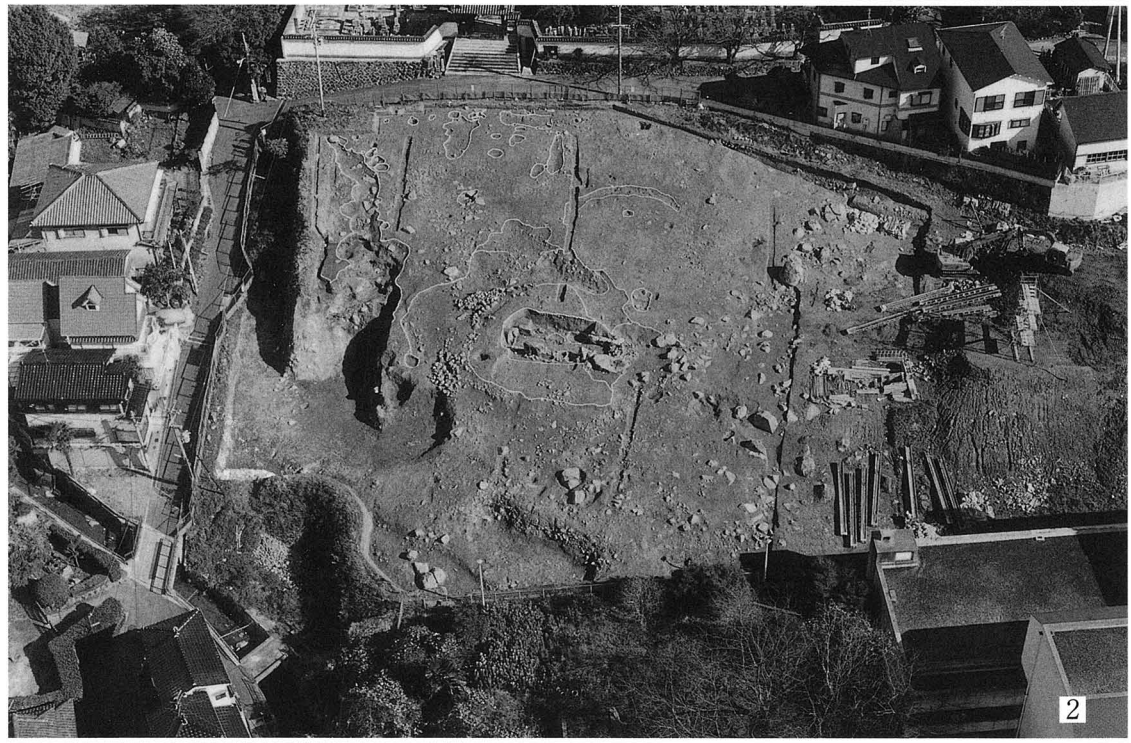
図版1　調査区全景（空中写真）

図版 2

調査地遠景



1.遠景（西上空より）



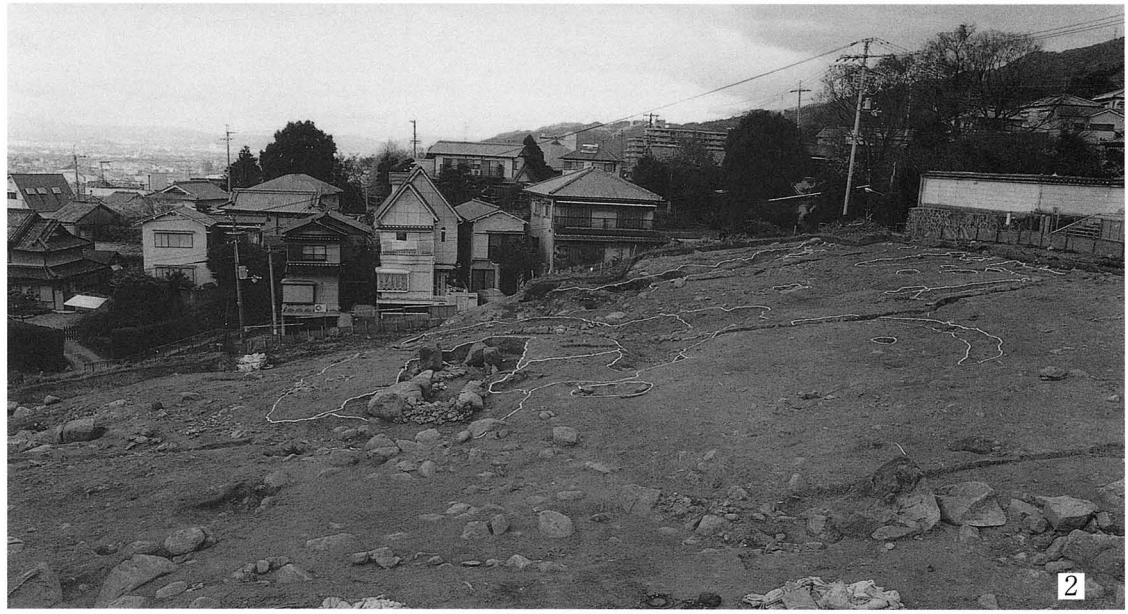
2.A区全景（西上空より）

3.調査地全景（西上空より）

図版３

全景

１.A区東側全景
（北西より）



２.A区全景（南より）

３.B区全景（南より）

図版４

８･９号墳

１．８･９号墳全景
（南より）

２．８号墳全景（北西より）

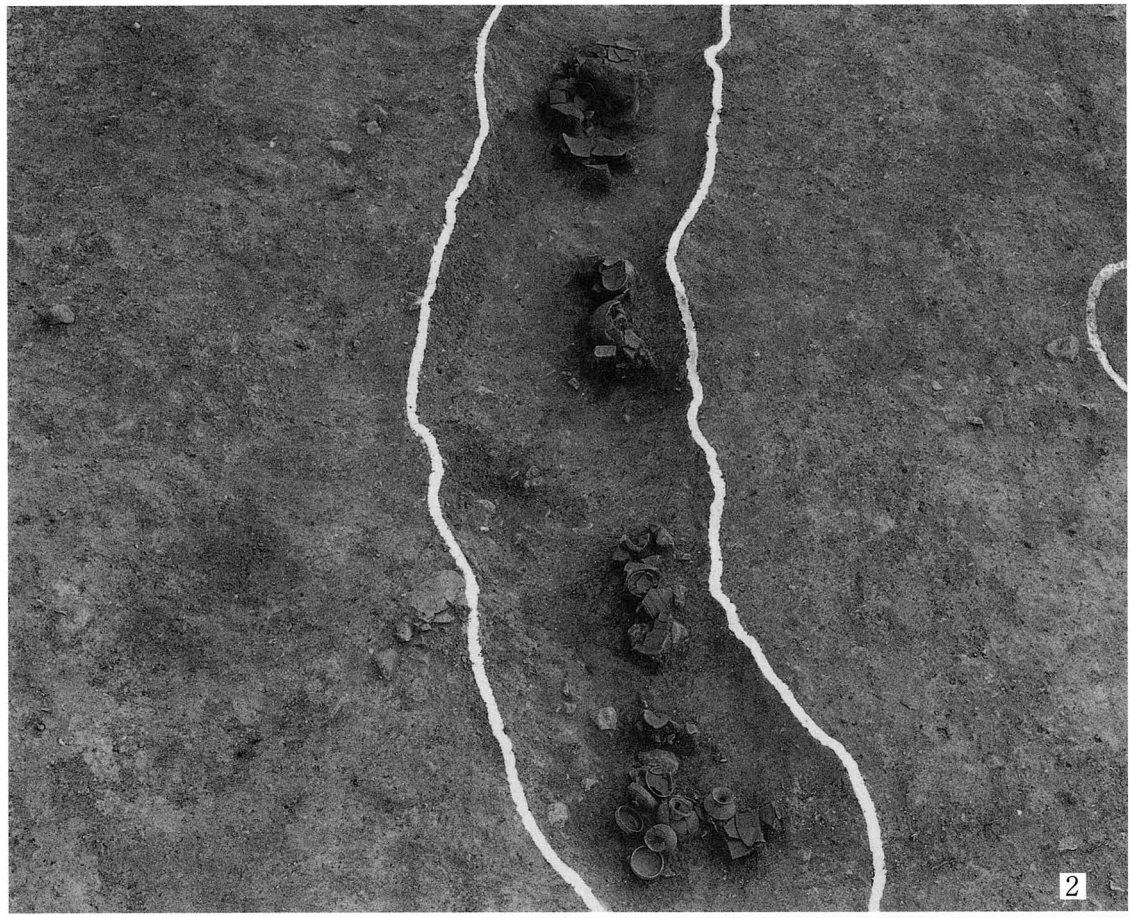
３．８号墳南周溝断面
（西より）

４．８号墳東周溝断面
（南より）

図版 5

9 号墳

1．全景（北西より）



2．周溝遺物出土状況
（北より）

3．周溝断面（南より）

4．周溝遺物出土状況細部
（西より）

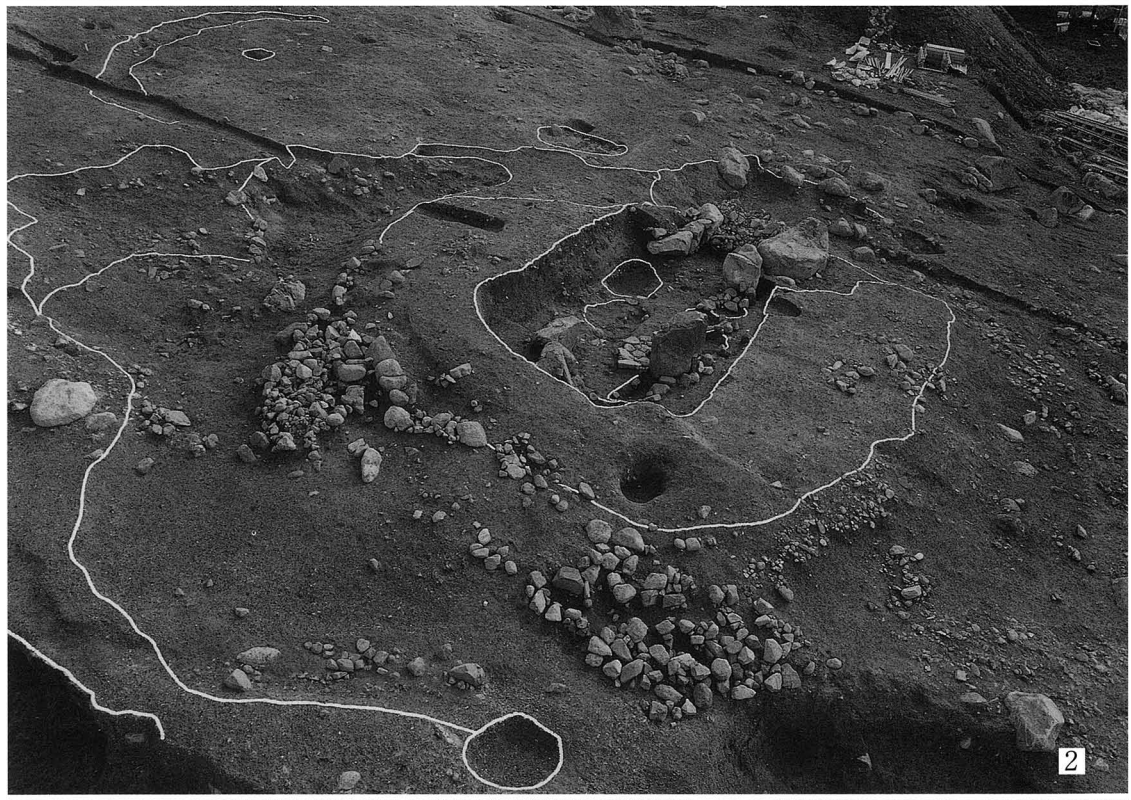
5．周溝遺物出土状況細部
（西より）

6．周溝遺物出土状況細部
（東より）

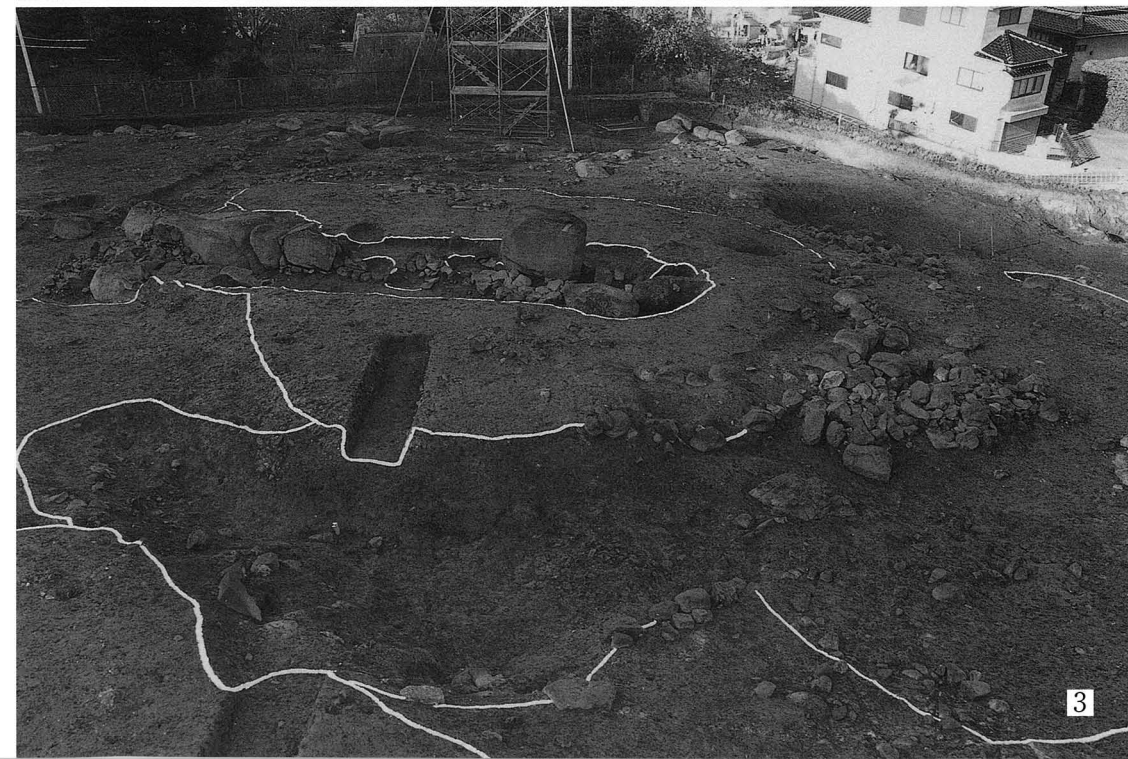
図版 6

10 号墳

1.全景（南より）



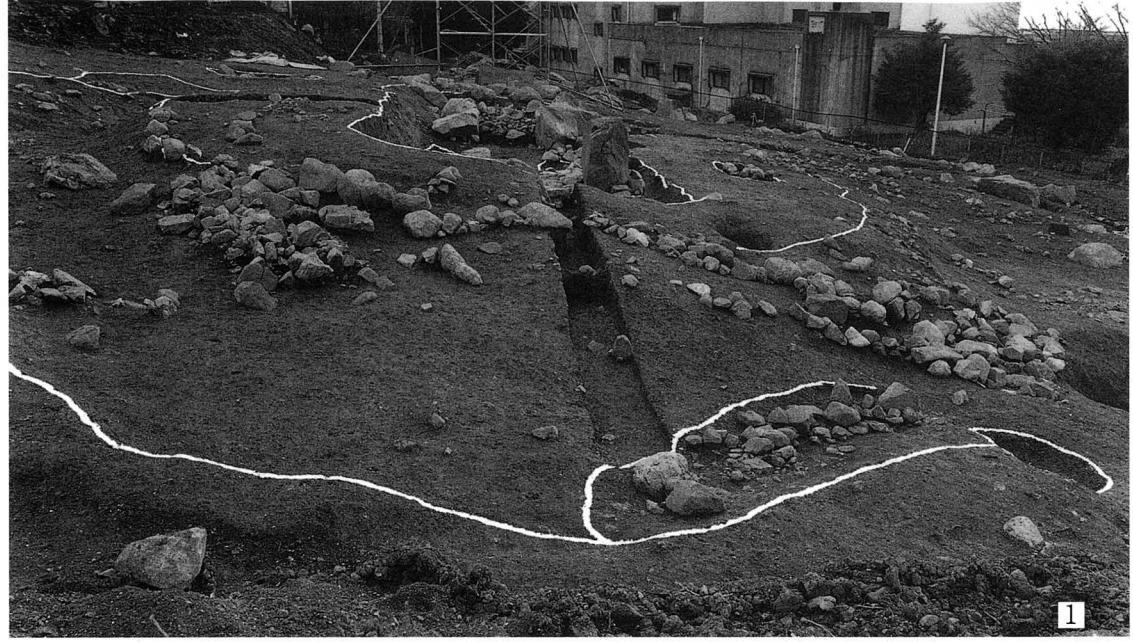
2.全景（北西より）



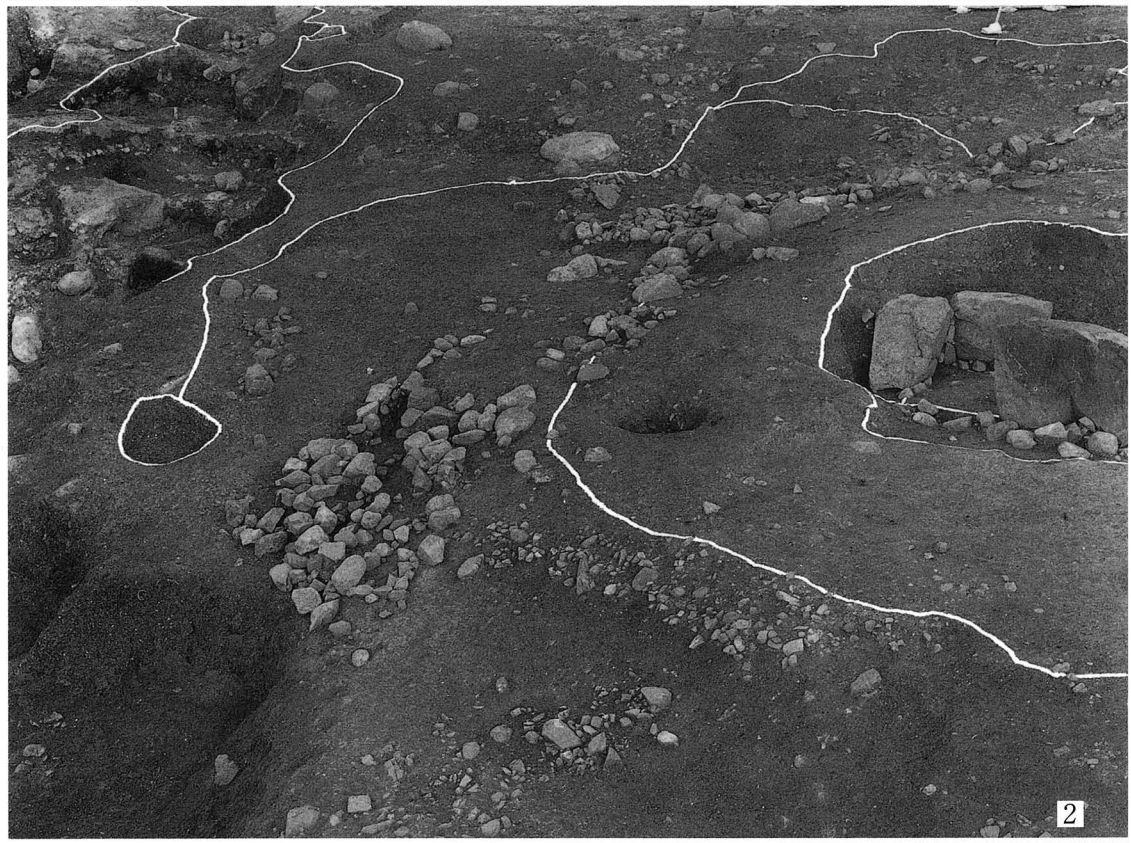
3.全景（西より）

図版７

10号墳



1.列石全景（北より）

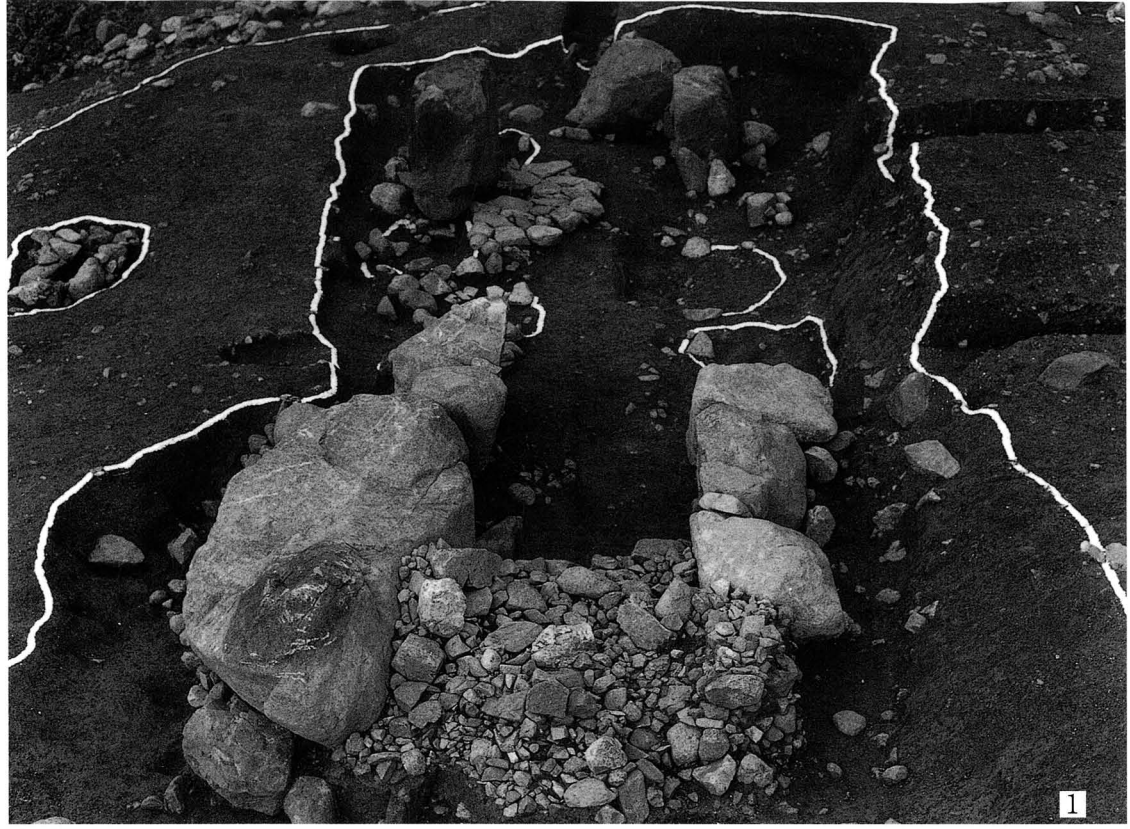


2.列石全景（西より）

3.列石細部（北西より）

図版 8

10 号墳



1.石室全景（南より）

2.石室内部全景（北より）

3.石室全景（西より）

図版 9

10 号墳

1.閉塞石（南より）

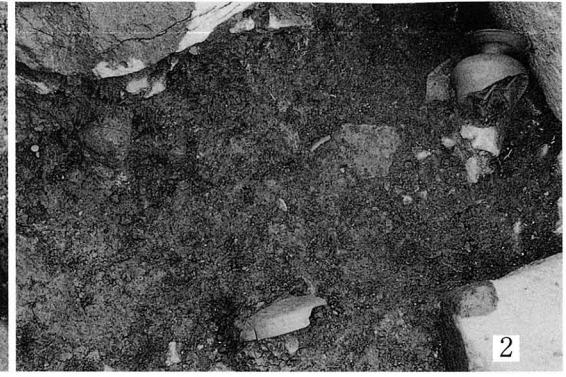
2.閉塞石（北より）

3.閉塞石断面（西より）

図版 10

10 号墳

1．石室内遺物出土状況
（西より）
2．石室内遺物出土状況
（北より）

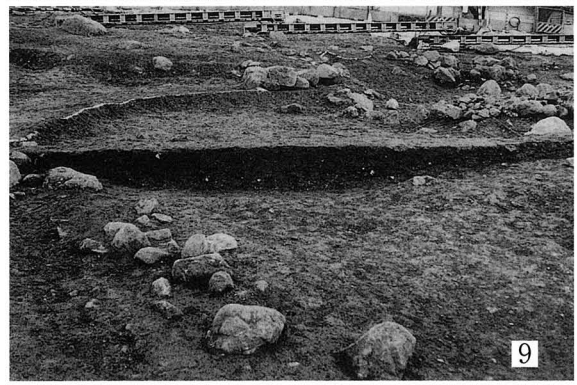


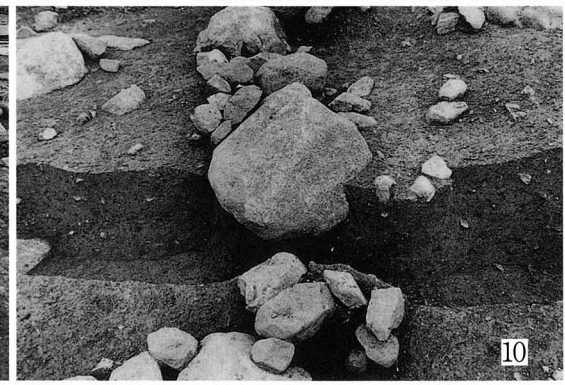
3．石室内遺物出土状況
（東より）
4．東周溝遺物出土状況
（西より）

5．東周溝遺物出土状況
（北より）
6．東周溝断面
（南より）

7．奥壁裏込断面
（西より）
8．左側壁裏込断面
（北より）

9．北周溝断面
（西より）
10．列石断面
（西より）



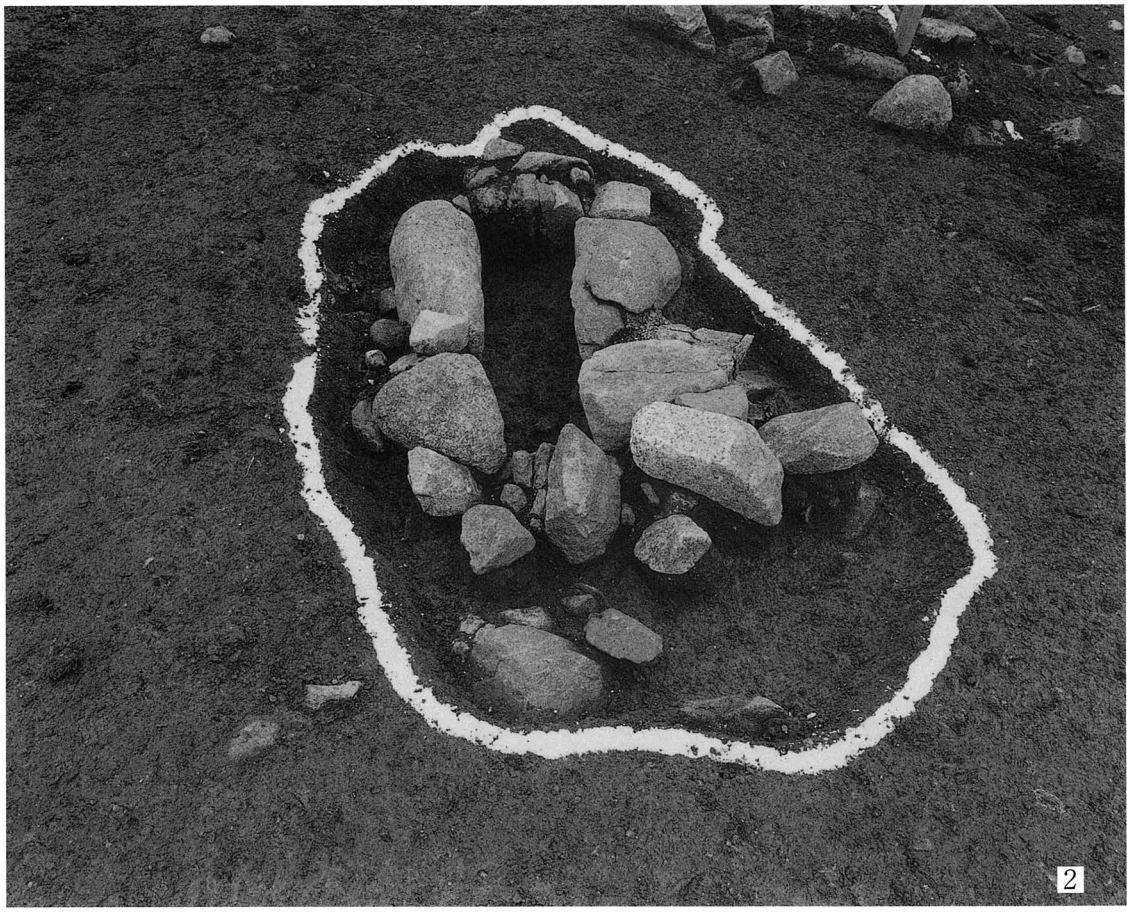


11．西墳丘裾部断面
（南より）
12．西墳丘裾部断面細部
（南より）

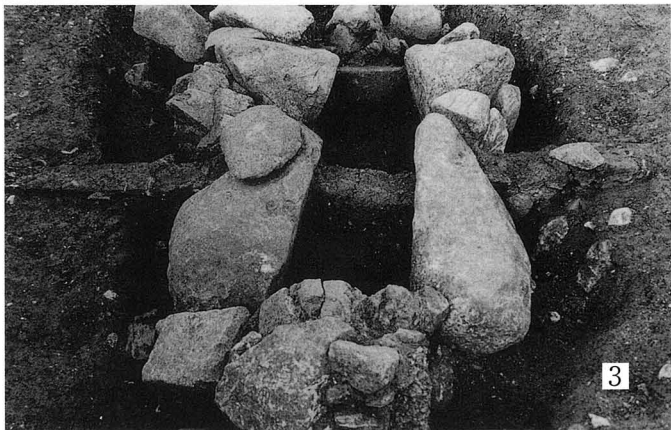
図版 11

10 号墳

1．箱式石棺全景
（西より）



2．箱式石棺全景
（北より）

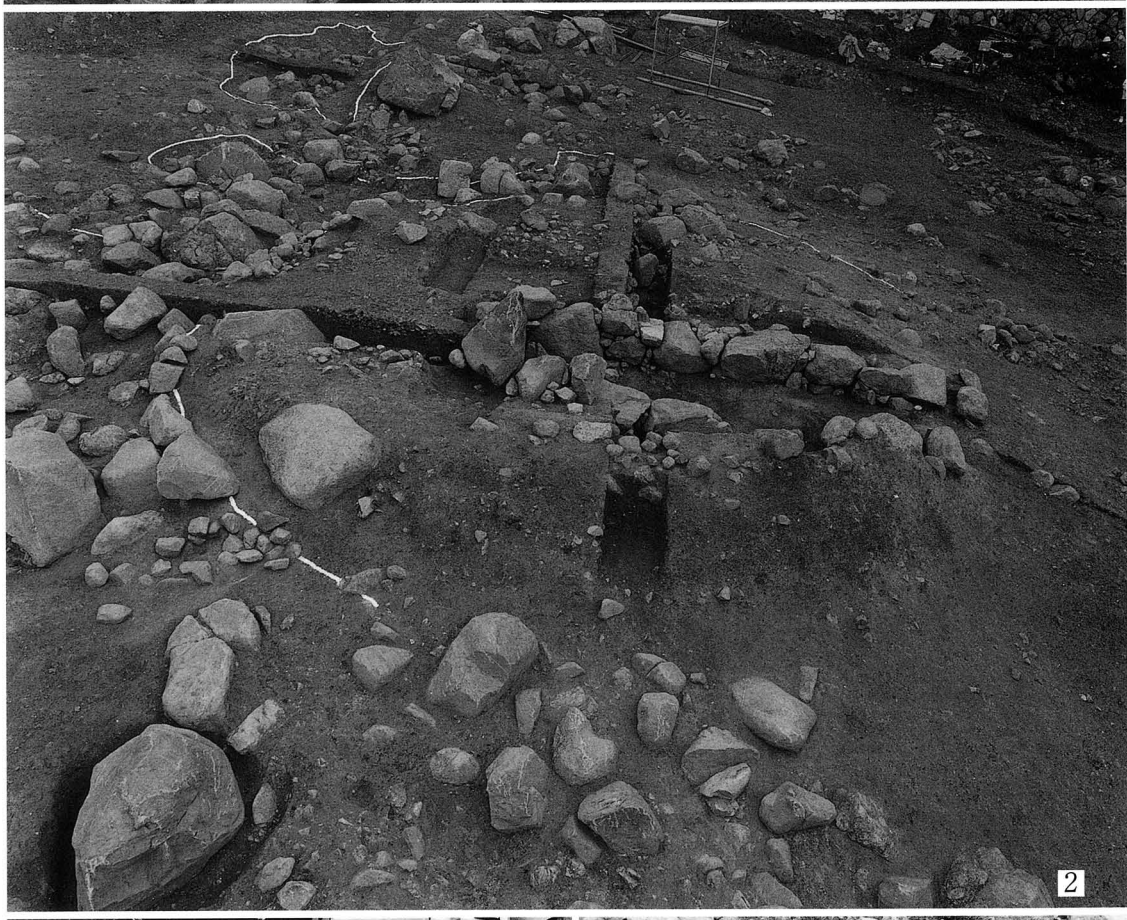


3．箱式石棺土層断面
（南より）

図版 12

11 号墳

1.全景（南より）



2.全景（西より）

3.北周溝断面（西より）

4.北周溝断面細部（西より）

図版13

11号墳

1.全景（北より）

2.石室全景（西より）

3.奥壁裏込断面
（西より）

図版 14

11 号墳

1．石室全景（南より）

2．奥壁（南より）

3．西側墳丘盛土断面
（南より）

4．東側墳丘盛土断面
（南より）

図版 15

11 号墳

1.列石全景（北より）

2.列石全景（南西より）

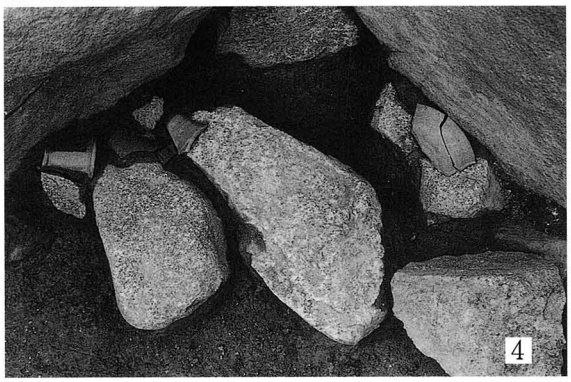
3.列石細部（北より）

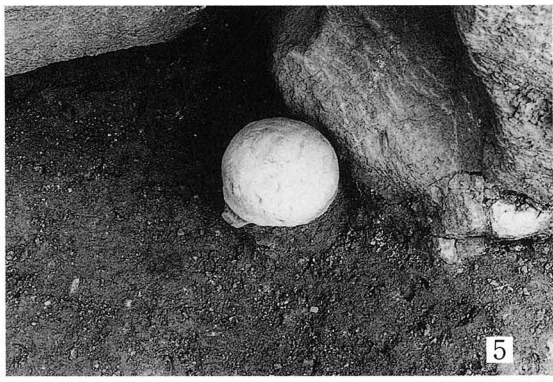
図版 16

11 号墳

1．玄室遺物出土状況
（南より）

2．玄室遺物出土状況細部
（南より）
3．玄室遺物出土状況細部
（南より）





4．玄室遺物出土状況細部
（南より）
5．玄室遺物出土状況細部
（西より）

6．玄室遺物出土状況細部
（西より）
7．羨道部遺物出土状況
（西より）

8．羨道部遺物出土状況
（南より）
9．南西墳丘裾部遺物出土状況
（南より）

図版17　出土遺物　8・9号墳

1

3

9

10

11

12

13

14

15

16

図版18　出土遺物　9号墳

17

18

19

22

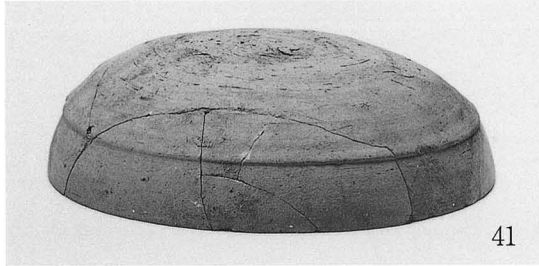
図版19　出土遺物　10・11号墳

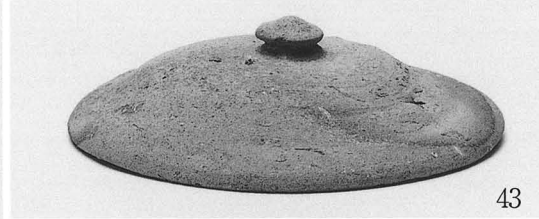
26

28

29

30

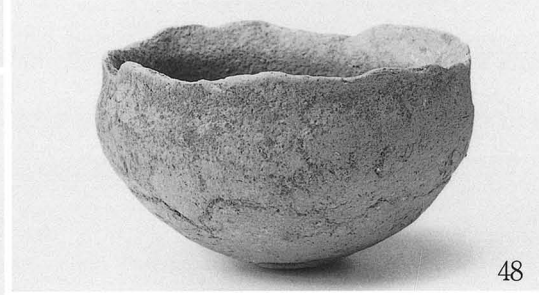

41


43

42

44

45


48

46

47

図版20　出土遺物　11号墳

49

50

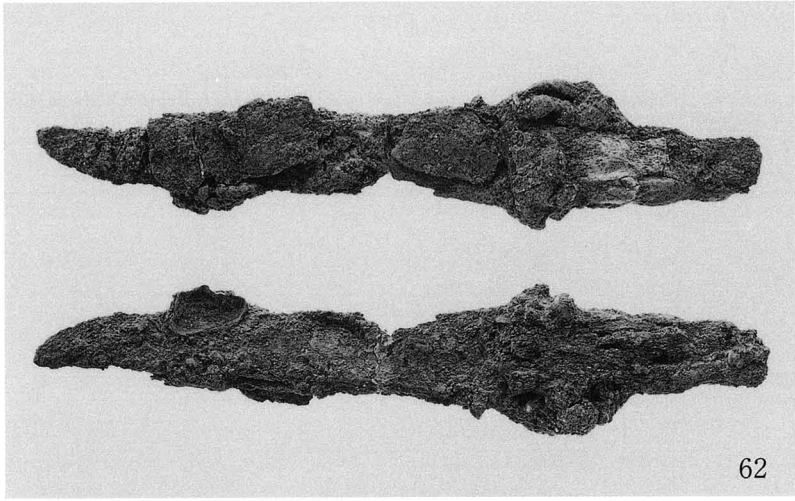
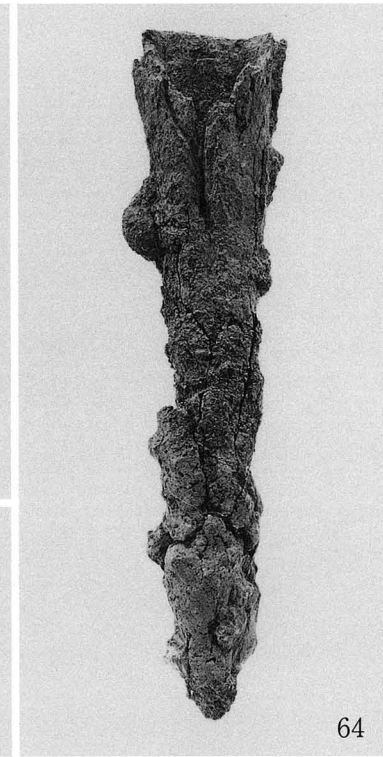
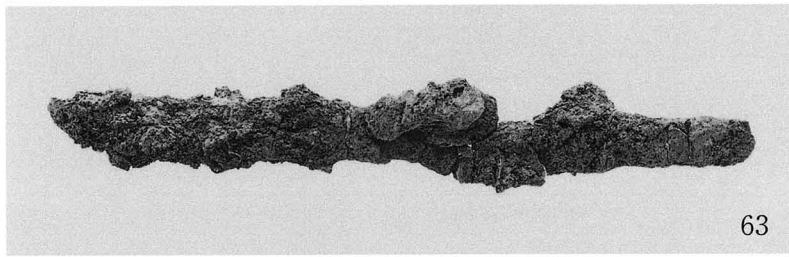
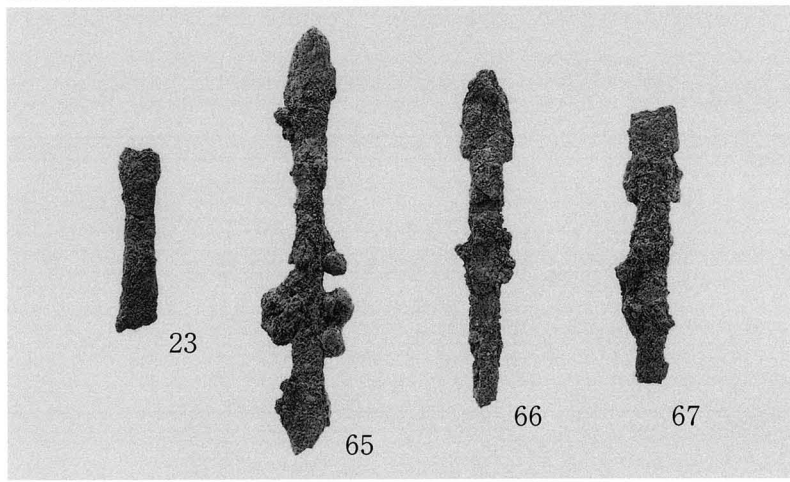
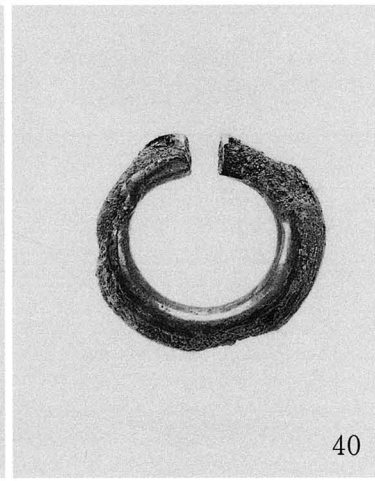
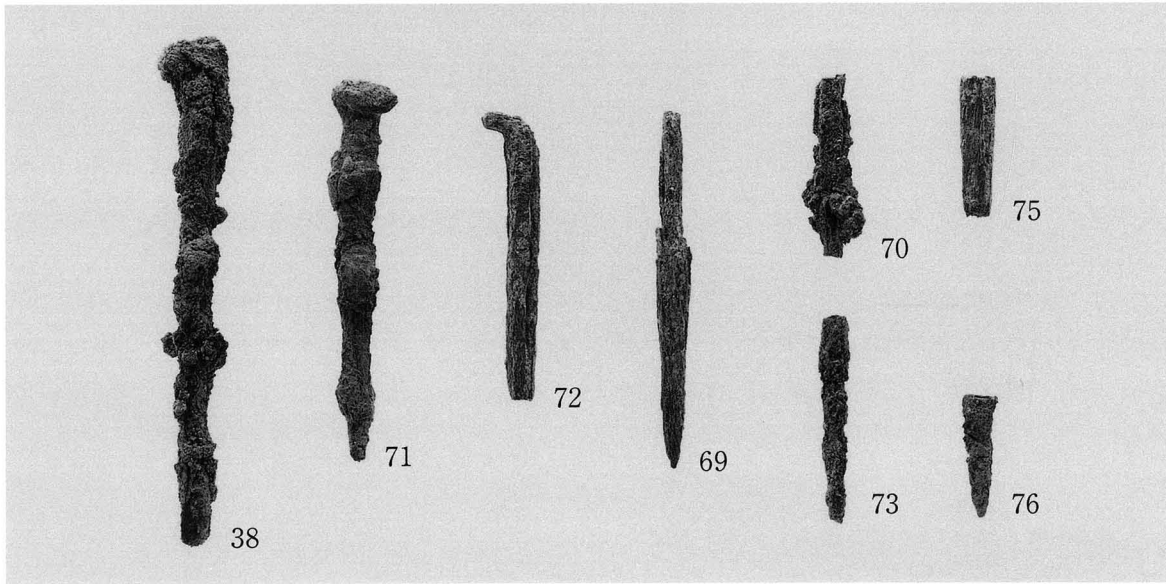
52

55

60

58

56

57

図版21　出土遺物　金属器